# タンチ山（双子塚）古墳

## 国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

# タンチ山(双子塚)古墳

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　盾形埴輪

# 序

温暖な気候・風土に恵まれた瀬戸内沿岸にあって、最大規模の平野を持つ松山市には、その恵まれた環境のもと、幾多の人々のくらしが営まれ、その足跡が刻まれてきました。

本書は、松山市の東部、久米地域にかつて所在したと伝えられるタンチ山（双子塚）古墳の伝承地周辺において、個人住宅の開発に伴う事前調査として、平成４年度に国庫補助を受けて実施した発掘調査の報告書です。

この古墳は、太平洋戦争末期に旧陸軍による飛行場の建設工事に伴い消滅した推定 60m の古墳で、石室は南に開口する羨道を持ち、玄室には奥壁面中央位置に巨石一枚の石棚を構築し、その石棚には須恵器や鎧が置かれていたと伝えられています。

この度の発掘調査は小規模な範囲であったため、その全容を明らかにするには至りませんでしたが、発見された埴輪などからこの古墳が６世紀初頭に築造された、久米地域でも数少ない古墳であったことが明らかになりました。

これにより、この古墳の西方、1.1km に位置する国指定史跡「久米官衙遺跡群」の成立に先立つ６世紀初めには、既にこの地域に大きな権力を持つ首長が誕生していたと見られ、松山の古墳時代における社会の様相を考える上で欠く事の出来ない成果をあげることができたと考えています。

今後もこのように、既に破壊されてしまった遺跡の僅かな痕跡を追いつつ、その価値を比較し検証することが、今に残されてきた貴重な文化遺産を守ることにつながるものと信じてやみません。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の作成に際しまして、数々のご指導とご協力をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が学術研究はもちろん、教育や歴史文化の振興のため広くご活用いただけることを心より祈念いたします。

平成 22 年 3 月 31 日

松山市教育長

山　内　　泰

# 例　言

1．本書は、平成４年度に松山市教育委員会が個人住宅開発に伴う事前調査として実施した、愛媛県松山市鷹子町にかつて所在したタンチ山（双子塚）古墳の推定地の一部に係る調査の成果について、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが報告書としてまとめたものである。

2．発掘調査並びに基礎的な整理作業については、埋蔵文化財緊急調査国庫補助を受け、松山市教育委員会文化財課が担当した。

［発掘調査］　平成４年　８月 20 日～平成４年 10 月 16 日

［屋内作業］　平成４年 10 月 17 日～平成５年　３月 31 日

［調査担当］　重松佳久・大西京子（松山市教育委員会文化財課）

［遺構写真撮影］　重松佳久

3．本書の刊行に向けての整理作業並びに作成業務は、平成 19 年度国庫補助事業として松山市教育委員会から、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが受託して実施した。

［受託期間］　平成 19 年７月２日～平成 20 年３月 31 日

4．本書の編集執筆に係る埋蔵文化財センターの分担及び協力者は、以下の通りである。

［編集・執筆］　重松佳久　［編集協力］　小笠原善治

［遺物写真撮影・写真図版作成］　大西朋子

［整理作業監修］　山之内志郎

［作図等］　田﨑真理　［協力］　多知川富美子、木下奈緒美、岡本邦栄、髙尾久子、金子育代、中村紫、本多智絵、桐間ゆかり、末光美恵、石川千代美、岡田弥生

［出土遺物助言］　山内英樹（松山市都市整備部）、栗田茂敏、山之内志郎、吉岡和哉

5．本書にかかわる遺物及び記録類は、松山市埋蔵文化財センターに収蔵、保管されている。

6．報告書抄録は巻末に掲載している。

# 本　文　目　次

**第１章　はじめに** ……1
1.調査に至る経緯
2.組織

**第２章　古墳の立地と環境** ……2
1.古墳をめぐる自然環境
2.周辺古墳の名称と歴史環境
3.参考文献資料並びに周辺住民の伝承

**第３章　調査の手順と手法** ……11
1.調査以前の状況
2.調査の進め方
3.調査グリッドの設定

**第４章　層位と遺構・遺物** ……13
1.層位
2.遺構と遺物

**第５章　出土遺物が語るもの** ……26
1.埴輪の出土状況
2.円筒埴輪
3.朝顔形埴輪
4.盾形埴輪
5.土層から見た古墳のあり方
6.埴輪の出土分布から見た古墳のあり方
7.久米周辺の埴輪を持つ古墳

**第６章　まとめ** ……47

# 挿　図　目　次

## 第２章　古墳の立地と環境

第１図　調査地周辺遺跡分布図（縮尺１：30,000）……3
第２図　周辺地域の前方後円墳と小野窯址群……5
第３図　昭和 24 年頃の航空写真（滑走路の痕跡を残す）……7
第４図　滑走路建設工事の推定範囲図（縮尺１：7,000）……8
第５図　天地山古墳復元図……9
第６図　天地山古墳巨石塚（大久米之命の墓）回想図……9

## 第３章　調査の手順と手法

第７図　調査地位置図（縮尺１：1,500）……11
第８図　調査地全測図・グリット配置図（縮尺１：150）……12

## 第４章　層位と遺構・遺物

第９図　調査区東壁土層図（縮尺１：60）……14
第10図　調査区南壁土層図（縮尺１：60）……15
第11図　調査区西壁土層図（縮尺１：60）……16
第12図　遺物出土状況図（縮尺１：150）……17
第13図　遺構配置図（縮尺１：100）……18
第14図　ＳＤ１測量図（縮尺１：50）……20
第15図　ＳＤ２測量図（縮尺１：40）……21
第16図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：10・１：3）……22
第17図　ＳＤ４・ＳＰ１測量図（縮尺１：40・１：20）……23
第18図　ＳＤ５測量図（縮尺１：30）……24
第19図　ＳＸ１測量図（縮尺１：20）……25

## 第５章　出土遺物が語るもの

第20図　調査地中央部遺物出土状況図（縮尺１：100）……30
第21図　円筒埴輪接合状況図（縮尺１：50）……31
第22図　朝顔形埴輪出土状況図（縮尺１：50）……32
第23図　盾形埴輪出土状況図（縮尺１：50）……33
第24図　円筒埴輪実測図（1）（縮尺１：4）……34
第25図　円筒埴輪実測図（2）（縮尺１：4）……35
第26図　円筒埴輪実測図（3）（縮尺１：4）……36

第27図　円筒埴輪実測図（4）（縮尺1：4）……37
第28図　円筒埴輪実測図（5）（縮尺1：4）……38
第29図　円筒埴輪実測図（6）（縮尺1：4）……39
第30図　円筒埴輪実測図（7）（縮尺1：4）……40
第31図　朝顔形埴輪実測図（縮尺1：4）……41
第32図　盾形埴輪実測図（1）（縮尺1：8・1：4）……42
第33図　盾形埴輪実測図（2）（縮尺1：4）……43
第34図　弥生土器・土師器・瓦質土器実測図（縮尺1：4・1：3）……44
第35図　染付・白磁実測図（縮尺1：3）……45
第36図　陶器・石製品実測図（縮尺1：3）……46
第37図　タンチ山（双子塚）古墳推定復元図（縮尺1：1,000）……48

# 表　目　次

表1　出土遺物観察表……51
表2　出土遺物観察表……52
表3　出土遺物観察表……53
表4　出土遺物観察表……54
表5　出土遺物観察表……55

# 写真図版目次

図版1　1．調査区全景（西より）
　　2．埴輪出土状況①（南東より）
図版2　1．埴輪出土状況②（西より）
　　2．ＳＤ1検出状況・埴輪出土状況（北西より）
図版3　1．ＳＤ2検出状況・埴輪出土状況（北より）
　　2．円筒埴輪出土状況（東より）
図版4　1．出土遺物（土師器：1、円筒埴輪）
図版5　1．出土遺物（円筒埴輪）
図版6　1．出土遺物（円筒埴輪）
図版7　1．出土遺物（円筒埴輪：上、朝顔形埴輪：下）
図版8　1．出土遺物（盾形埴輪）
図版9　1．出土遺物（盾形埴輪）
図版10　1．出土遺物（弥生土器：83～89、土師器：90・91、瓦質土器：92・93、磁器：94・95）
図版11　1．出土遺物（磁器：96～98・100～102、陶器：103・104、石製品：109）

# 第１章　はじめに

## １．調査に至る経緯

申請地は、松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「No.129 鷹子遺物包含地② 」内に所在する。なお、同所を含む周辺は、久米小学校校庭の東方に所在し、かつてタンチ（双子）山古墳と呼ばれ、太平洋戦争末期に旧陸軍による飛行場の建設に伴い消滅したとされる消滅古墳の推定地である。

平成３（1991）年９月25日、土地所有者佐々木高氏より松山市鷹子町200 － 1（面積264.63㎡）の住宅建設に伴う周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等届出書、埋蔵文化財確認願及び試掘・確認調査申込書が松山市教育委員会（以下、「市教委」という）へ提出された。

市教委は、申請に基づき、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターに依頼し、平成３年11月８日から同月11日にかけて、土地所有者代理人の立会のもと試掘・確認調査を実施し、多量の埴輪片を含む遺物包含層を検出した。

この結果をもって市教委は、試掘・確認調査報告書とし、土木工事等届出書に添付して愛媛県教育委員会（以下、「県教委」という）に進達し、平成３年11月21日、県教委より、事前に本発掘調査が必要であるとの通知が出された。

土地所有者から調査事業に対する依頼を受けた市教委は、平成４年度市内遺跡発掘調査事業（国庫補助事業）として実施することとし、平成４年８月20日から平成４年10月16日までの間、発掘調査を実施したものである。

## ２．組　織

■　松山市教育委員会

調査時（平成４年４月１日現在）

| | |
|---|---|
| 教育長 | 池　田　尚　郷 |
| 生涯教育部長 | 渡　辺　和　彦 |
| 次　長 | 三　好　敏　彦 |
| 文化財課長 | 松　平　泰　定 |
| 係　長 | 小　池　秀　雄 |
| 主　事 | 重　松　佳　久 |
| 臨時職員 | 大　西　京　子 |

刊行時（平成21年４月１日現在）

| | |
|---|---|
| 教育長 | 山　内　　泰 |
| 事務局長 | 藤　田　　仁 |
| 企画官 | 古　鎌　　靖 |
| 企画官 | 青　木　　茂 |
| 文化財課課長 | 家　久　則　雄 |
| 主　幹 | 森　　正　経 |
| 副主幹 | 三　好　博　文 |

■　財団法人松山市生涯学習振興財団（平成21年４月１日現在）

| | | |
|---|---|---|
| 財団法人松山市生涯学習振興財団 | 理事長 | 中　村　時　広 |
| | 事務局長兼館長 | 松　澤　史　夫 |
| 埋蔵文化財センター | 所長兼総務課長 | 白　石　修　一 |
| | 次　長 | 折　手　　均 |
| | 次　長 | 重　松　佳　久 |
| | 調査担当リーダー | 栗　田　茂　敏 |
| | 調査員 | 大　西　朋　子(写真担当) |

# 第２章　古墳の立地と環境

## １. 古墳をめぐる自然環境

松山平野は、平野のほぼ中央部を西流する重信川（旧伊予川）とその支流によって形成された扇状地と幾多の小河川による氾濫堆積や瀬戸内の海浜堆積物などの堆積作用によって形成された沖積低地で、その規模は、東西約 20㎞、南北約 17㎞を測る。

特にこの平野は、古来より瀬戸内海気候にあって、年間を通して 1,300mm と雨量は少なく、それ故水量も乏しく短い小河川が多い。その中にあって石鎚山系から延びる高縄山塊から流れ出でて、比較的流量が安定し、松山平野を貫流する一級河川重信川水系の石手川とその支流小野川がある。

この小野川中流域の小野・久米地区一帯は、河川活動による開析作用によって、平野でも有数の河岸段丘が形成され、緩やかに西に傾斜する中位・低位の段丘が広域に残されるなど、地形的にも安定した平坦地が広がっている。本調査地はこの平坦地、山裾から離れた標高約 50m の低丘陵上に位置する。

旧石器時代よりこうした利水条件の整った段丘平坦面は、人間生活の舞台として現代にまで及ぶ活動空間であり、生活・生産・墓域等の各時代の人々の活動痕跡がそれぞれの歴史を踏まえて残されてきている。特に古墳時代以降の社会構造の発展に伴う開発期を境に、大規模な都市計画的な地割が刻まれ、古代の官衙施設が造営されるなど、平野運営の政治的な中心地域として利用されてきたことが窺い知れる。

## ２. 周辺古墳の名称と歴史環境

古代伊予国は、平安時代中期の「和名類聚抄」の国・郡名一覧によれば 14 郡からなり、松山平野には北域の風早を除き和気、温泉、久米、伊予の４郡と浮穴の一部があったとされる。これらの明確な郡域については、資料が乏しく正確な範囲を指し示すことは出来ないが、久米の郡域は、概ね石手川（旧湯山川）以南から重信川（旧伊予川）に挟まれた、現在の松山市域の東南部一帯に相当する地域と考えることができる。

５世紀後半から６世紀後半までの松山平野では、大型の前方後円墳の多くがこの久米地域に集中して造られており、これまでに三島神社古墳、経石山古墳、波賀部神社古墳、観音山古墳、播磨塚天神山古墳、二つ塚、西山古墳等の前方後円墳の存在が知られている。

### 三島神社古墳

その中でも 1971 年に発掘調査が行われた「三島神社古墳」は、6 世紀前半の前方部を北に向けた全長 42.5m の前方後円墳で、後円部主体の南に開口する横穴式石室内からは多量のガラス玉、臼玉、銀製空玉、金銅装の馬具などが発見された。さらに前方部墳丘端には、円筒・朝顔形埴輪とともに須恵器片が確認され、石室床面には石組みの排水溝施設が設けられていた。こうした石室構造の類似性から畿内の影響が指摘される古墳であったが、調査後の住宅開発により消滅している。

### 経石山古墳

また、この三島神社古墳の西方 500m に近接して、県指定史跡「経石山古墳」がある。この古墳は、前方部を西に向ける全長 48.5m の前方後円墳で、前方部があまり開かない墳形から５世紀中頃と想定されてきたが、1990（平成 2）年に近接する住宅建設に伴って行われた後円外周部の調査では、それ

第１図　調査地周辺遺跡分布図（S=1:30,000）

よりやや下る時期が与えられている。

播磨塚天神山古墳

1998（平成 10）年に行われた久米東部の播磨塚丘陵に位置する墳丘の発掘調査では、これまで円墳と考えられていた古墳が６世紀前半の築造、最終埋葬が６世紀後半に時期比定される全長 32.5m の前方部を北に向けた２段築成の前方後円墳であったことが確認され、新たに「播磨塚天神山古墳」と名付けられた。この古墳の主体は、南開口する後円部の横穴式石室、括部の墳丘主軸に直交する竪穴式石室で、どちらも盗掘並びに開墾により大きく破壊されていたものの、床面直上には須恵器、鉄鏃、金銅装の馬具、金環・銀環を連結させた耳環、銀製空玉などの玉類、刀子飾金具など、多くの副葬品が確認された。中でも刀子飾金具は、銅板に金板を被せ表面を連珠文と魚々子文で紋様構成した装飾金具で、在地では類例のない資料であった。また、墳丘調査の結果、墳丘をめぐる埴輪は、前方部西側のテラス状方形区画に形象埴輪が立てられ、段築テラス部分には円筒埴輪列が廻るように配置され、葬送の景観が復元されている。さらに後円部の築造開始直後から前方部の盛土開始までの段階に後円部北側では土師器の壺形土器を用いた祭祀行為の痕跡が確認されるなど、前方後円墳の築造と祭祀に関わる貴重な事例が報告されている。

葉佐池古墳

一方、この播磨塚丘陵に続く北方の丘陵端部では、開墾途中、偶然に発見された「葉佐池古墳」がある。1992（平成 4）年から約 15 年間にも亘る断続的な重要遺跡調査で、６世紀半ばの全国的にも類例を見ない組み合わせ木棺や最終埋葬の痕跡が良好な形で残された未盗掘の石室を持つ、一墳丘多石室の長円墳（全長 40m･幅 24m）の有力氏族の墓であることが突き止められた。この調査成果により、墳丘造営の過程や石室内の葬送儀礼、墳丘祭祀の様子が明らかにされるとともに、被葬者の遺骸に付着した肉ハエのさなぎなどから、これまでの調査では明らかにされてこなかった殯のあり方など、新たな後期古墳の葬送に関わる知見が蓄積された。

ただ、これら以外の平野の大型古墳の保存状況は、現在著しく悪化してきており、僅かに県指定史跡経石山古墳、葉佐池古墳以外の三島神社古墳を含め、特に波賀部神社古墳までの間（約一世紀間）に造営されたと見られる前方後円墳の多くは、既に壊滅的な状況に陥っている。

タンチ山（双子塚）古墳

本調査地は、その中の一つ、タンチ山（双子塚）古墳と呼ばれる消滅古墳の推定地であり、旧知によればこの古墳は、現久米小学校校庭の東にあって、太平洋戦争末期の昭和 20 年４月から８月にかけて、軍による滑走路の建設工事に伴い消滅したと言われている。

工事に携わった周辺住民などの伝え聞くところによると、この古墳の墳丘は瓢箪型で、奥壁は一枚石であったと言い、棚が付けられていた（故柳原多美雄氏）とも伝えられている。

また、この古墳の確定位置についても、久米小学校敷地から東域 300 ～ 400m 程度で、東西に走る江戸期の金比羅街道より南に所在したと言われるが、現地は宅地化が進み、西に向ってなだらかに傾斜する平坦な地形となっていて、視覚的には墳丘盛り土や土地区割り等その痕跡さえも現況では確認出来ない景観となっている。

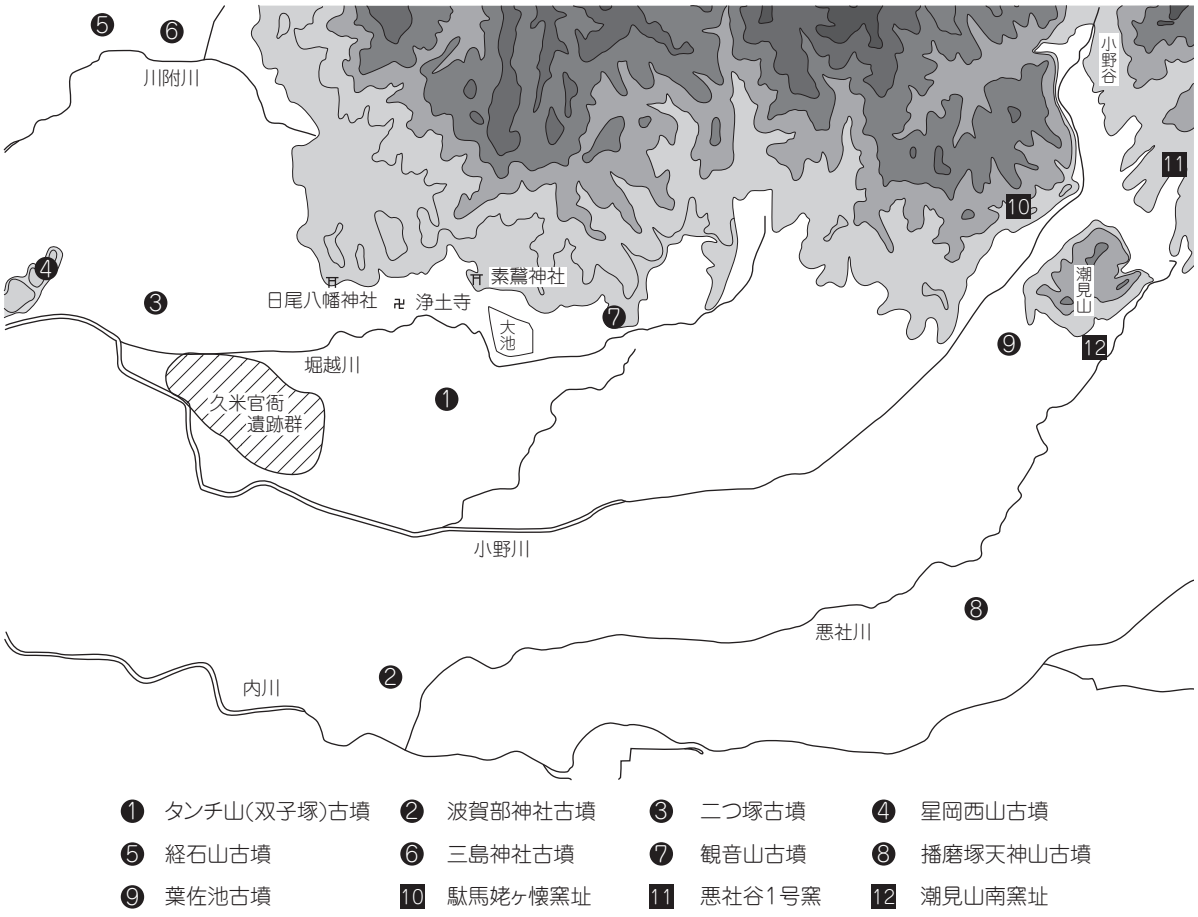
久米官衙遺跡群

時期は下るが、この古墳があったと伝えられる推定地の南西方向約１㎞には、昭和 54 年４月に史跡指定され、平成 15 年８月 27 日に追加指定並びに名称変更された国指定史跡「久米官衙遺跡群」が

ある。

この官衙遺跡群は、初期官衙施設以前の６世紀末から９世紀初頭の郡衙施設の終焉にかけて、その施設的変遷を段階的に追う事が可能な官衙施設群であり、「久米評」名線刻須恵器の出土などからも評衙から郡衙への遺構的変遷を追う事が出来る全国的にも貴重な官衙施設と評価されており、古代松山平野の政治的中枢地として重要視されている。

この官衙施設群を取り囲むように前方後円墳が造営され、さらには北東丘陵部及びその縁辺に、後出する古墳時代後期から終末にかけて多くの群集墳が広域に造営されている。また、南側を流れる小野川の上流域には、松山平野を代表する小野窯址群があり、７世紀後半以降の駄馬姥ヶ懐窯址をはじめとする須恵器生産操業の盛期が考えられており、７世紀前半以降に飛躍的に整備が進む久米官衙遺跡群への須恵器供給の観点から、小野川を軸とした当時の生産と流通・消費、さらにはその生産集団と氏族集団、生活域と墓域等、多岐に関わる遺跡群の構造的解明の必要性が指摘されるなど、注目される地域でもある。




第２図　周辺地域の前方後円墳と小野窯址群

## ３.参考文献資料並びに周辺住民の伝承

①　滑走路敷設に従事した住民の話

はっきり場所の記憶はないが、本調査地あたりに山があって、滑走路にするための地ならしをしていたら、古墳が発見されたとの声が上がり現在の久米小学校あたりから、300 ～ 400m 程度北東に走った所に人だかりが出来ていて、古墳がぽっかり口を開けていた。

②　地元住民及び古老の話

昔（昭和初期）、このあたりに東と西に南北に抜ける道をはさんで山があり、西の山の頂上には祠があって東の山は、お墓になっていた。この道は坂になっていて、金比羅街道（江戸時代より松山から金比羅に至る道・当調査地に接する北側の東西道路）から窪田（南域の集落）へ抜ける近道になっていた。つまり、東西に走る金比羅街道の南に小山があり、山を越える道が取り付けられ、この道により丘陵が東西に分断された。

また、山裾は大正頃から水田となっていたが、湿田ではなく乾田であった。

③　愛媛県史資料編「波賀部神社古墳の項」（森　光晴氏）

本墳（波賀部神社古墳）の北方約２㎞、新畑に双子（タンチ）山古墳があり、戦時中に飛行場建設で消滅したが、石室は南に開口する羨道を持ち玄室には、奥壁面中央位置に、巨石一枚の石棚が構築され、石棚に須恵器や鎧が置かれていたという。この古墳が、双子と呼称される点で前方後円墳の可能性もある。また、同様の石棚を持つ古墳が、鷹子の柳ケ谷にもあったという。この古墳の石材は、割られて素鵞神社の階段に転用された。

④　愛媛県史資料編「久米小学校の項」（西尾幸則氏）

松山平野の東側、伊予鉄道久米駅南方 300mに位置し、西方 300mには、来住廃寺跡が見られる。また、かつて戦前までは同小学校東側にタンチ山前方後円墳（全長 60m）が存在していたと言われる。

⑤　愛媛県史「原始・古代 Ⅰ」

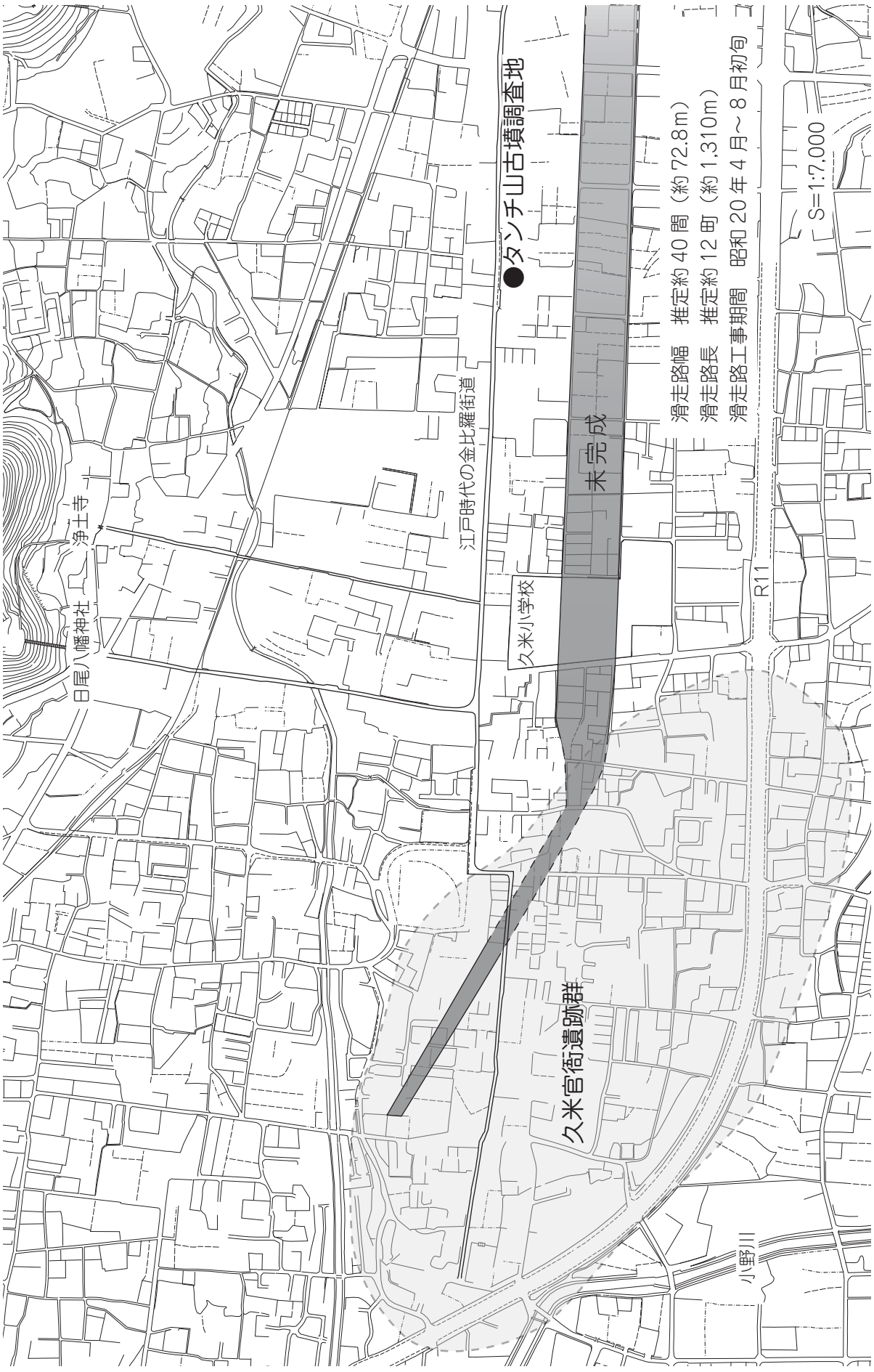
第四章 古墳文化の発達と社会の充実

第四節 古墳文化の変貌

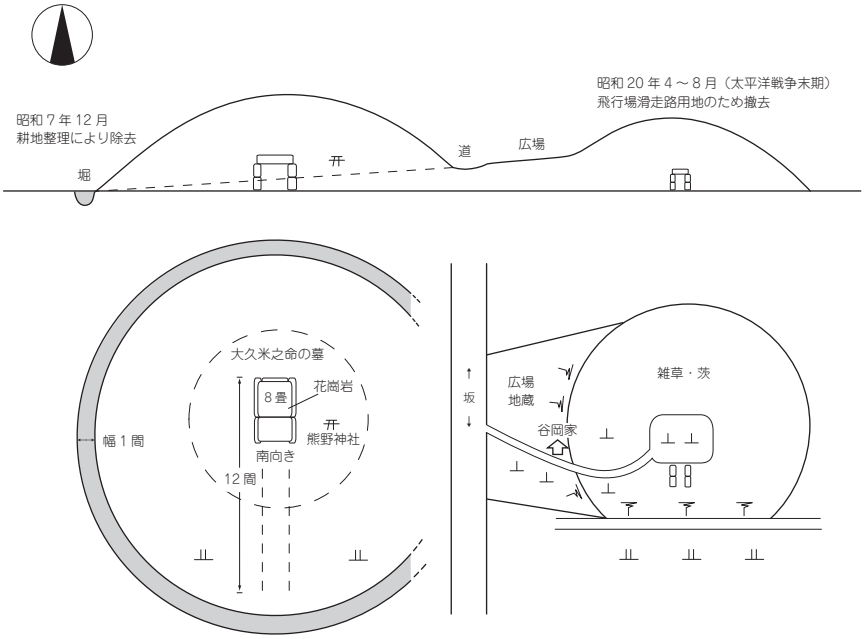
今、松山平野における前方後円墳のなかで、特に三島神社古墳と波賀部神社古墳との間（約一世紀）に造営されたと見られる前方後円墳の多くがすでに全壊している。久米地区には、タンチ山（双子塚）が、現久米小学校校庭の東にあって、大戦中に滑走路の建設工事により壊滅した。この古墳は、伝承によれば墳丘瓢箪型で奥壁は、一枚石であったといい、また棚をつけていた（故柳原多美雄氏）とも伝えられる。

双子塚の西方約 500m、農免道路に面して二つ塚がある。かつて道路工事中に円筒埴輪が出土しており、西面に前方部を持つ前方後円墳であることが確認され、全長約 40mで後円部は現存しており、前方部は削平されて遊園地として利用されている。

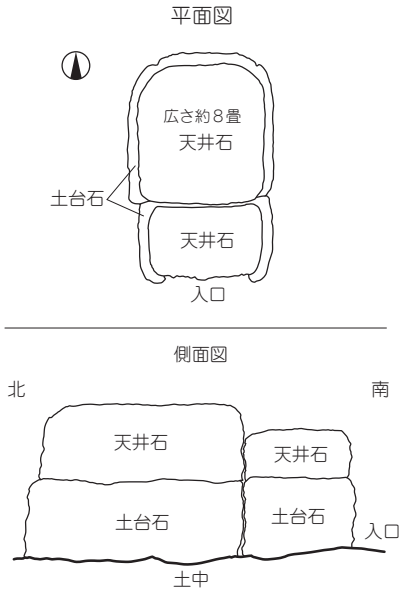
第３図　昭和24年頃の航空写真（滑走路の痕跡を残す）




第 4 図　滑走路建設工事の推定範囲図




第５図　天地山古墳復元図




第６図　天地山古墳巨石塚(大久米之命の墓)回想図

⑥　地元住民への聞き取り調査(タンチ山について)

この聞き取り調査は、古墳の北側にお住まいになられる重松孝子氏(松山市鷹子町 642）のご協力を得て、旧北条市別府 505在住、故重森保三氏より、昭和初期並びに口伝として伝わっていたタンチ山についての貴重なお話を平成14年 2月 19日に実施したものです。

※ 同氏は、大正 10年 10月 10日生まれで、同古墳の北側隣接地重松家に育ち、同地で幼･青年期を送り、地元土地改良区などのお世話を経験された。

『天地山(タンチヤマ）と呼ばれる古墳が、旧温泉郡久米村大字鷹子字新畑にあった。

記憶では、墓地となっていた小さい山があり、大字北窪田に通じる南北の小路を挟み、西側の田の中に巨石の塚があった。

口碑によれば、塚石の地は墓地のあった山より、やや大きい山で森となっていたという。この二つの山をタンチヤマ(天地山）と理解しているが、その呼称と天地山という字句についての謂れは判らない。

墓地のあった山の上には、重松･戒能･福本他三家位の墓域であった。墓域の広さは、八畳程であったと思う。その南側の裾は、削られていたが、少し掘ると塚石の一片が見られるとのことであった。

削られた山裾は、あぜ道を境に田地となっていた。山の斜面には、適宜墓地があり、西側の裾から墓地へ這入るようになっていて、東側も少し墓地があったが、北側の裾は、雑草や茨が茂って、墓地は見られなかった。西側の裾は、墓地及び葬儀が行われる広場と地蔵があった。

それから、古い時代からの住人、天王院（谷岡家）の墓も、広場の東にあった。その墓も、天王院の屋敷内（重松家の東側）にあったといわれていた。

口碑では、墓地山の西にあった巨石塚の山は、大久米之命（オオクメノミコト）の墓と言われていたが、天文二年九月（470 年位前）天王院義叟僧都（代々山伏の家系で、通称天王院、谷岡姓、子孫は宇都宮姓を名乗る。）が大願主となり、ここに熊野大権現を勅請祭祀し、極楽寺が別当となっていた。然し、明治四十二年政府の廃仏毀釈の令（註）によって、この熊野神社は、村社である素鵞神社（通称 テンノンサン＝天皇山、謂われは、「長慶院覚理法皇の行宮の地」とのこと）に合祀、取り壊され巨石の塚のみが残されていたが、昭和七年十二月耕地整理により除去、水田となりその巨石も鷹子大池樋門の石材となった。

この巨石のあった古墳の山には、長さ十二間の南向きの横穴があり、奥は八畳位であったと言う。巨石の塚は添付図（第 6 図）のようであったと思うが、天井石は花崗岩の一枚石であった。また、巨石塚山の東北西には、幅一間の堀があり、山は、松、楠の大樹が繁茂していたと言う。因に、日尾八幡神社入口にある鳥居は、この熊野神社の山にあった松の樹だと言われていた。

墓地のあった山も巨石塚のある古墳であることは、衆目の認めるところであったが、いつの頃か、字新畑の墓地として引き継がれていた。この墓地の古墳も、太平洋戦争末期飛行機滑走路の用地として取り壊され、墓地は大字鷹子字天皇山、素鵞神社の東方にある重松家の山畑地の提供を得て移転した。この古墳も、熊野神社跡古墳の巨石塚より少し小振りの巨石塚があり、埋蔵物もあったとのことであるが、その処理の詳細は知らない。

重松家の山畑地に移転したタンチヤマ墓地霊園名は、その石碑に「壇地山」と刻しているが、私としてはいずれ機会があれば、「タンチヤマ」と呼称するのか「ダンチヤマ」と言うのか世話人の方に訊ねてみたいと思っている。』

註）明治 42 年には、立木に関する法律が出されており、これを「廃仏毀釈令」と誤認したものと思われる。

また「小久米之命の墓古墳」に関する教示も得たので、参考までに記載しておく。

『熊野神社跡の古墳が、大久米之命の墓古墳と口碑されているが、小久米之命の墓古墳と口碑されている古墳の跡が、旧久米巡査駐在所東側隣接地の空地にあったと記憶する。

記憶では、その地の北西隅に塚石の残骸と認められる巨石があった。

因に、小久米之命の塚石は、火災に縁の深いお塚さんと言われていたが、明治の始め頃、その説は迷信であるからと、この塚石をとって三蔵院（浄土寺）の高灯籠を造ることとなり、その台石として使われたが、完成した晩に、主世話人の家が火災を起こし、他の世話人五、六人の家も順次、大小の火災を起こしたため、迷信打破の工事は、不成功。残った塚石も放置されることとなり、そのことを知る人も今はない。残骸の石も残されているか否か知らない。』

# 第３章　調査の手順と手法

## １. 調査以前の状況

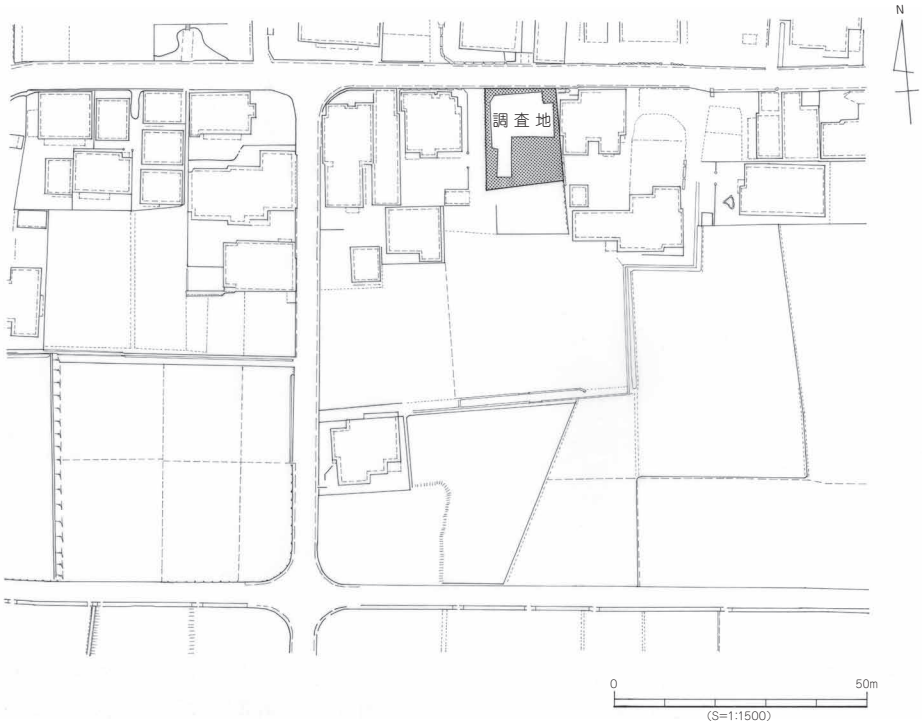
調査地は、久米の中心集落から僅かに東に離れ、江戸時代から続く金比羅街道と呼ばれる旧街道沿いに位置し、敷地の北東隅には「金毘羅・石鎚山常夜燈、寛政十二（1800）年申三月」と刻まれた常夜灯が配置されている。この常夜灯は動かされた形跡も無く、寛政年間建立のまま現地で街道のシンボルとして活用されてきたものと考えられる。また、調査地の北側の金比羅街道を挟んで北は、比較的古くからの民家が軒を並べるが、南側はこの常夜灯を境に西約 100m の範囲は比較的新興の住宅地や水田が広がり、地形は緩やかに西に下る。

調査地は、本来一筆の土地の一部であり、行き止まりとなる西側進入路を挟んで近年に４区画程度の住宅地に分割され、東西南北、ほぼ水平に造成が行われていた。西側に隣接する住宅建物も戦後暫くしての建築物と思われ、この一帯が、戦後の開発により農地整備が行われて後、近年新たに住宅地へと変貌していった事を窺うことができる。

## ２. 調査の進め方

試掘調査の結果、当該地は既に個人住宅建設に伴い旧家屋の解体撤去後、調査地全域に亘り新たな土地造成が行われており、地表面約 50cm 下位に旧家屋の基礎地盤が確認された。そのため、調査はまず、試掘調査が行われた南北トレンチの再確認から開始し、旧家屋の地盤直下の暗褐色粘性土層中から埴輪片が多量に検出されることを確認し、最新の造成土の除去を実施することから始めた。

調査範囲は、新たに建物が配置される範囲を設定し、最新の造成土及び遺構埋土は建物計画の無い庭部分に一括仮置きすることにした。

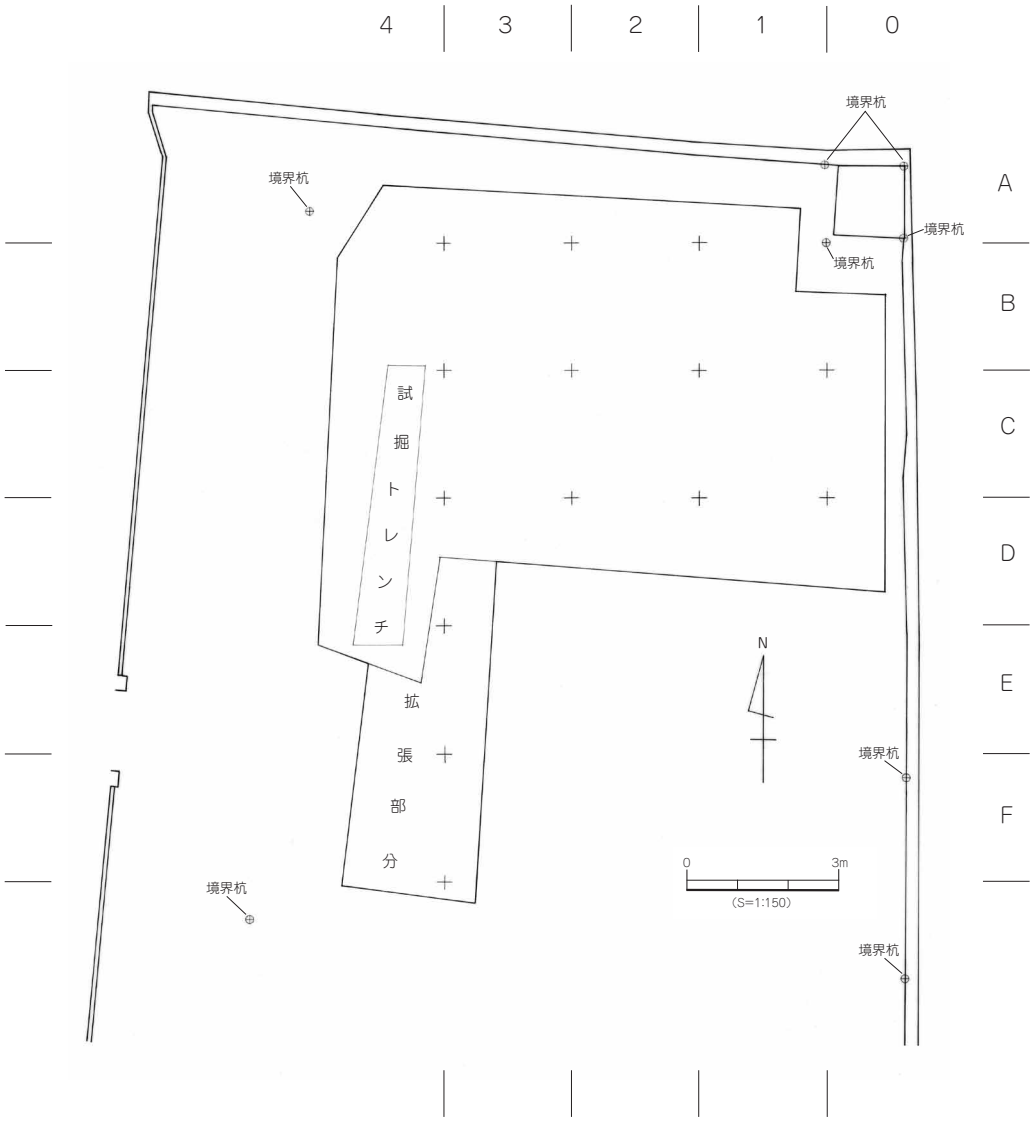



第７図　調査地位置図

## 3. 調査グリットの設定

試掘調査で、広範囲に亘り埴輪片が散布する可能性が指摘されていたことから、調査区全域に対して3mグリットを設定し、意識して面的な掘り下げを試みた。

面的な調査の進行により、区画溝並びに埴輪片の集中と散布の状況が明らかとなってきた事から、遺物の接合関係を把握するため、10分の1の縮尺により、全ての出土遺物の図化と取り上げを実施した。




第8図　調査地全測図・グリット配置図

# 第４章　層位と遺構･遺物

## １.層位

調査地は、松山平野の北東部に位置し、小野川の河川活動による開析作用によって形成された緩やかに西に傾斜する平坦地、標高約 50m の低丘陵上に位置する。層位は、住宅改築に伴う新たな造成土を加え、概ね３層の基本土層を検出した。以下、その詳細を述べる。

第１層　住宅改築に伴い新たに搬入された整地の為の造成土。

1a　暗褐色の有機質土層で黄褐色のシルト質粒子が混入し、部分的に黄褐色シルト質土が突き固められた整地層で調査区全域に亘り確認される（旧住宅の地盤層)。

1a1　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄとも近世・近代の生活活動に伴う攪乱層で炭化物を含む事から簡易なゴミ穴と考えられる。

1c　明灰色の有機質土層で旧住宅の整地の際に持ち込まれた客土。東側域のみで確認された。

第２層　灰褐色粘性土層で近世から弥生時代の遺物を含む遺物包含層。
この遺物包含層は、東側域では薄く堆積し、地山相当層（３層）の直上に位置し、調査地全域に亘り観察される。また、標高約 50.3m で水平堆積し、上面より近世の溝等の遺構が掘り込まれることから、近世以前の生活文化層と考えられる。以下詳細を述べる。

２a　暗灰褐色シルト質土層で直径 1cm 内外のクロボク（火山灰）の粒が混入する耕作土状の土層で調査区西側に厚く、近世・中世の遺構・遺物を含み少量の埴輪片が交じる。

２b　暗灰色シルト質土層で、直径 1cm 内外の黄褐色粒子（３a 層の小ブロック）が混入する。同層中には多量に大小の埴輪片が含まれており、古墳時代以前の遺物包含層と考えられる。

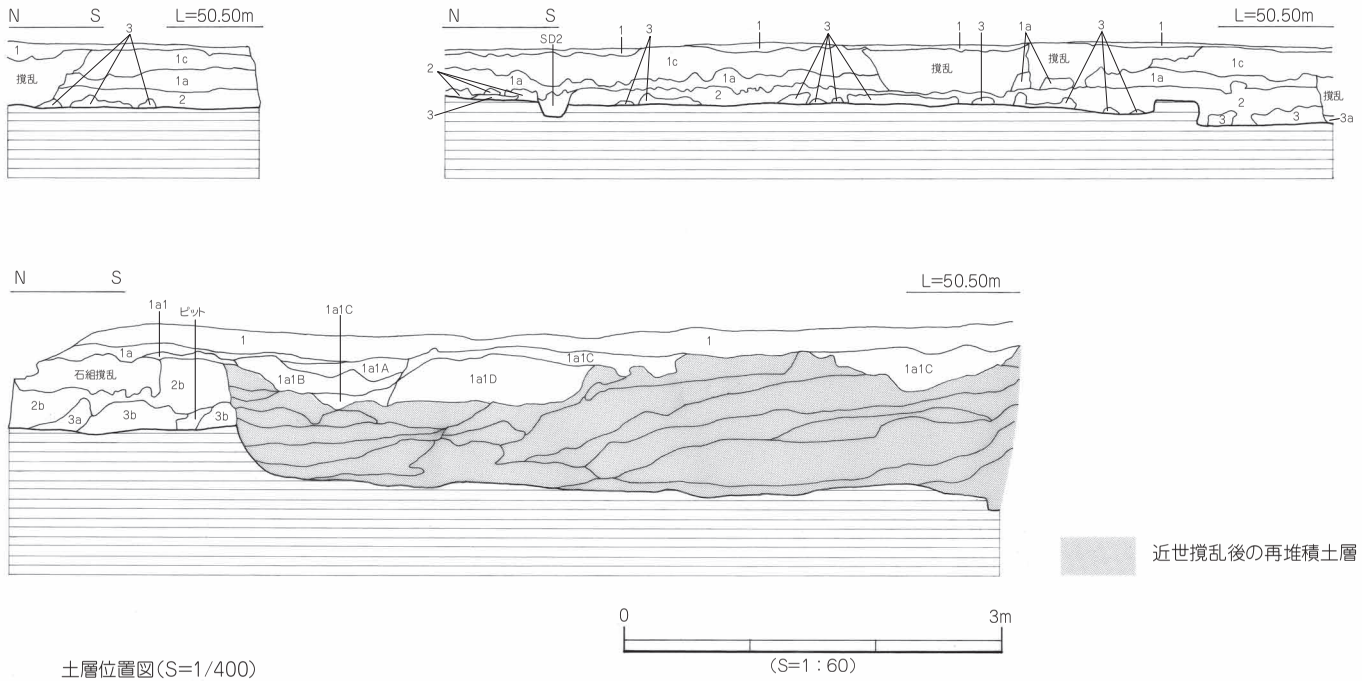
２c　暗灰褐色シルト質土（ＳＤ３埋没後の覆土)。

２d　暗黄褐色シルト質土（２b 層の漸移層)。

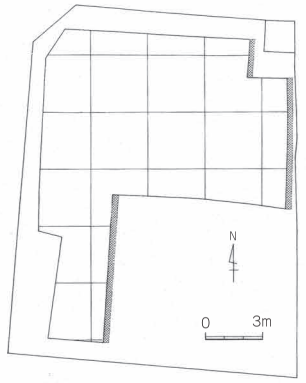
第３層　黄褐色粘性土層で地山相当の自然堆積層と考えられる。

３a　暗黄灰色シルト質土層で部分的に 10cm 程度の砂岩の円礫を含む。ほぼ調査区全域に亘り観察され、南西に向かって傾斜し、やや比厚する傾向が見られる。ただ場所によっては、３a 層が観察出来なく、上位層の２b 層が直接下位の３b 層上に観察される箇所もあり、人為的な掘削等による痕跡を推測する事が出来る。

３b　明黄褐色砂礫層で、２～４cm の砂岩の円礫を含む（地山層)。

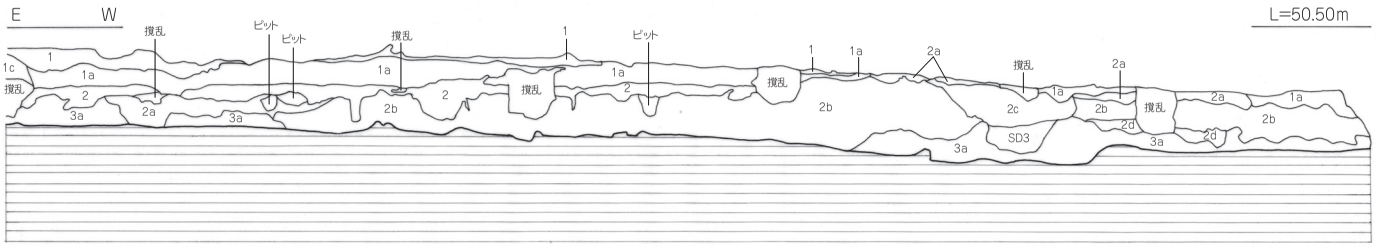


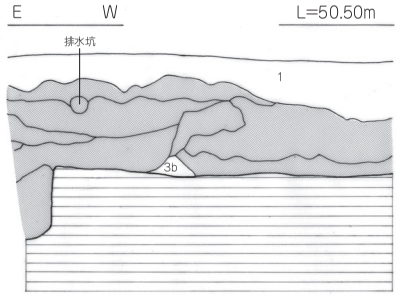

土層位置図(S=1/400)

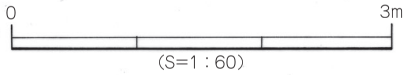



1. 造成土（真砂土）
1a. 暗褐色有機質土（黄褐色シルト質粒子混入。黄褐色シルト質土層と版築構造をとる）
1a1. 灰色シルト質土（灰層カーボン混入）
1a1A. 混灰色撹乱土（SD埋没後の近世撹乱土）
1a1B. 混灰褐色土（砂粒・炭化物小円礫を含む撹乱層）
1a1C. 混灰色砂礫（炭化物・有機物混入）
1a1D. 混灰褐色撹乱土（明黄褐色白色粘質土ブロック・炭化物混入）
1c. 明灰色有機質土（現住宅面土層）
2. 灰褐色粘性土
2b. 暗灰色シルト質土（1cm内外の黄褐色粒子混入。火山灰質土壌クロボク）
3. 黄褐色粘性土
3a. 暗黄灰色シルト質土（部分的に10cm内外の礫混入）
3b. 明黄褐色砂礫（2～4cm内外の砂岩円礫）

第9図　調査区東壁土層図

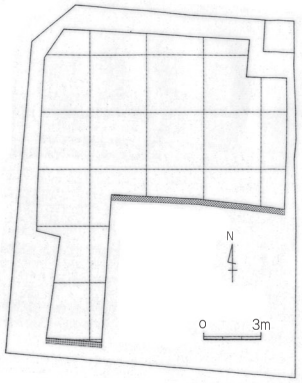


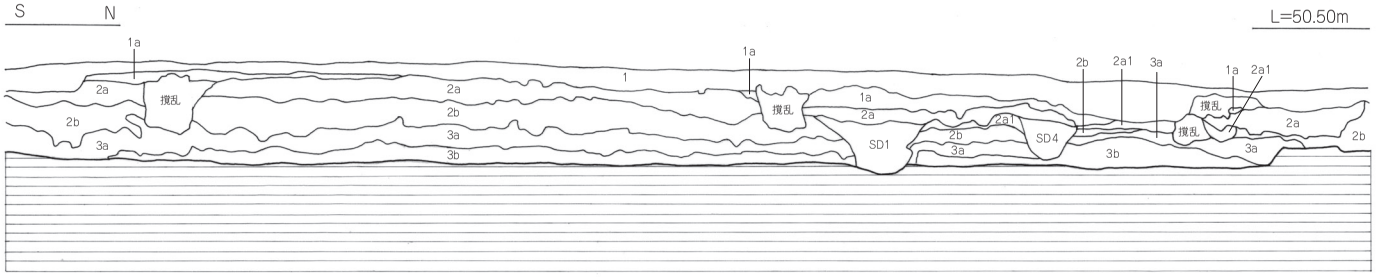

近世撹乱後の再堆積土層

土層位置図(S=1/400)

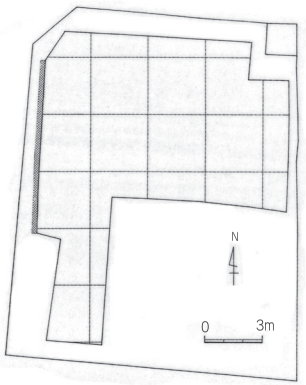



1. 造成土(真砂土)
1a. 暗褐色有機質土(黄褐色シルト質粒子混入。黄褐色シルト土層と版築構造をとる)
1c. 明灰色有機質土(現住宅面土層)
2. 灰褐色粘性土
2a. 暗灰褐色シルト質土(火山灰･1cm内外のクロボク粒子混入)
2b. 暗灰色シルト質土(1cm内外の黄褐色粒子混入。火山灰質土壌クロボク)
2c. 暗灰褐色シルト質土(SD3埋没後の覆土)
2d. 暗黄褐色シルト質土(2b層の漸移層)
3a. 暗黄灰色シルト質土(部分的に10cm内外の礫混入)
3b. 明黄褐色砂層(2～4cm内外の砂岩円礫)

第10図　調査区南壁土層図




土層位置図(S=1/400)




1. 造成土(真砂土)
1a. 暗褐色有機質土(黄褐色シルト質粒子混入。黄褐色シルト質土層と版築構造をとる)
2a. 暗灰褐色シルト質土(火山灰・1cm内外のクロボク粒子混入)
2a1. 暗黄灰色シルト質土(火山灰混入)
2b. 暗灰色シルト質土(1cm内外の黄褐色粒子混入。火山灰質土壌クロボク)
3a. 暗黄灰色シルト質土(部分的に10cm内外の礫混入)
3b. 明黄褐色砂礫(2～4cm内外の砂岩円礫)

第11図　調査区西壁土層図

## ２. 遺構と遺物

本調査では、弥生時代～近世・近代の遺構や遺物を検出した。遺構は、溝５条、柱穴１基、不明遺構１基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、瓦質土器、磁器、陶器、石製品の他、多量の埴輪片の集中が確認された。

### 〔１〕弥生時代

２b 層より上位層の遺物包含層及び南側拡張部分の攪乱層中より、弥生時代中期後葉の遺物が出土している（第34図､図版10)。

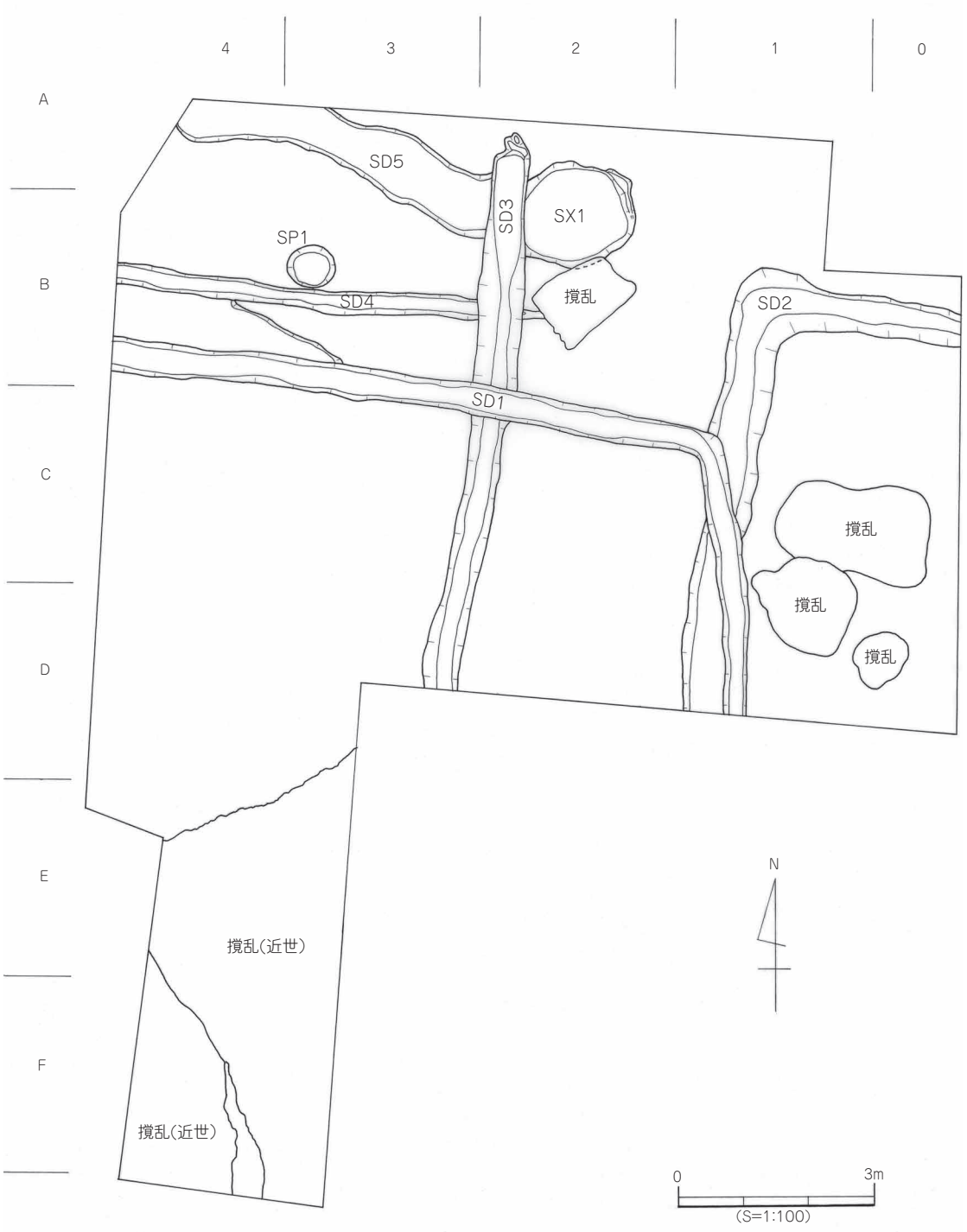
№.83 は、甘く肥厚して外反する口縁端面に刻み目が施された小型の甕形土器。№.84 は口縁端面に凹線を持つ小型の甕形土器。№.85・86 は口縁端面に凹線が施された甕形土器。№.87 ～ 89 は高坏形土器で凹線により器面を飾り、№.89 の脚部に二段の矢羽根透かしが施文される。

攪乱層中より出土した状況ではあるが、全くほぼ同時期の一括遺物と考えることができる。

### 〔２〕古墳時代

本調査区では、調査区の南西区域に埴輪片が集中して検出された（第 12 図参照)。層位的には、上層位で攪乱を受けて点在する埴輪片も多量にあるものの、黄褐色粘性土層で地山相当（第３層）の直上に位置する暗灰色シルト質土層（2b 層）にほぼ包含される形で、円筒埴輪を主として盾形埴輪や朝顔形埴輪などの底部片や大小の埴輪片の部位が、破砕された状況で検出された。詳細に遺存状況を確認したが、埴輪の据え置きに関わる整地並びに掘方等の遺構に関しては、その痕跡を確認することが出来なかった。

第12図　遺物出土状況図


4
3
2
1
0
A
B
C
D
E
F
SD5
SD3
SX1
SP1
SD4
撹乱
SD2
SD1
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱(近世)
撹乱(近世)
N
0
3m
(S=1:100)

第13図　遺構配置図

### 〔3〕中世･近世

本調査で確認された5条の溝及び南側拡張部分の攪乱層中より、中世・近世の土師器、瓦質土器、磁器、陶器、石製品他の遺物が出土している（第34～36図、図版10・11）。

ＳＤ１（第14図、図版２）は、近世の居住を区画する溝と考えられ、調査区のほぼ中央を東西に縦走し、直角に南に折れて調査区外に延びる。断面はＵ字形を呈し、埋土には暗灰色シルト質ブロックが混入する。時期を明確にする遺物は皆無で、著しく摩耗を受けた埴輪片及び土師器片が僅かに含まれる。ＳＤ２並びにＳＤ３との切り合いを観察することが出来ることから、遺構調査区での最も新しい区画溝と考えられる。

ＳＤ２（第15図、図版３）は、調査区東域を東より延びて、ほぼ直角に南に折れ、南に延びるＬ字状の区画溝である。断面はＵ字状を呈し、黄茶褐色粘性土のブロックが混入する。ＳＤ１と同様に時期を明確にする出土遺物は皆無で、著しく摩耗を受けた埴輪片及び土師器片が僅かに含まれるが、ＳＤ１との切り合いが観察されることから、ＳＤ１に先行する区画溝と考えられる。

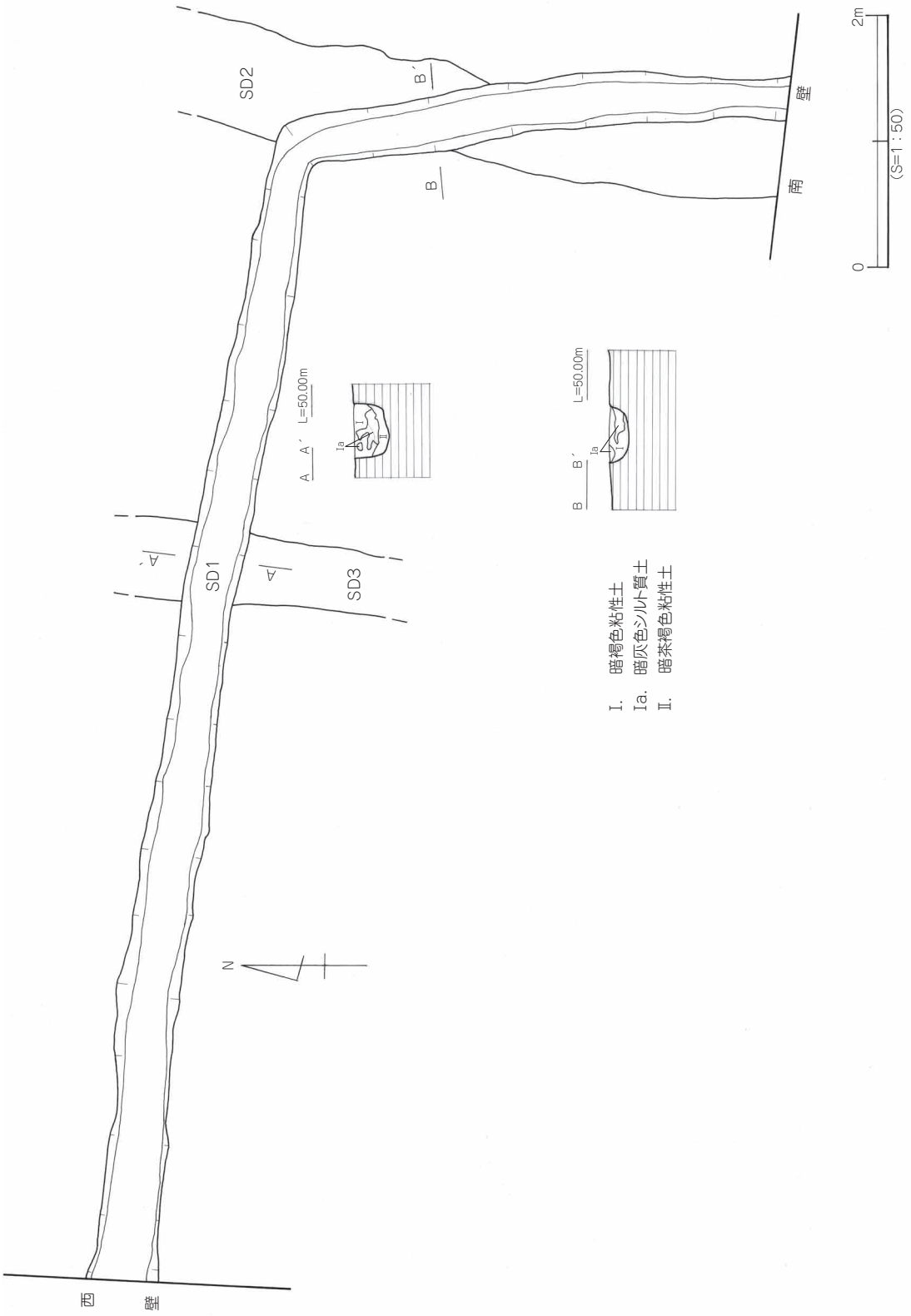
ＳＤ３（第16図）は、調査区の中央を北端から南に延びるほぼ直線の溝で、断面はＵ字状を呈し、黄茶褐色粘性土のブロックが混入する。遺物は、江戸時代中期（17～18世紀）のほぼ完形の土師皿、遺物番号１（第16図、図版４）が溝中央の埋土中に検出されていることから、この溝の時期を江戸時代中期に比定することができる。

ＳＤ４（第17図）は、調査区の北域を東西に直線的に縦走する溝で、断面は皿状を呈する。東端を近代の攪乱によって切られているが、ほぼ調査区内から端を発し、西に向かうものと考えられる。ＳＤ３との切り合いが観察されることから、ＳＤ３に先行する区画溝と考えられる。

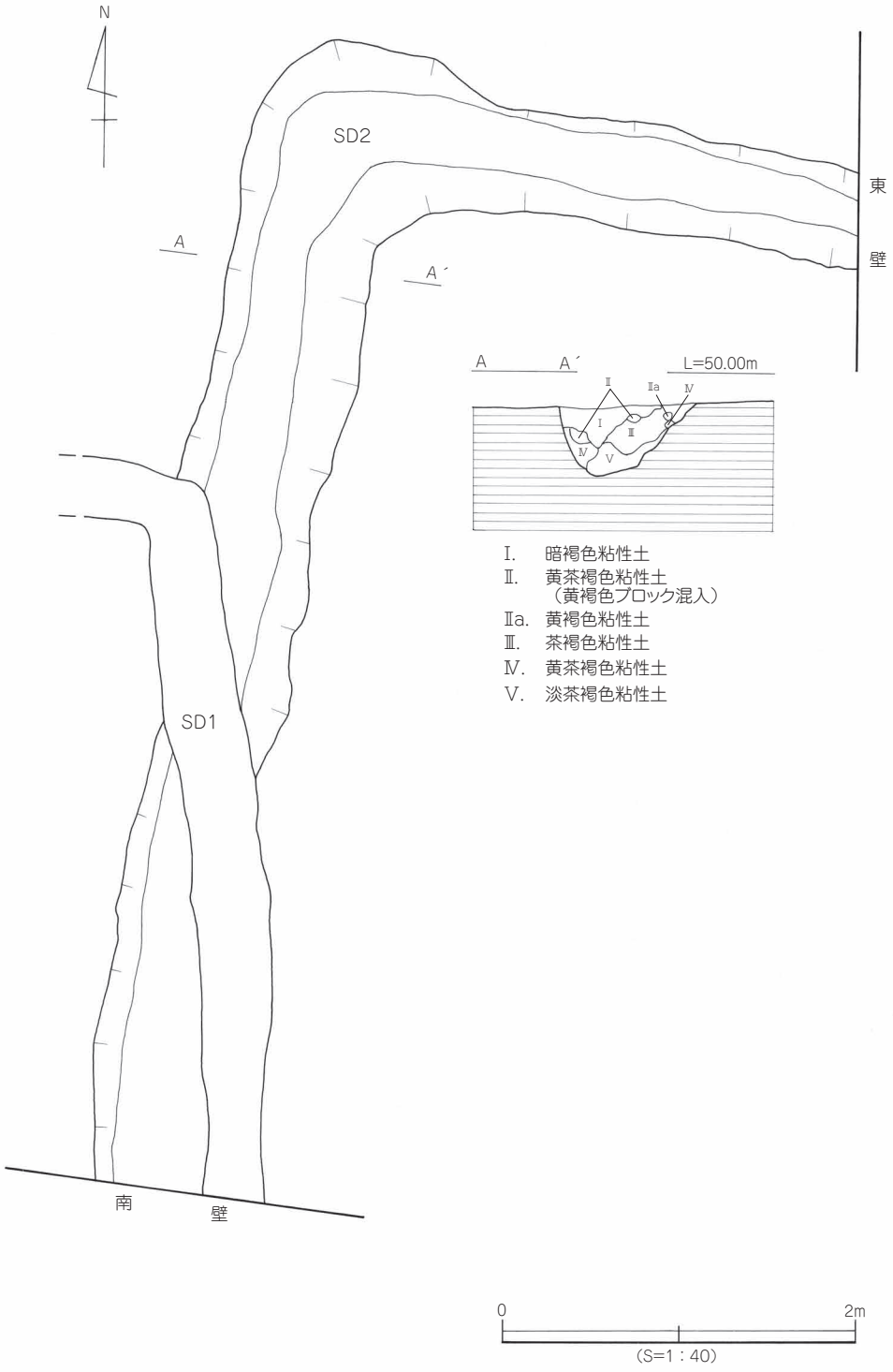
ＳＤ５（第18図）は、ＳＸ１、ＳＤ３との切り合いを観察することが出来る不整形の溝で、断面は皿状を呈し、明黄褐色粘性土のブロックが混入する。ＳＤ３にＳＸ１との切り合い接点が切られることから、ＳＸ１との前後関係は判然としないが、ＳＤ３に先行する不定形の溝である。

ＳＸ１（第19図）は、直径約1.5mの不定形の土坑状の遺構で、断面は浅く皿状を呈する。時期を明確にする出土遺物は皆無で、著しく摩耗を受けた埴輪片及び弥生土器･土師器片が僅かに含まれる。また、ＳＤ３との切り合いが観察できることから、江戸時代中期以前の遺構である。

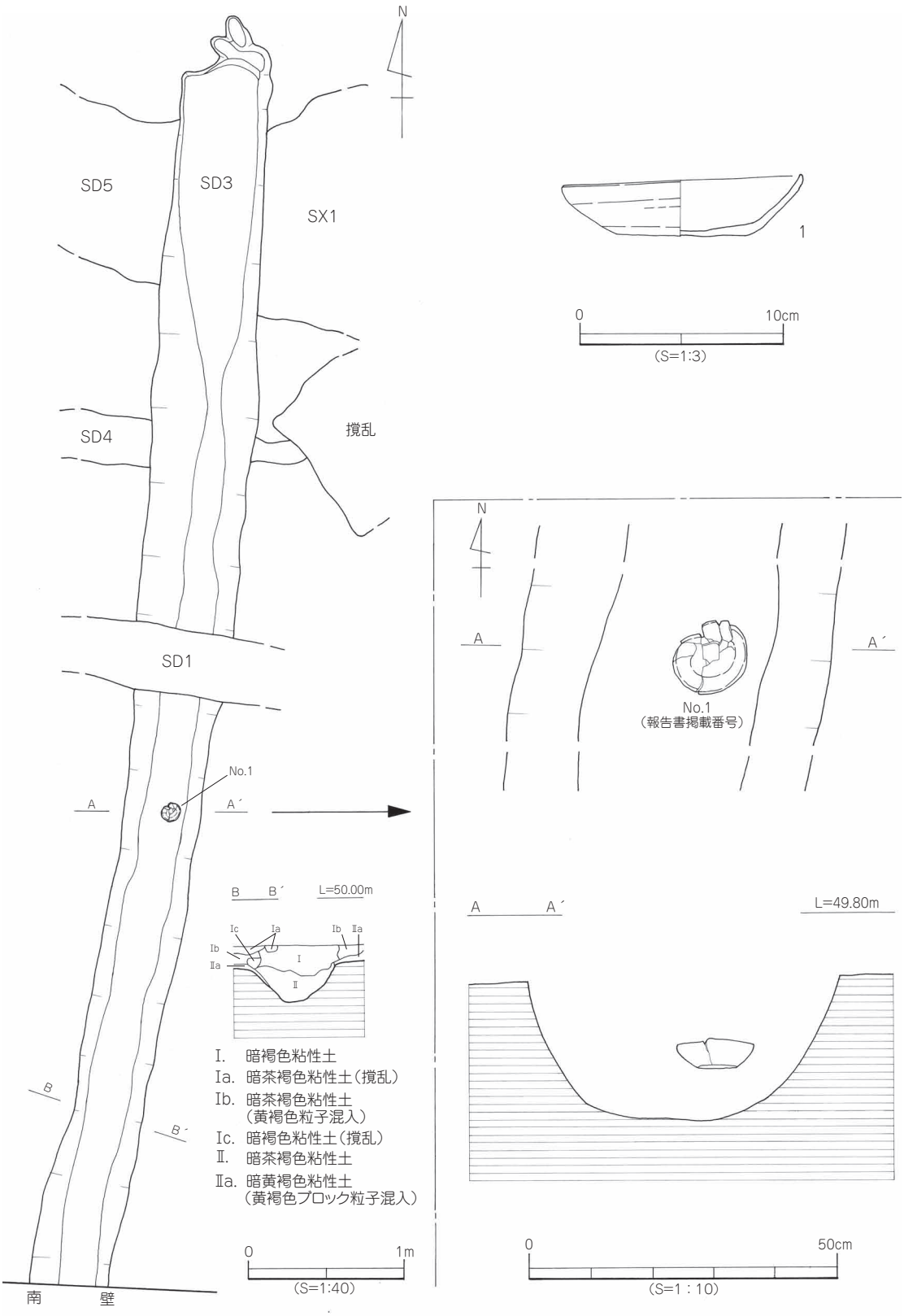
ＳＰ１（第17図）は、直径約70cm程度の円形の柱掘方で、削平が著しく、僅かに基底部を残すのみであるが、ほぼ中央に柱痕が観察される。調査区内での柱掘方が観察されたものは、これ１基のみであることから、削平による消失、若しくは北並びに西に展開する掘立柱建造物を想定することができるが、時期を確定する資料を得ていない。


SD2
SD1
SD3
A
A´
B
B´
A A´ L=50.00m
B B´ L=50.00m
Ia
I
II
N
西壁
南壁
0
2m
(S=1：50)
I. 暗褐色粘性土
Ia. 暗灰色シルト質土
II. 暗茶褐色粘性土

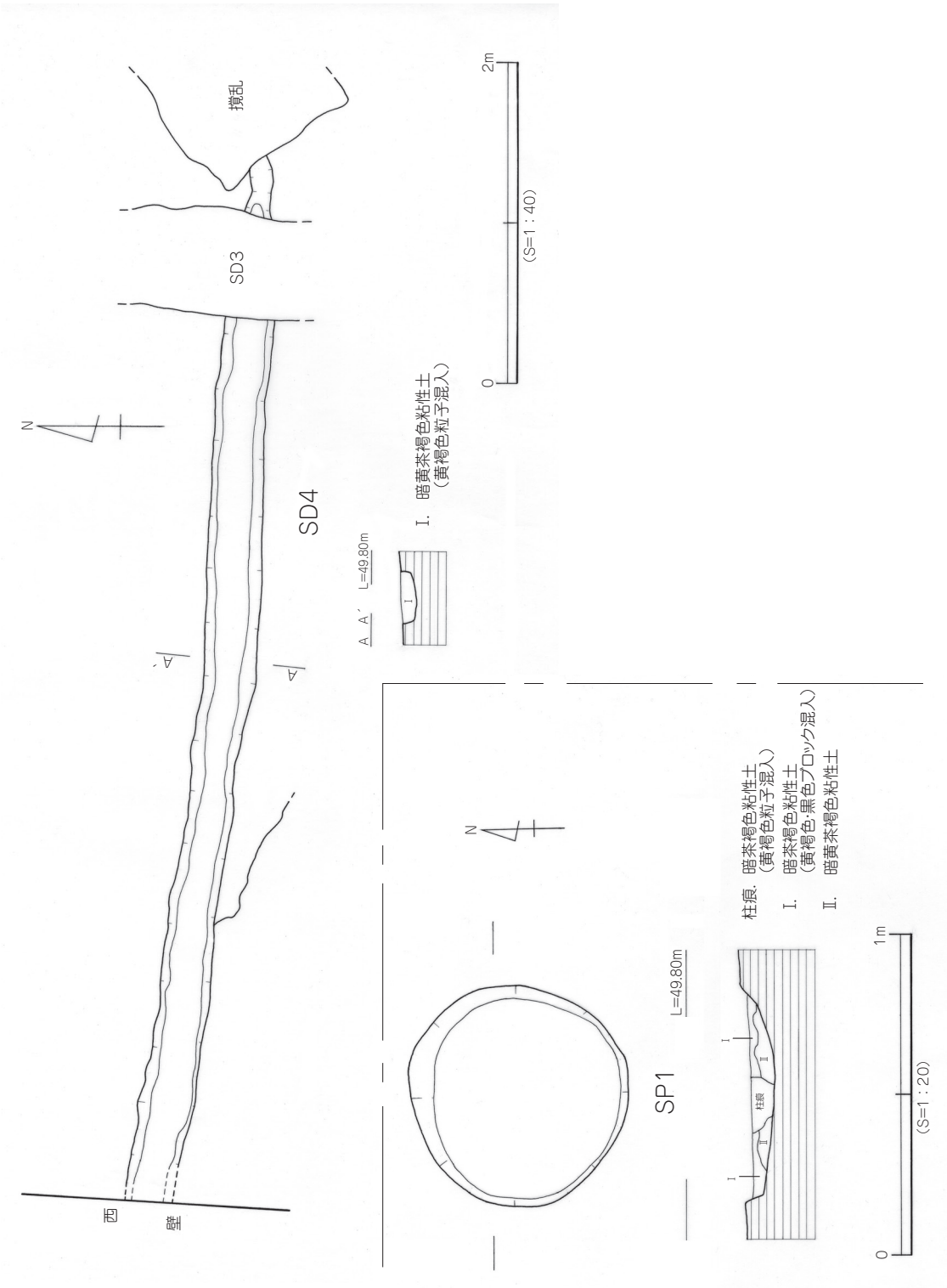
第14図　ＳＤ１測量図


N
SD2
東
壁
A
A´
A
A´
L=50.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱa
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅰ. 暗褐色粘性土
Ⅱ. 黄茶褐色粘性土
（黄褐色ブロック混入）
Ⅱa. 黄褐色粘性土
Ⅲ. 茶褐色粘性土
Ⅳ. 黄茶褐色粘性土
Ⅴ. 淡茶褐色粘性土
SD1
南
壁
0
2m
(S=1：40)

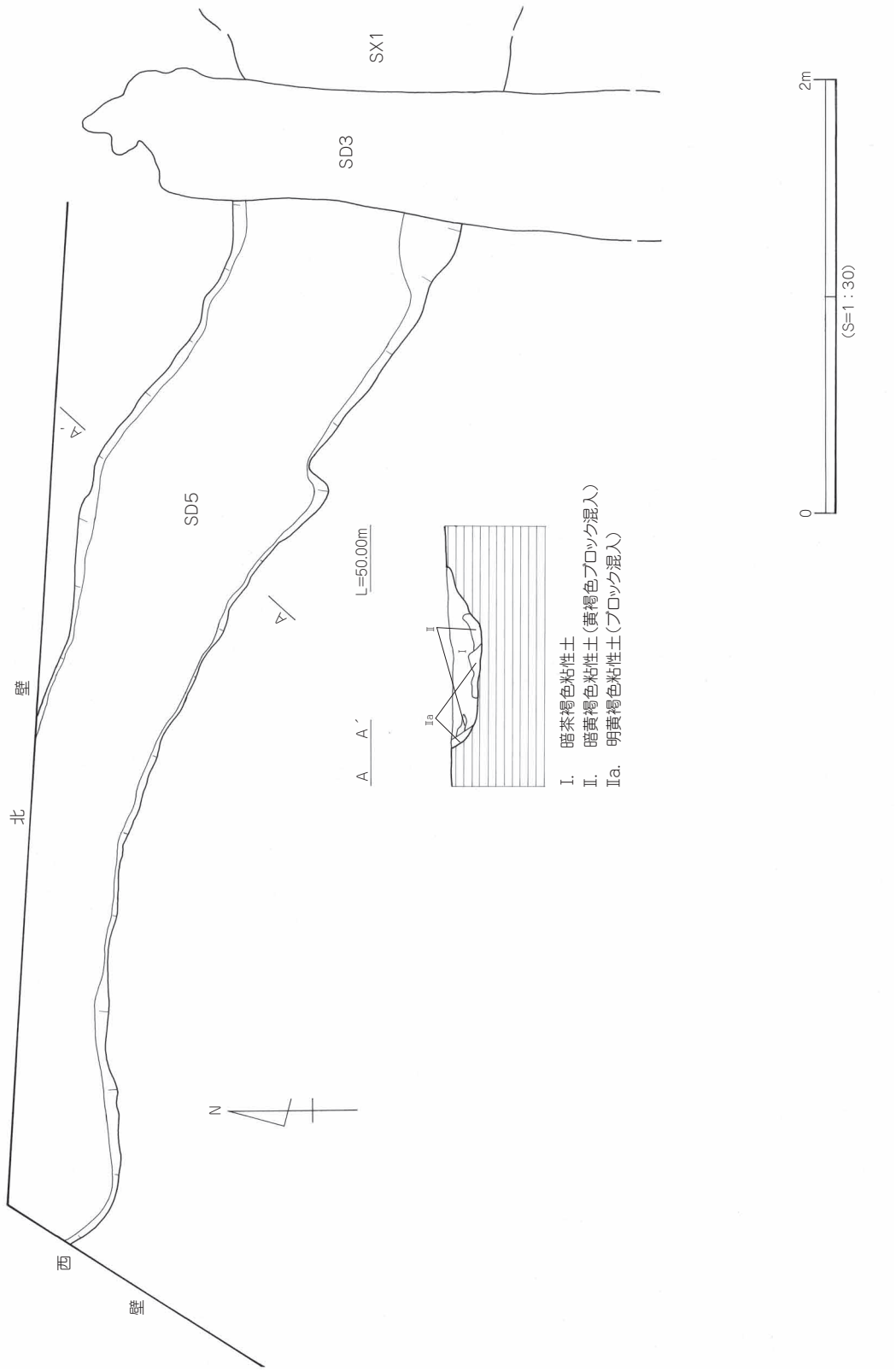
第15図　ＳＤ２測量図



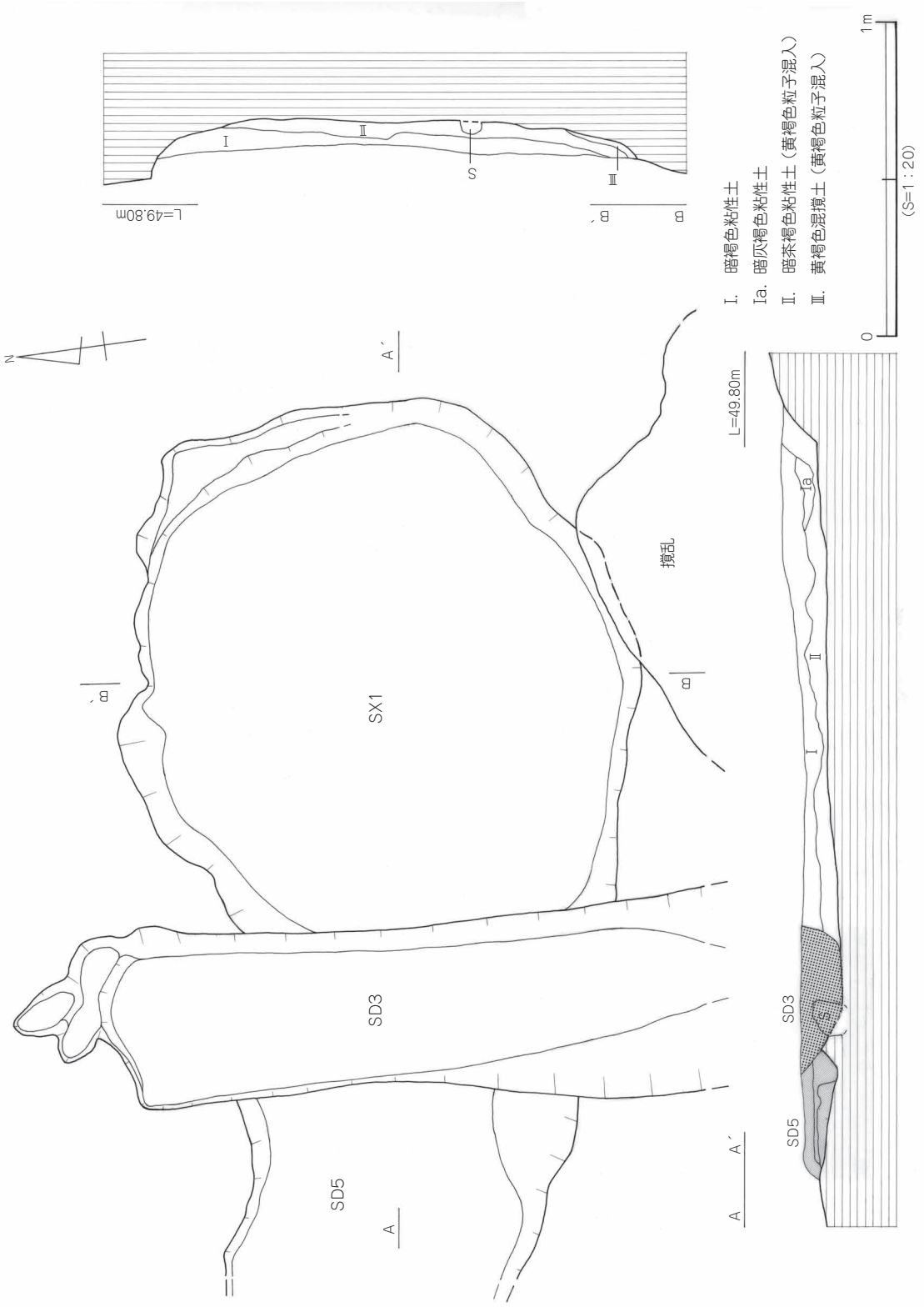

第16図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図




第17図　ＳＤ４・ＳＰ１測量図


SX1
SD3
SD5
北
壁
西
壁
A
A´
L=50.00m
N
I. 暗茶褐色粘性土
II. 暗黄褐色粘性土（黄褐色ブロック混入）
IIa. 明黄褐色粘性土（ブロック混入）
0
2m
(S=1：30)

第18図　ＳＤ５測量図


N
SX1
SD3
SD5
撹乱
A
A´
B
B´
L=49.80m
S
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ia
Ⅰ. 暗褐色粘性土
Ia. 暗灰褐色粘性土
Ⅱ. 暗茶褐色粘性土（黄褐色粒子混入）
Ⅲ. 黄褐色混撹土（黄褐色粒子混入）
0
1m
(S=1：20)

第19図　ＳＸ１測量図

# 第５章　出土遺物が語るもの

## １. 埴輪の出土状況

本調査では、円筒埴輪を主として盾形埴輪や朝顔形埴輪などの底部片や大小の埴輪片の部位が一括して破砕された状況で、ほぼ2b層中に集中して包含されることが明らかとなった。本調査における埴輪の検出状況からだけでは、埴輪片の原位置の復元がきびしい事から、埴輪片の接合と遺物分布による原位置の推定を目的に円筒埴輪片の接合状況を観察した（第21図)。

接合資料の平面分布を観察すると、大きく３グループの遺物集中箇所が観察される。仮に東端からABCのグルーピングを与えると、Aグループは、遺物番号46（第29図、図版６）の円筒埴輪底部の大型破片を中心としていて、その接合状況は、破片の飛散が比較的少なく、さらに朝顔形埴輪の出土状況図（第22図）の遺物検出及びその接合状況と比較するとAグループと朝顔形埴輪の散布が重複する事が明らかとなった。

Bグループを観察すると、大型の円筒埴輪の破片が混在するものの接合資料の密度は比較的散漫で、飛散による破片の移動距離があり、盾形埴輪片の出土状況図（第23図）の遺物検出及びその接合状況と重複することが観察される。

但し、盾形埴輪は施文の構成から二種類が存在するものと考えられることから、近時して二種類の盾形埴輪が設置されていた可能性を持つ。

Cグループを観察すると、接合資料の密度は比較的散漫で接合状況から南北に飛散する傾向を読み取る事が出来る。但し、CグループとBグループの間には、事前調査として実施した試掘確認調査が行われた箇所があり、試掘確認調査では出土位置等の記録が残されていないことから、接合関係においては、この傾向が全てではないものと考えておく必要がある。

全般的に埴輪片の出土分布とその集中並びに接合の関係を概観すると、Aグループよりは、Bグループ、さらにCグループへと南北の接合関係を軸として、大きく東西に飛散する遺物散布のまとまりを持ち、その中心が緩やかな南西軸を取る傾向が観察される。こうした接合と集中の関係は、これまでの遺跡研究の中で出土遺物の原位置を復元する事が出来る方法として用いられている。

以上、円筒埴輪を主とした埴輪片の検出状況を概観したが、これらの遺物の集中が端的に当時の原位置を示すとは言い切れないものの、接合資料の平面分布や遺物観察を踏まえて推測すると、埴輪が設置された往時の状況を比較的残しているものではないかと考える事ができる。

## ２. 円筒埴輪

出土した円筒埴輪には、口縁部の仕上げ方が異なる種類の物が混在する。

まず、口縁端部外面に突帯を有するものでは、口縁部は僅かに外反し、口唇部と一体となって突帯が貼り付けられるタイプ遺物番号２・３（第24図、図版４)、口唇直下に数ミリを空けて薄い突帯が貼り付けられるタイプ遺物番号４・５（第24図、図版４）の二種類の表現の違いが観察される。いずれの種類とも口縁内部は指オサエ並びにナデが観察される。

次に口縁部外面が、ハケにより仕上げられる種類では、口縁端部のみが僅かに外反し、口唇端面は僅かに凹状に仕上げられるタイプ遺物番号７・12（第24図、図版４)、遺物番号55（第30図、図版７）と口縁端部がほぼ直線的に仕上げられ、口唇端面に僅かに凹状に仕上げられるタイプ遺物番号８

～ 10（第 24 図、図版４）のものが観察される。

次に突帯の形状についてであるが、山内氏によれば、その形状は、A タイプ：断面台形状のもの。B タイプ：ナデによりやや中央が凹状に窪むものの二種類のタイプに分けられ、その内、主体を占めるものは B タイプのもので、A タイプのものは、やや白色系の胎土でやや焼成が甘く、軟質の個体が多く認められることが指摘されている。

また、突帯の貼り付けには、断続ナデ手法が用いられタガの上下に強い指オサエまたはナデにより波打つものがあり、さらにタガの上部に器面に擦れた指先による痕跡（左上がり）が規則的な間隔で認められるなど、製作段階の特長が認められている。なお、松山平野の東南に位置する砥部窯跡群に多く認められる「M」字状を呈するタガのうち、貼り付け幅が広く、貼り付けが粗めの個体は存在しないとの指摘を得ている。

次に、検出された円筒埴輪の器体に穿たれた円孔は全て円形で、穿孔後の調整により補正されているものの、外側から内に向かって穿たれた痕跡が残される。外面の器面調整は、ほとんどのものが左上がりのナナメハケによる調整で、内面は指オサエ並びにナデが観察される。ハケメは、比較的細かく丁寧に調整が行われており、原体の幅が特定される個体も存在する。

今回の調査では、数個体分の基底部が確認されているが、その全てにおいて、基底部にまで器面調整（ハケ）が行われていた痕跡は皆無で、全ての器面の調整痕跡は、指オサエ並びにナデが観察される。また、底端部の端面に置き台の痕跡が残されているものも見受けられる。

## ３. 朝顔形埴輪

出土した朝顔形埴輪は、肩部の張り、焼成等を考慮すると数個体分の完形となるものが考えられるが、接合等の実績量も少なく胴部片の集中からは、ほぼ一箇所、遺物番号 66（第 31 図、図版７）の個体とその広がりから原位置を特定できるに過ぎない。

遺物番号 66 は、肩部の張りが少なくやや寸胴で、屈曲部には断面 M 字形の突帯が貼り付けられる。焼成は甘く粗雑で胎土に石英・長石を多く混入する。遺物番号 67（第 31 図、図版７）も、肩部の張りは少なく、貼り付けられた突帯は断面 M 字形を呈する。焼成は良好で個体差とは考えられるが、須恵質に近い硬度を有する。この２個体とも、頸部に貼り付け突帯が観察されるが、遺物番号 65（第 31 図、図版７）は、頸部より少し下がる肩部に突帯の貼り付けが施される個体と考えられる。

## ４. 盾形埴輪

出土した盾形埴輪片は、調査区南西の B・C の遺物集中のグループ内に位置する。

器面に三角文・山形文の施文が施された破片、遺物番号 72・73（第 32 図、図版８）は大型の破片で同一個体と考えられる盾形埴輪で、中でも遺物番号 72 の個体には、盾面を円筒状の本体に接合していた接合痕が観察される。また、施文状況並びに胎土、色調から遺物番号 68 ～ 73（第 32 図、図版８）は同一個体と考えられる。

次に、器面に２条の沈線による弧状文が対になって施文された盾面の装飾破片、遺物番号 74 ～ 76（第 33 図、図版９）が観察される。遺物番号 74 は、大型の破片で盾面に２条の沈線による弧状文が対になって施文され、裏面は指オサエ並びにナデが観察される。これらの個体は同一個体と考えられ、盾面を円筒状の本体に接合していた接合痕が観察される。

その他に、遺物番号 80 ～ 82（第 33 図、図版９）は盾面を円筒状の本体に接合していたと考えられる接合痕が見られる。遺物番号 80 は、弧状に形づくられた端面を残し、盾面が円筒状の本体部を利用して弧状に張り出し、それに羽が取り付くタイプの盾形埴輪と考えられ、器面は直線の沈線による施文が施される。遺物番号 81 は、平行する沈線間を斜線で埋めた縄目文状の区画線を基準に、盾面を三角文・山形文の区画施文で装飾するタイプの盾形埴輪と考えられる。遺物番号 82 は、大型の破片で弧状に形づくられた端面を残すが、盾面の部位には施文が見られない。ただし、色調・胎土・取付部位を考慮すると弧状文が対になって施文された盾面の上部位の破片の可能性を持つ。

## ５. 土層から見た古墳のあり方

本調査区において、埴輪片の集中が確認されたことから、古墳との相関関係を確認することを目的に、南側に拡張区を設けたが、南側全域が近世の大がかりな攪乱により、地山相当層まで削平を受けていることが明らかとなった。そのため、削平されたと伝えられる古墳との位置関係を明確にすることができなった。

ただ、南側壁面において、地山相当層上に位置する３a 層が上位層の２b 層に切られ、不連続となる箇所が約３～４m の間存在する。破砕された埴輪片がこの２b 層中に多く包含されることを考えると古墳等埋葬施設の築造に伴う何らかの掘削痕跡の可能性を持っていると言える。

しかしながら、土層観察並びに平面観察からは古墳等埋葬施設に伴う周溝ないしは周溝土手、外郭施設等の埋葬施設として積極的に断定することは出来なかった。

## ６. 埴輪の出土分布から見た古墳のあり方

前述したように、本調査では円筒埴輪を主として盾形埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪片が一括して破砕した状況で確認されている。しかしながら、埴輪の検出状況のみでは、古墳等埋葬施設に伴うと考えられる埴輪片の原位置の復元が不可能である事から、埴輪片の接合と遺物分布による原位置の推定を目的に円筒埴輪片の接合状況を観察し、その特長を抽出した（第 21 図）。

その結果、接合資料の平面分布を概観すると、大きく３グループに分別され、東端から仮に ABC のグルーピングを与えることができた。

埴輪の出土状況でも述べたように、A グループは遺物番号 46 の円筒埴輪底部の大型破片を主体としており、接合状況からは、破片の飛散が比較的少なく、朝顔形埴輪片が重複する事が明らかとなっている。このような検出状況から、朝顔形埴輪と円筒埴輪が南北の位置関係で両者並び立つ状態で設置されていた可能性を導き出す事ができる。

次に、A グループの西側約２～３m の間隔を保って B グループの集中が観察されている。これらの集中は大型の円筒埴輪の破片が混在するものの、接合資料の密度は比較的散漫で大きく飛散し、接合する破片の軌跡はその移動距離や方向に統一性が見られる。また、盾形埴輪片の出土状況図（第 23 図）の遺物検出及びその接合状況とも重複する。但し、盾形埴輪は施文の構成から二種類以上が存在するものと考えられることから、近い位置に二種類以上の盾形埴輪が連立されていた可能性が導き出せる。続けて C グループは、近距離で南北の接合例が多数顕在し、数例の盾形埴輪片が確認されている。

こうした接合の例を考慮すると埴輪片の飛散の軌跡は、南北軸を中心とした破片の移動が主流を占

める事が窺える。北が僅かに高く南西に緩やかに下る原地形の地山層と包含層を考慮すれば、破片は北から南に飛散したと考えるべきではあるが、南に近接していたと言われる墳丘に設置されていた埴輪を想定した場合は、その逆で、南に位置する墳丘施設から北の窪地に転落した埴輪片の軌跡として捉えることもできる。

これらの可能性を前提として、全体的に埴輪片の出土分布とその集中並びに接合の関係を概観すると、A グループよりは、B グループ、さらに C グループへと南北の接合関係を軸として、大きく東西に飛散する遺物散布のまとまりを持って、その中心が緩やかな南西軸を取る傾向が観察される。また、これまでの遺跡研究の中で出土遺物の接合と集中の関係が、本来設置されていた原位置との復元関係を示す有効な指標であることも指摘されており、南西軸に沿って古墳等埋葬施設が築造されていた可能性を導き出すことができる。

以上、円筒埴輪を主とした埴輪片の検出状況を概観したが、これらの遺物の集中が直接的に当時の原位置を示すとは言い切れないものの、接合資料の平面分布や遺物観察を踏まえて推測すると、古墳等埋葬施設に設置されていた埴輪のあり方として、後世の変遷を加味しても往時の状態を比較的良く残しているものではないかと考える事ができる。

## 7. 久米周辺の埴輪を持つ古墳

山内氏による「伊予の埴輪編年」〔(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要「紀要愛媛」第 8 号 2008〕によれば、愛媛県内においても松山平野は、群を抜いて埴輪を持つ古墳が多く、大きく松山平野北部、松山平野南部、松山平野東部、それぞれに古墳埋葬に用いられた埴輪の地域性と特長が見いだせることが指摘されている。

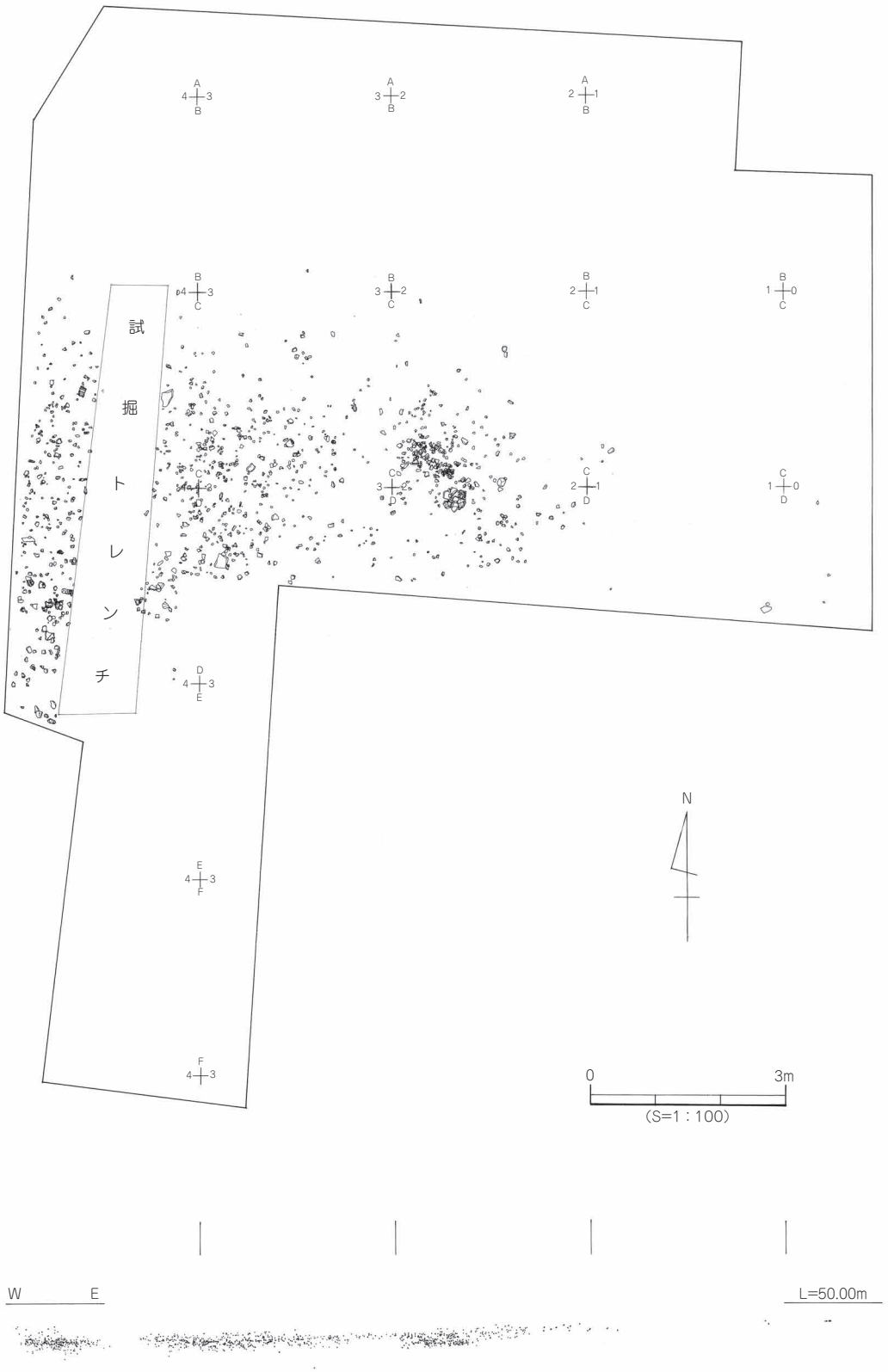
この中でも久米地域は、同氏の地域分類によれば、松山平野東部の範疇として捉えられ、東野お茶屋台古墳群（円墳）、畑寺 6 号墳（円墳）、三島神社古墳、二つ塚古墳、観音山古墳、播磨塚天神山古墳など本タンチ山古墳を含めて 7 基の古墳が埴輪を持つ古墳として紹介されている。

中でも、三島神社古墳（墳長 42.5m、時期 6 世紀前半）、二つ塚古墳（墳長 63m、時期 6 世紀前半）、播磨塚天神山古墳（墳長 32.5m、時期 6 世紀前半）の 3 例は、これまでの調査研究の成果により前方後円墳であることが確定している。さらに、これまでの古墳研究の中では、その他に円筒埴輪の出土が伝えられる波賀部神社古墳（墳長 62m、時期 5 世紀末）、観音山古墳（墳長不詳、時期 5 世紀中葉から 5 世紀末）、当タンチ山古墳など、埴輪を持った前方後円墳、数基の存在の可能性が指摘されている。

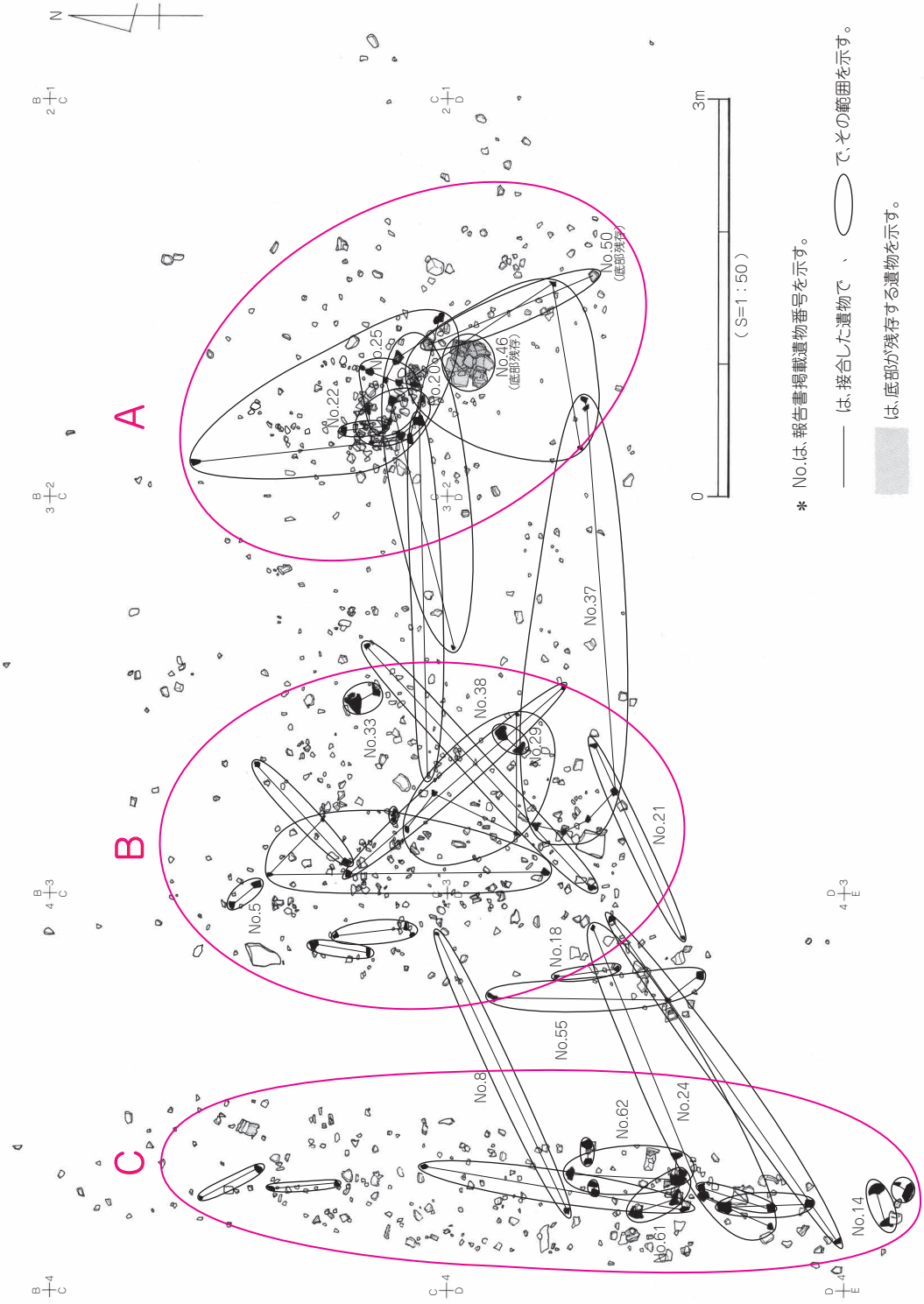
また、埴輪を持たない前方後円墳では、5 世紀末から 6 世紀初頭に位置づけられる経石山古墳（墳長 48.5m、時期 5 世紀末から 6 世紀初頭）、調査事例がないため定かではないが星岡丘陵上に位置する西山古墳（墳長 24.5m、時期不詳）などが前方後円墳と考えられている。なお、葬送時の組み合わせ式箱型木棺が発見された葉佐池古墳（墳長 40m、時期 6 世紀中葉）は、当初、前方後円墳形を取るものと考えられていたが、近年の調査成果で不整の長円形の墳丘であり前方後円墳の形状を有していない事が明らかとなっている。この葉佐池古墳も埴輪を持たない古墳であることが知られている。

以上が、久米周辺の古墳の様相であるが、古墳の出土埴輪の種類についても、山内氏の整理によれば、形象埴輪の内、盾形埴輪の出土が見られる古墳は観音山古墳、播磨塚天神山古墳、三島神社古墳、当タンチ山古墳の 4 例で、蓋が見られるのは播磨塚天神山古墳 1 例、家形埴輪は、観音山古墳と播磨塚天神山古墳 2 例のみとなっている。こうした形象埴輪の組み合わせのセット関係からも、伊予にお

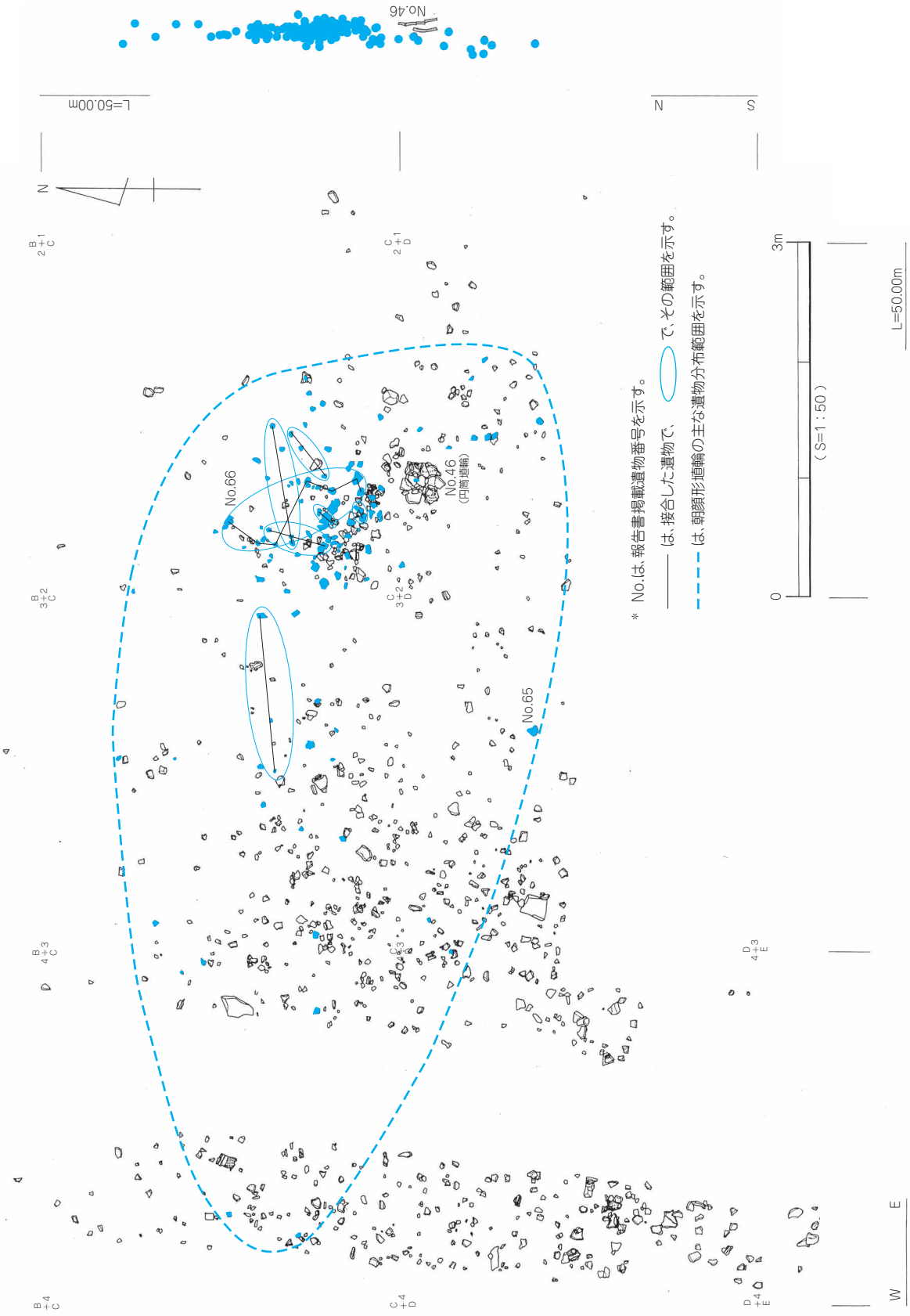
ける「地域性」を検証することも可能であろうかと考えられるが、今後、確実な調査事例の追加が望まれる。



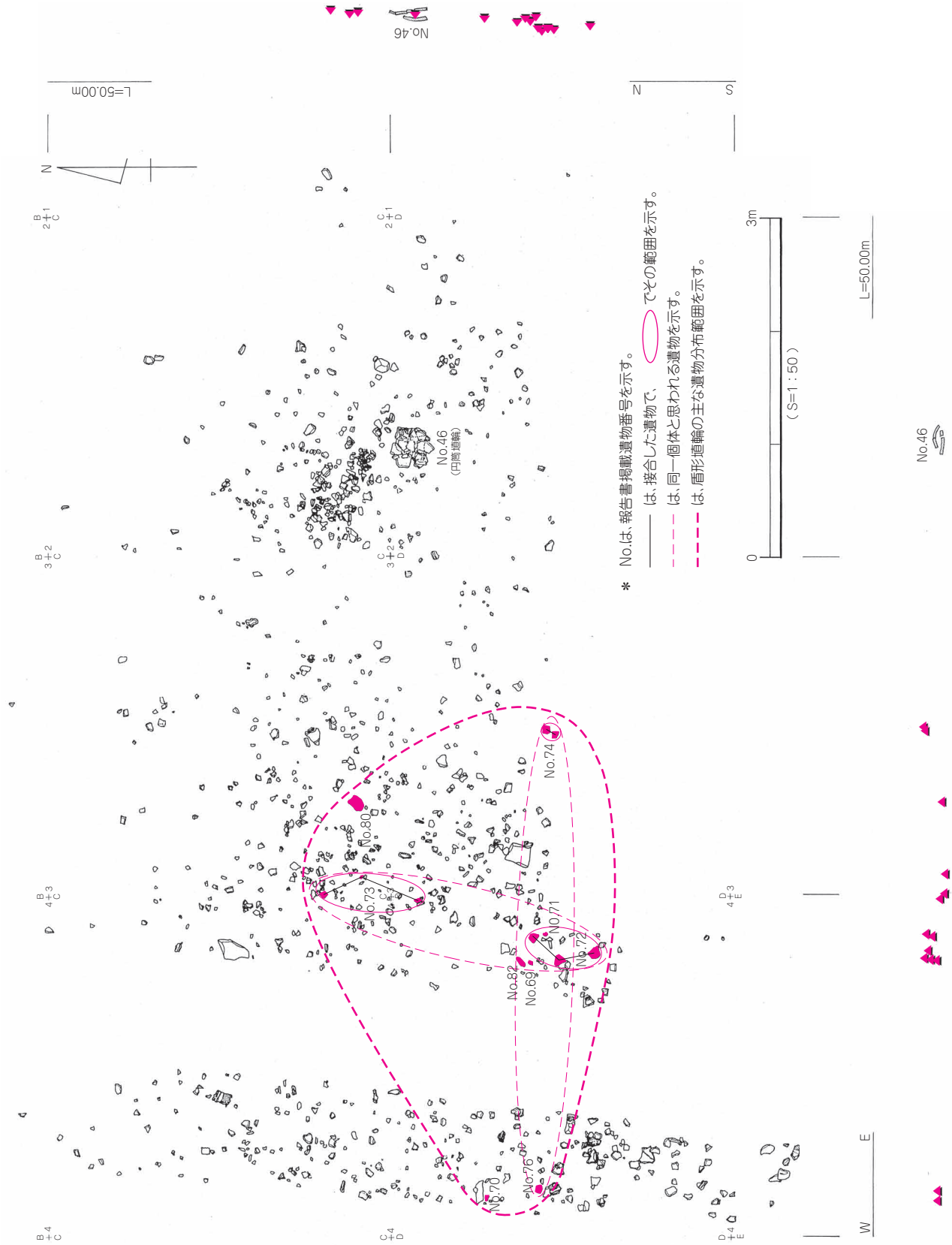

第20図　調査地中央部遺物出土状況図



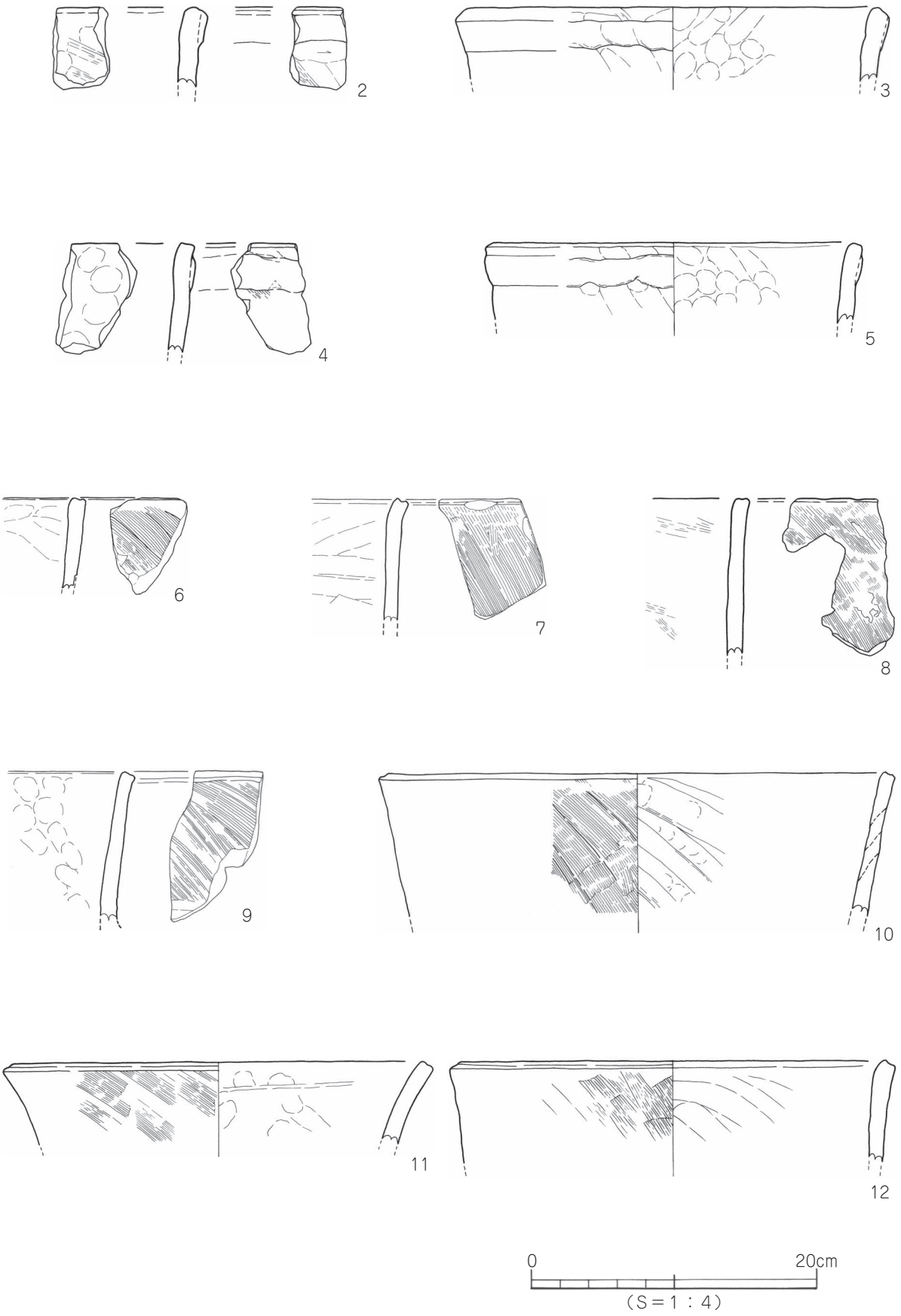

第21図　円筒埴輪接合状況図




第22図　朝顔形埴輪出土状況図

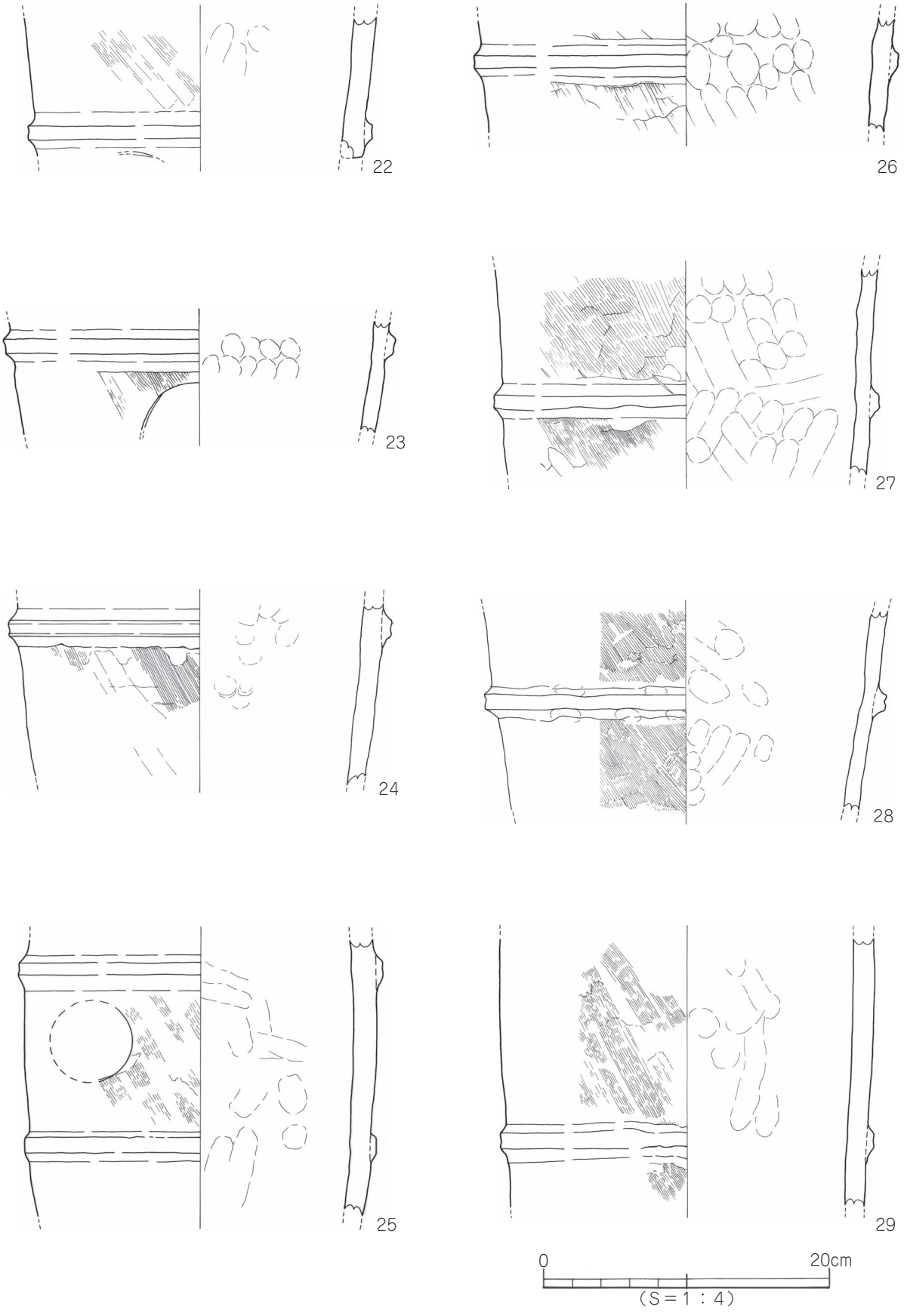



第23図　盾形埴輪出土状況図



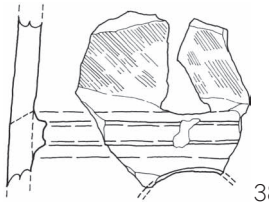

第24図　円筒埴輪実測図(1)

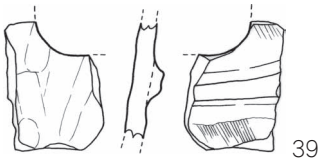
第25図　円筒埴輪実測図(2)

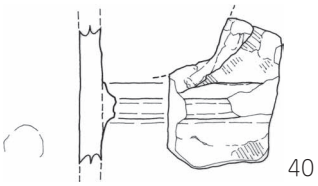


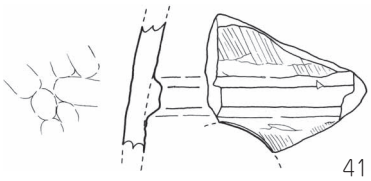

第26図　円筒埴輪実測図(3)

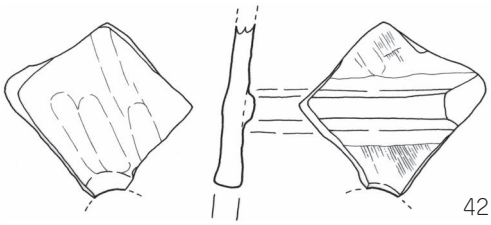
第27図　円筒埴輪実測図(4)

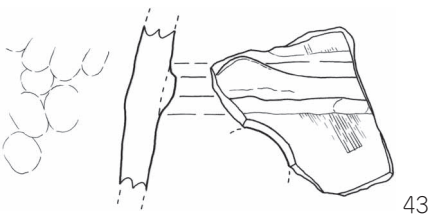


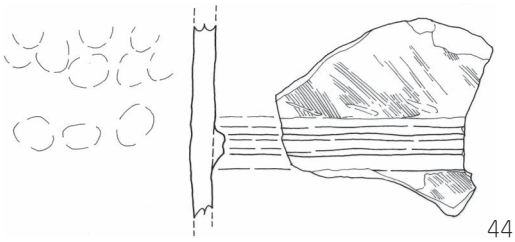



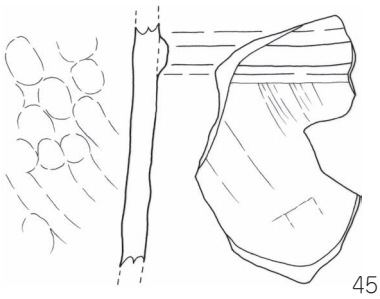



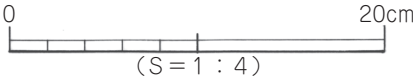



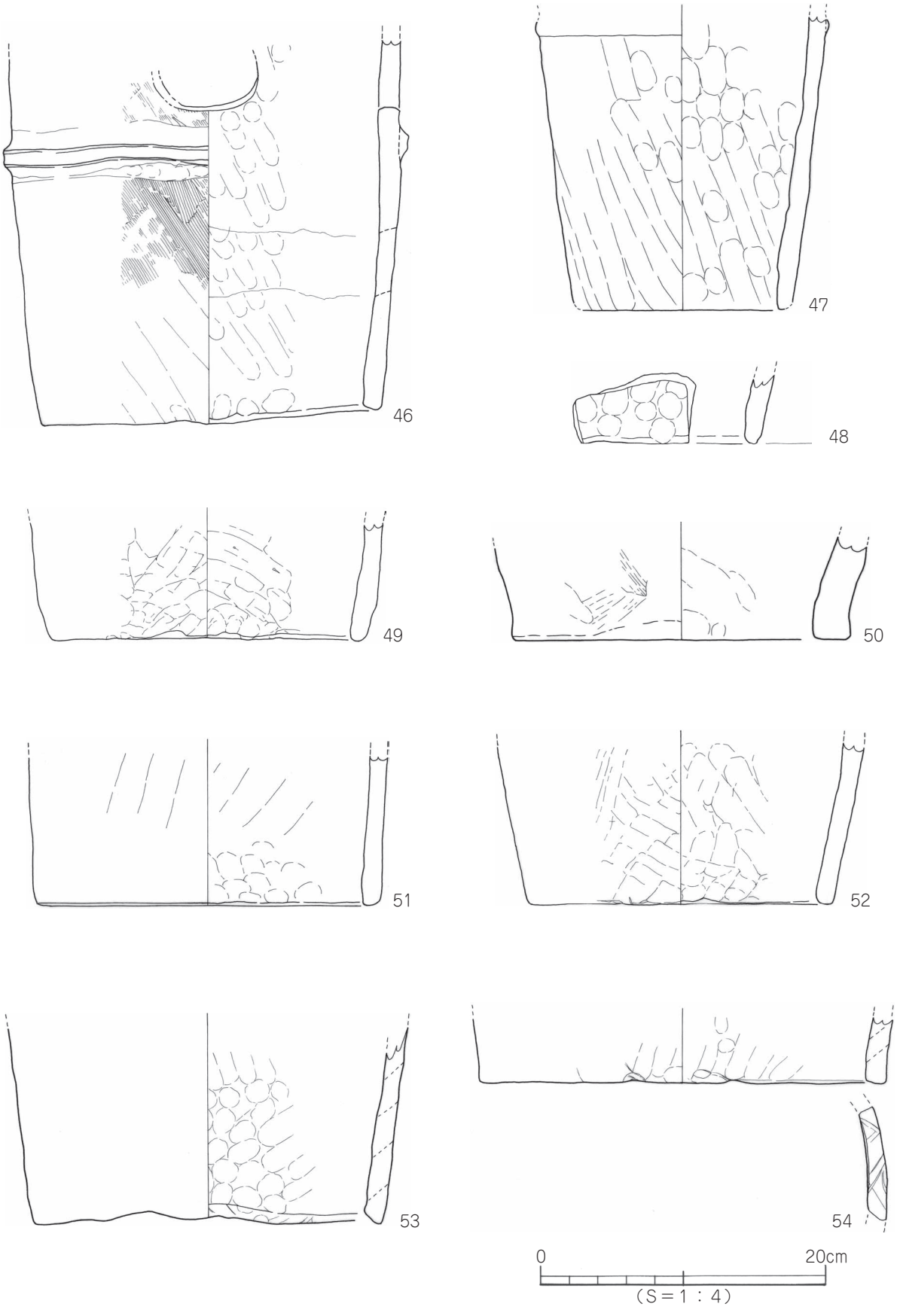



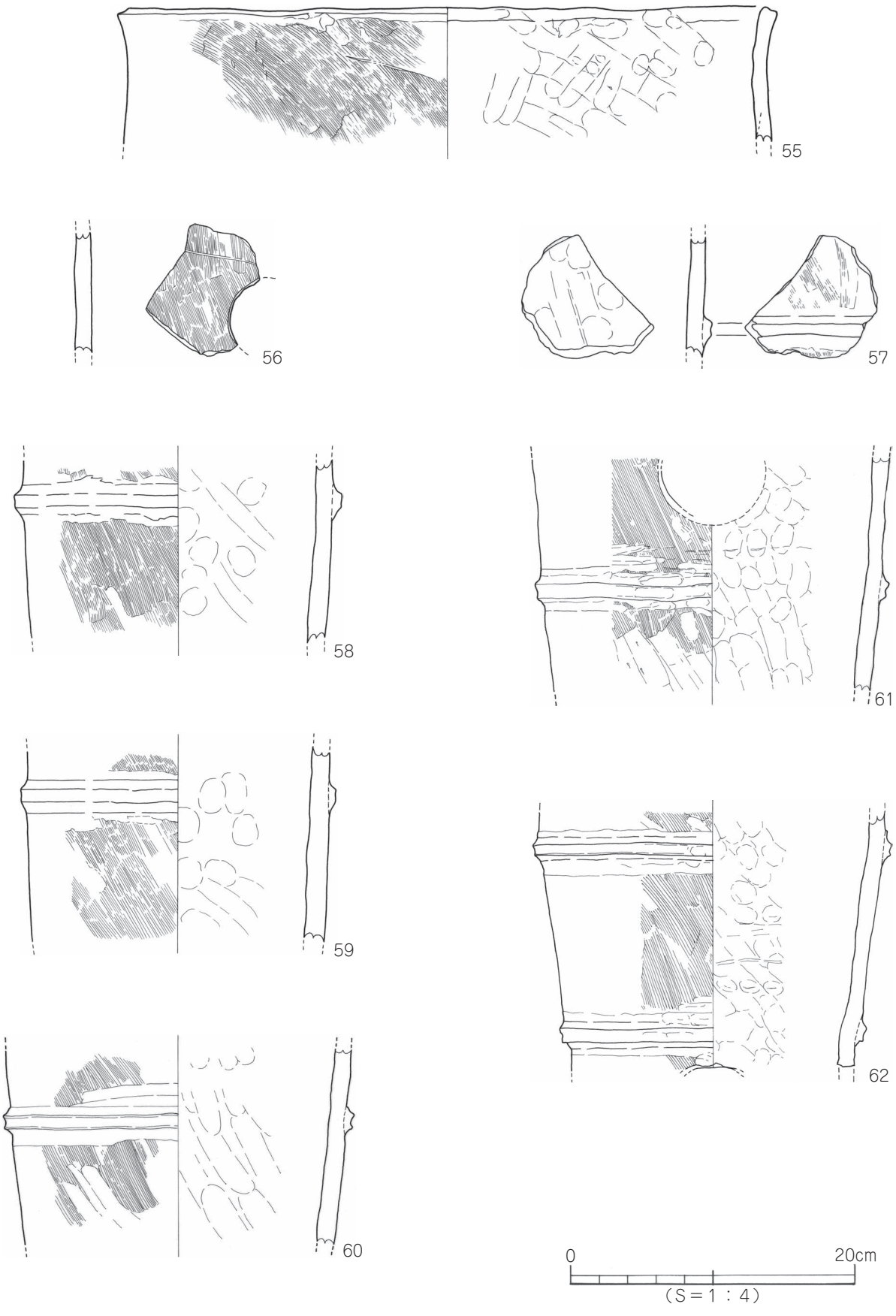



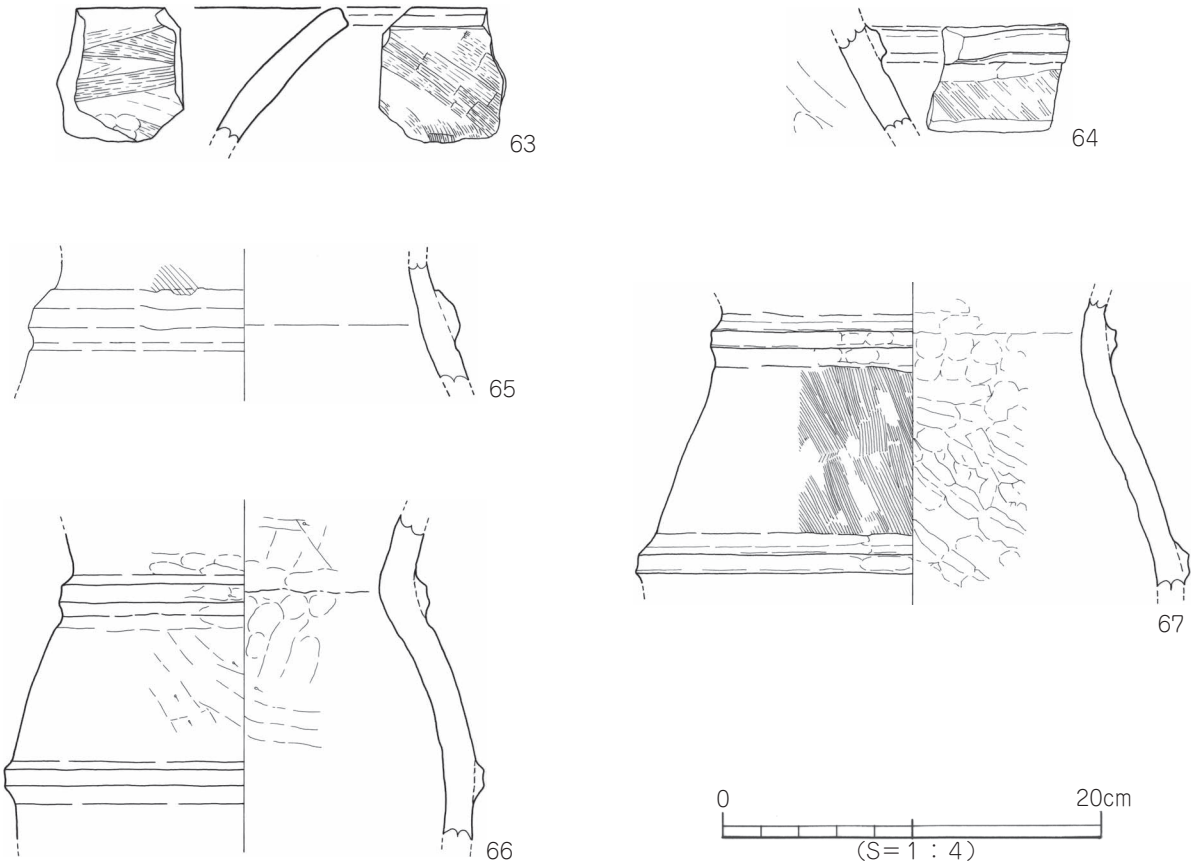

第28図　円筒埴輪実測図(5)



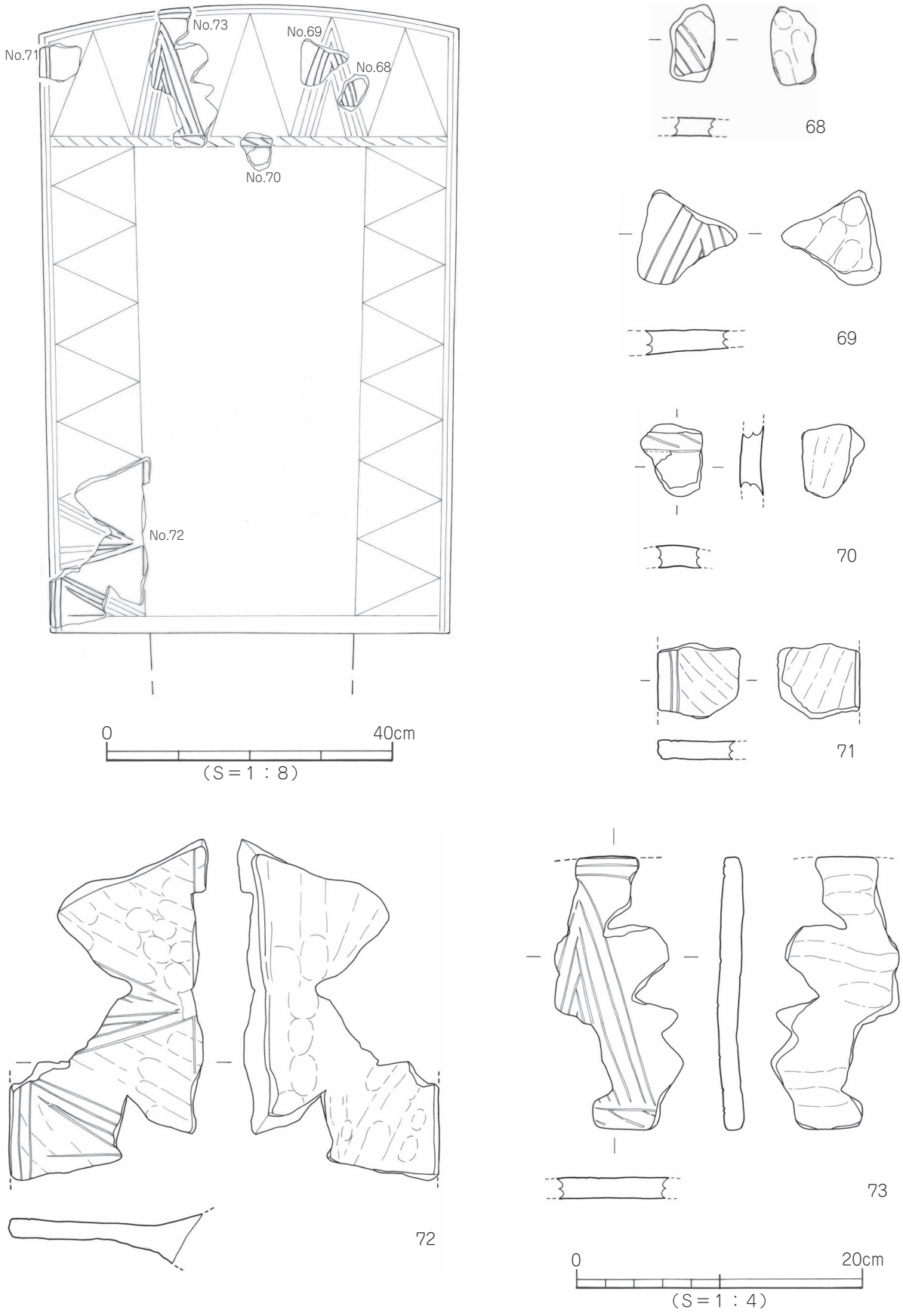

第29図　円筒埴輪実測図(6)



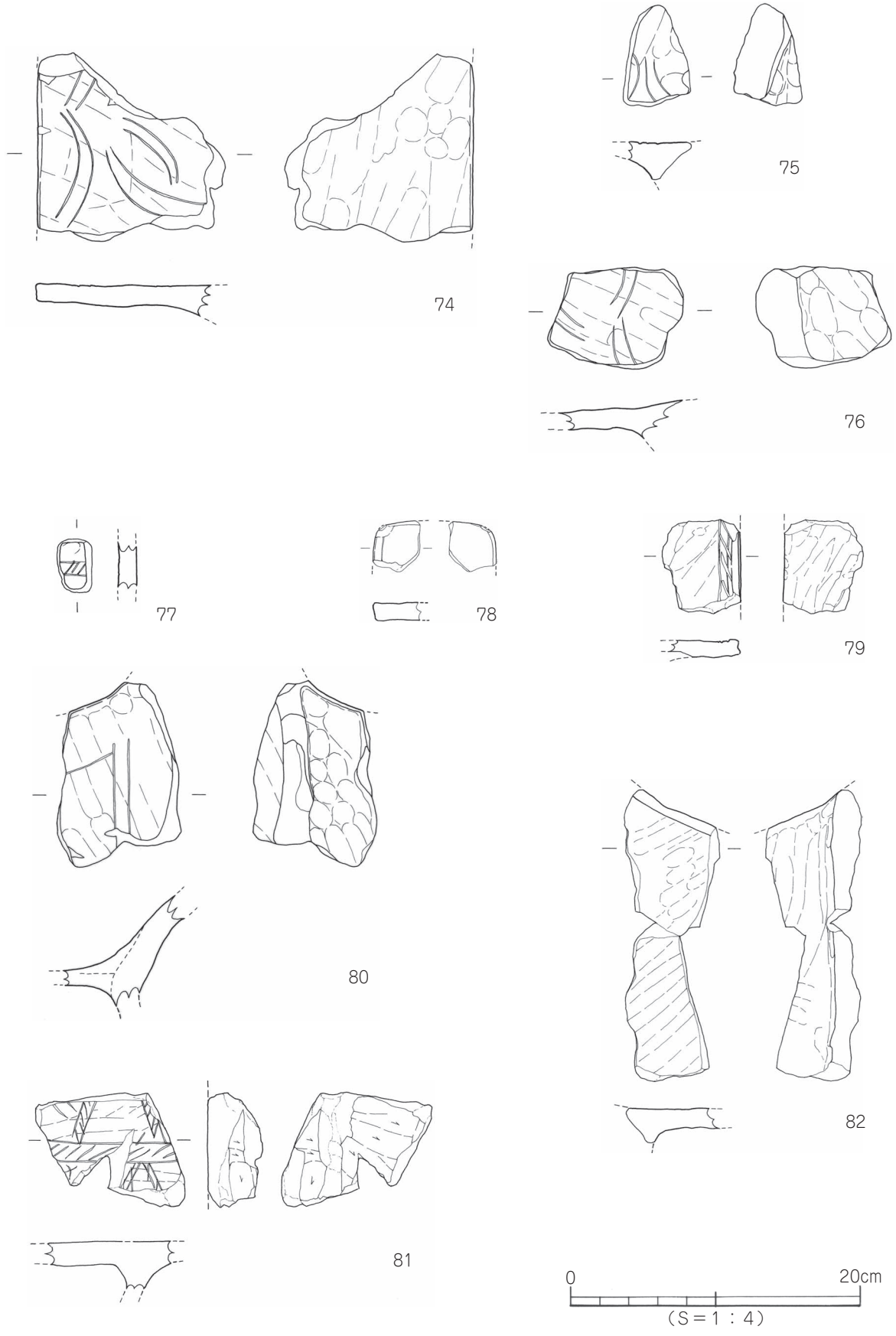

第30図　円筒埴輪実測図(7)



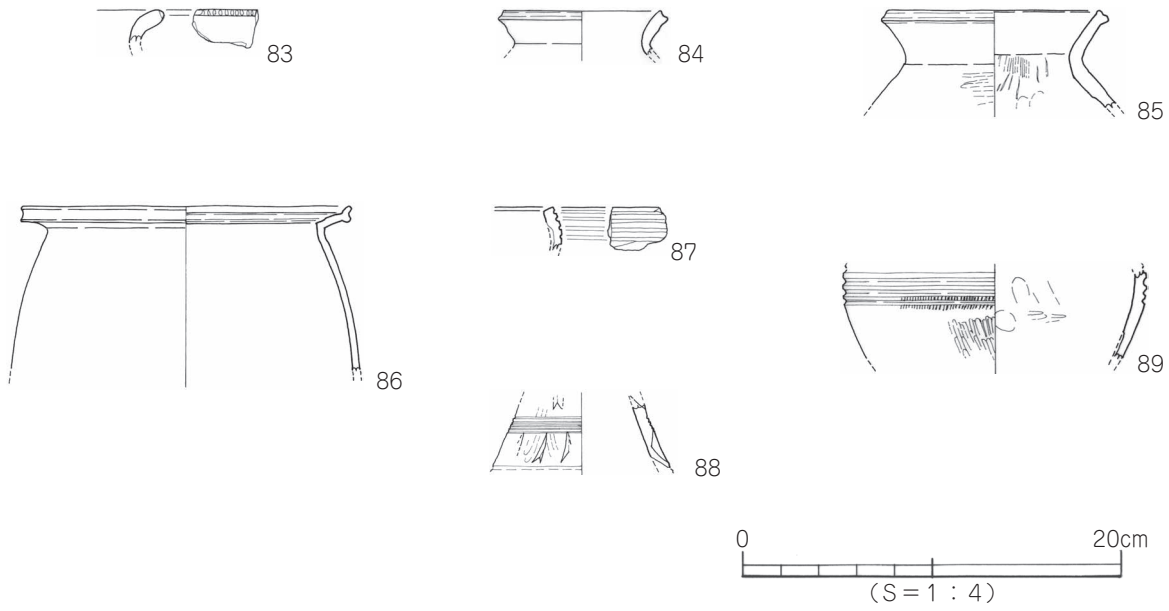

第31図　朝顔形埴輪実測図

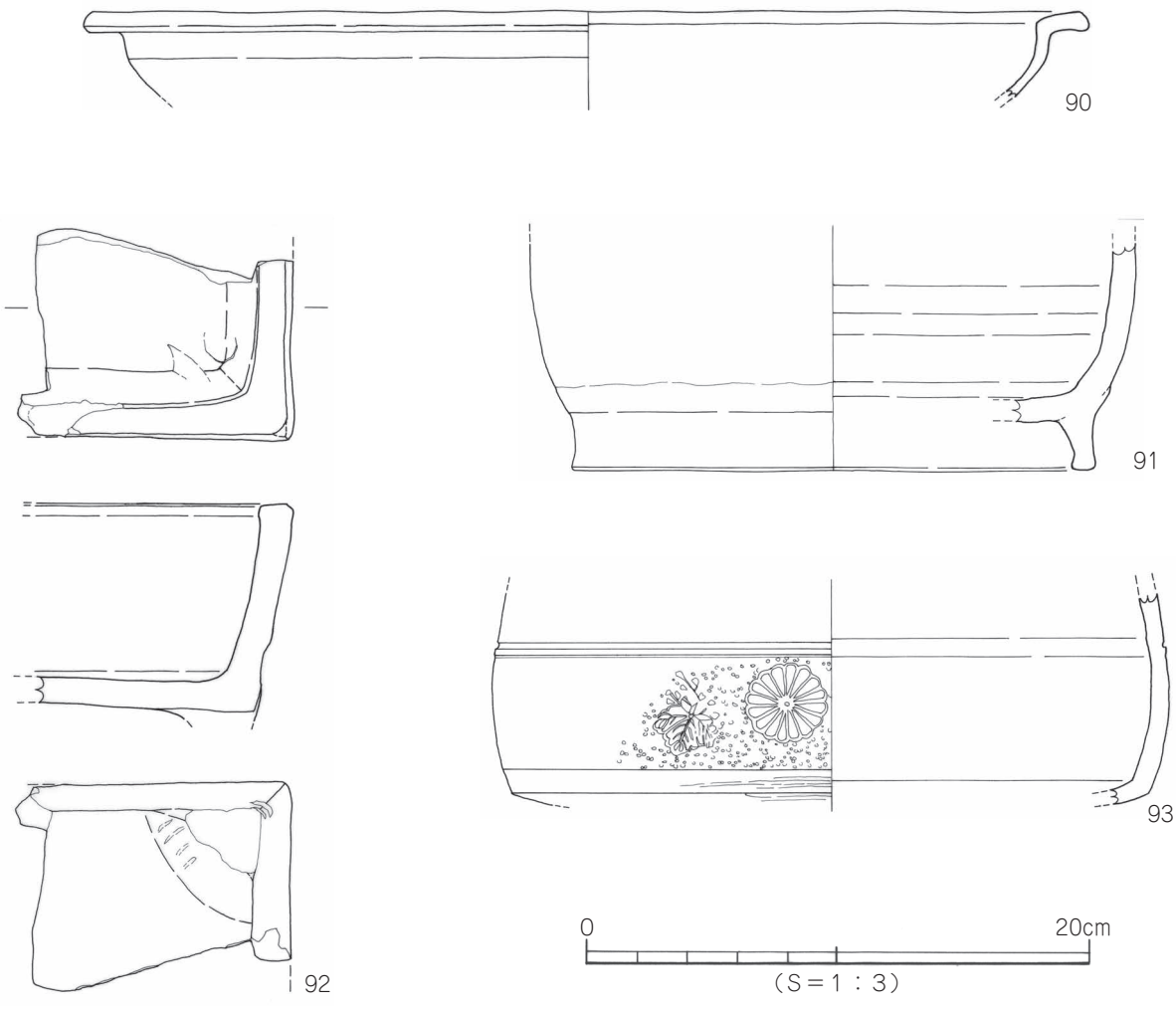



第32図　盾形埴輪実測図(1)

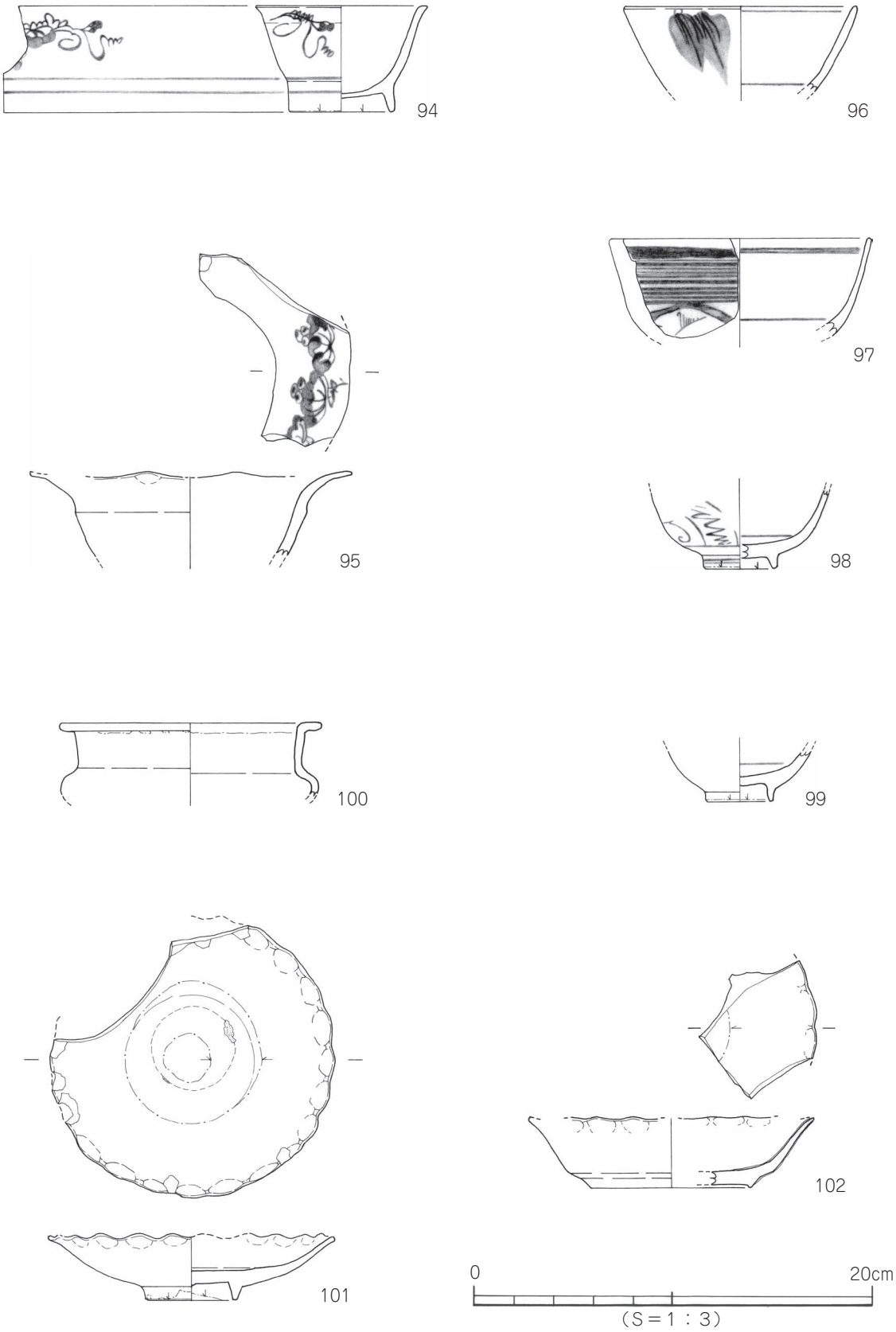



第33図　盾形埴輪実測図(2)

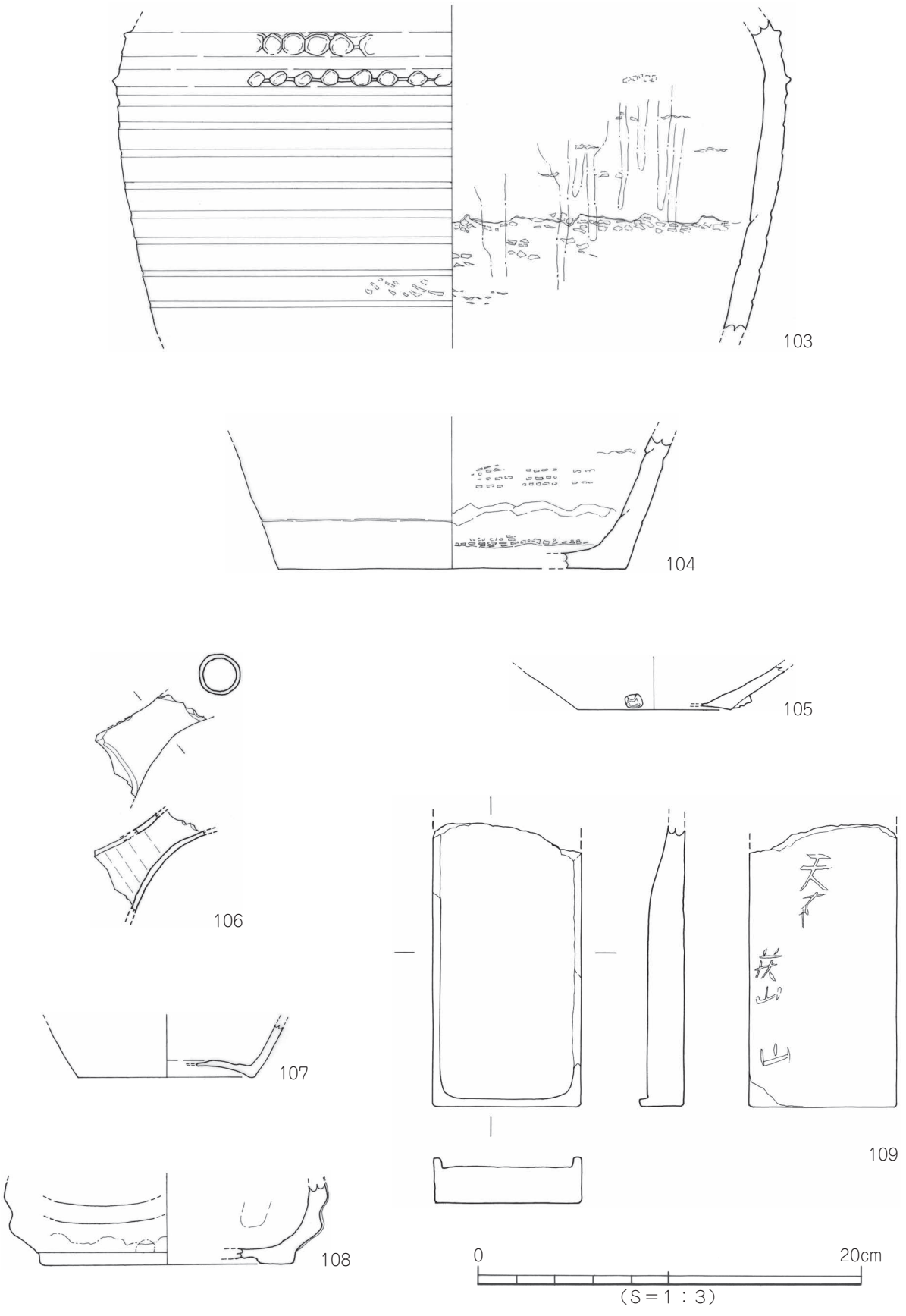



第34図　弥生土器・土師器・瓦質土器実測図




第35図　染付・白磁実測図




第36図　陶器・石製品実測図

# 第6章　まとめ

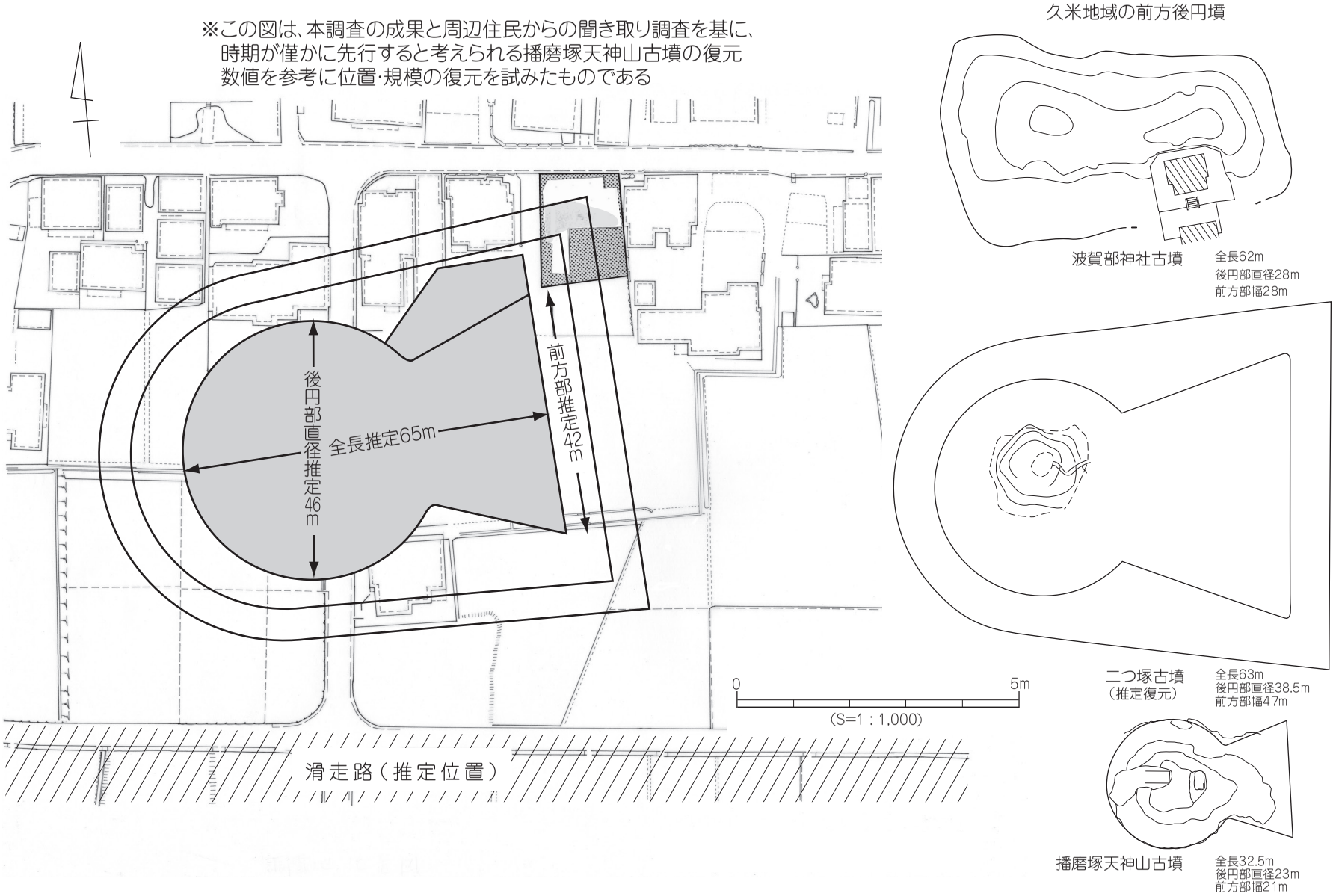
本調査により、従来よりタンチ山（双子塚）古墳推定地とされてきた当該地において、ほぼ原位置を復元することのできる６世紀初頭の埴輪片の集中を確認するとともに、周辺住民や当時の滑走路建設作業従事者など関係者の話から、古墳に係わる言い伝えや消滅前の景観について、聞き取り調査を実施することができた。本章では、出土した古墳時代の遺構・遺物を基に当該申請地一帯に係わる伝承を、総合的な観点から検討を加え、まとめとする。

これまで、タンチ山（双子塚）古墳は、５世紀後半から６世紀後半にかけての大型古墳と見られ、墳丘規模は、三島神社古墳や波賀部神社古墳等の規模に匹敵するものと言われてきた。今回の聞き取り調査により墳形は、従来言われてきたように二つの小山が接する、いわゆる景観的には前方後円墳の形状を呈していたことがほぼ明らかとなったが、全く、円墳若しくは方墳が並び立つ可能性が無いとは言えない。ただ、こうした情報を踏まえつつ、これまでのタンチ山（双子塚）古墳に関する報告を総括し、一墳丘の古墳と仮定するなら、それぞれ前方部、後円部の盛土に一基の石室を持つ、一墳丘二石室の構造であった可能性が浮かび上がってくる。また、この度の調査による埴輪の製作時期を考慮すると、６世紀初頭の盾形埴輪を持つ久米地域でも群を抜いた首長クラスの大型古墳と位置づけることが可能である。さらに、近年明らかにされてきた播磨塚天神山古墳や葉佐池古墳などの一墳丘多石室の事例とも符合するもので、多石室の古墳構造が当該地域の特長として捉えることもできる。

その上で、終戦末期の滑走路建設に伴い消滅した東側墳丘の石室の内部構造は、一枚石の奥壁に石棚を持つ両袖の構造であったと言われ、同様の構造を持つ古墳が近隣の鷹子町柳ヶ谷に存在すると伝えられてきた。現在の所、この種の石棚付の古墳は、同市下難波にある新城三号墳（墳丘 15m の円墳・両袖の横穴式石室で石室長 10m、玄室 6.9m、幅２m、高さ 2.4m）と四国中央市（旧川之江市）妻鳥の山口一号墳（玄室５m、幅２m、高さ 1.8m ※愛媛県史資料編）など県内で数例が知られる程度であり、類例が極めて少なく被葬者とのつながりを知る上で極めて特徴的な石室構造と言える。

こうした石棚付石室構造を持つ古墳の系譜について、故平井勝氏の考察によれば「和歌山県と九州北西部に核があり、その影響の下に中・四国の石棚は石室の形態差をこえて一つのまとまり（地域性）を持つ」と報告されている。またその出現期については「和歌山県の大谷 22 号墳、福岡県大塚古墳を例に 6 世紀初頭に比定し、その機能と目的、構築技術については、石棚下位の石障（棺）の存在から九州北西部の影響を受け、石室内を装飾的に荘厳に見せる意図を持ち、技術的には、中・四国の石室構築技術による」と示唆している。さらに同氏は、紀伊に関わりの深い円筒埴輪製作における断続ナデ技法の分布と石棚を持つ古墳の分布が重なることから、石棚を持つ石室の被葬者が古代氏族紀氏との関わりを窺える点に関して、「有力な意見ではあるが、それだけでは説明のつかないことも少なくない。」と結んでいる。ちなみに、タンチ山（双子塚）古墳に関係すると見られる今回検出された円筒埴輪には、断続ナデ技法は観察されていない。

これまで、タンチ山（双子塚）古墳に関する報告事例や聞き取り調査を参考に久米地域の首長墓としての可能性を模索してきたが、今回小規模な調査範囲であったため、当該調査においてタンチ山（双子塚）古墳に関わる直接的な墳丘施設等の痕跡を捉えることが出来なかったことは事実である。ただし、接合関係から見られる円筒埴輪や形象埴輪（盾形埴輪）の集中状況からは、大きく原位置を遊離したものとは考えられず、当該地が古墳を形成する何れかの施設位置に有ると見ることが出来る。




第37図　タンチ山(双子塚)古墳推定復元図

とするならば、埴輪が検出された地形は、北東から南西に向かって緩やかに下る窪地的立地にあり、この窪地的部分が墳丘を巡る周溝ないし、周溝内の土手斜面と捉えると、古墳の廃絶に合わせ、墳丘若しくは外周土手に据え置かれていた円筒埴輪・形象埴輪（盾形埴輪）列が倒壊し、埋没したものの一部が今回検出されたと考えて良いのではないだろうか。これらの調査結果等を参考にタンチ山（双子塚）古墳の推定復元図に示すように埴輪の検出位置が当該古墳の外郭施設部分に位置すると仮定すると、聞き取り調査により得られた景観との比較から、ほぼ同時期と考えられる播磨塚天神山古墳（全長 32.5m、後円部直径 23m、前方部幅 21m、前方部長さ 11m）をはるかに超える規模の古墳となり、さらに、6 世紀初頭に位置付けられる二つ塚古墳（全長 63m、後円部直径 38.5m、前方部幅 47m ※松山市文化財調査年報 19）や 5 世紀後半の波賀部神社古墳（全長 62m、後円部直径 28m、前方部幅 28m ※長井・岡田 1991）との比較では、ほぼ同規模以上の大きさを持つものと推定される。

以上、この度の発掘調査で検出された 6 世紀初頭に位置付けられる埴輪片の集中が、消滅したタンチ山（双子塚）古墳のものであると仮定し検討を加えてきた。

本調査が行われた平成 4 年以降、周辺地域の調査においては、古墳の位置を特定するような新たな証拠が確認されていない状況にあり、今後、積極的に古墳が所在すると想定される位置について、試掘確認調査等を実施し、同古墳に係わる詳細な情報を積み重ね、その上で同古墳の歴史的価値や規模の検証を行う必要性を強く感じている。

この度の発掘調査の成果は、松山における古墳時代社会の様相を考える上で欠く事の出来ない成果であることは言うまでもなく、既に失われてしまった「タンチ山（双子塚）古墳」の被葬者が久米地域の首長層に位置し、伝承にあった石棚に特長付けられるように、瀬戸内を舞台として九州北西部や和歌山（畿内）と強いつながりを持っていた可能性がある。

また、久米地域に集中すると言われるこれらの古墳時代後期の前方後円墳の被葬者が、国指定史跡「久米官衙遺跡群」の成立に先立つ 6 世紀初め頃までには、既に九州北西部や畿内との強いつながりを背景に松山平野の中心的盟主としてその地位を確立していた証と評価することのできる興味深い資料を提示することができたものと考えている。

今後も引き続き、このように既に消滅してしまった遺跡の僅かな痕跡を追いつつ、比較・検証しながらその成果を積み上げ、松山平野の首長墓の動態を今一度見直す時期が来ていることを強く感じている。

## 【参考文献】


栗田茂敏　2003「葉佐池古墳」松山市教育委員会

岡田敏彦　2001「愛媛県における首長墳素描」『紀要愛媛』第２号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹　2008「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛』第８号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌　64 － 2』

田中秀和　1994「畿内における盾形埴輪の検討－革盾模倣盾形埴輪を中心として－」

冨田尚夫　2000「愛媛県における前方後円墳」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第 14 回大会研究発表要旨集

山内英樹　2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（1）－谷田２号窯出土資料の再検討－」『紀要愛媛』創刊号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹　2001「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）－特徴的な形態・技法を有する埴輪について－」『紀要愛媛』第２号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹　2002「東野お茶屋台遺跡（３次）出土埴輪の諸問題－ 18 号墳出土資料より－」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

山内英樹　2004「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（4）－松山市・二つ塚古墳資料紹介および県内資料の製作手法観察－」『紀要愛媛』第４号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹　2005「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（5）－風早の埴輪資料について－」『紀要愛媛』第５号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

山之内志郎　2008「北久米遺跡４次調査地」「北久米遺跡６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 19』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

吉岡和哉　2001『播磨塚天神山古墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

池田学・宮崎泰好　1989「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ－昭和 62 ～ 63 年－』松山市教育委員会

愛 媛 県　1986『愛媛県史－資料編　考古－』

愛媛県教育委員会　1991『愛媛県内古墳－分布調査報告－』

岡田敏彦　1984「経ヶ岡古墳」『四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1986『永塚古墳』「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ」松山市教育委員会

栗田茂敏　1994『桧山峠７号墳』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相田則美　1980「４・５世紀伊予の首長墓」『社会科研究　第１号』社会科研究会

相田則美　1982「伊予における古墳の出現と展開－道後地域の集団関係を中心に－」『シンポジュウム　愛媛の前方後円墳』

長井数秋・森光晴　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

長井数秋・岡田敏彦　1991「伊予」『前方後円墳集成－中国・四国編－』山川出版社

正岡睦夫　1980「愛媛県の前方後円墳編年表」『シンポジュウム　四国の前方後円墳』

松 山 市　1987『松山市史料集－第２巻－』

松山市考古館　1996『平成８年度特別展　葉佐池古墳』

松山市教育委員会　1987「永塚古墳」『松山市史料集』第２巻（考古編Ⅱ）

上田宏範　1996「前方後円墳」〈増補新版〉

平井　勝　1995「中・四国の石棚をもつ横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第９回大会

## 遺物観察表　　－ 凡例 －

（1） 下の表は、本調査地出土遺物についての計測値及び観察一覧である。番号は、本文の掲載番号と対応している。遺物観察表は、重松佳久と田﨑真理が作成した。

（2） 遺物観察表の各掲載について

法量欄　（ ）：推定復元値

調整欄　土製品の各部名称を略記した。

例）口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、底－底部、端－端部、坏－坏部、坏上－坏部上半、坏下－坏部下半

色調欄　陶磁器の各部名称を略記した。

例）胎－胎土、釉－釉薬

胎土欄　混和剤を略記した。

例）砂－砂粒、長－長石、石－石英、密－精製土、金－金雲母

（ ）：混和剤の大きさ。単位 mm。

焼成欄　焼成具合を略記した。

例）◎－良好、○－良、△－不良

表 1　出土遺物観察表

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 (cm) | | 形態・施文 | 調整 | | 色調 (外面) (内面) | 胎土 焼成 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 1 | 土師器 | 坏 | 口径<br>底径<br>器高 | 11.7<br>6.3<br>3.2 | 平底。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。 | ヨコナデ<br>［底］回転糸切り痕 | ヨコナデ<br>［底］ナデ | 浅黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 密<br>◎ | | 4 |
| 2 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 5.8 | 口縁部片。端部に細く平たいタガを持つ。端面はやや窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>［タガ］ナデ・ヨコナデ<br>タテハケ (8 本 /cm) | ［口端］ナデ<br>タテハケ (8 本 /cm) | 橙色<br>橙色 | 微砂粒<br>○ | 土師質 | 4 |
| 3 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (28.4)<br>5.1 | 口縁端部に細く平たいタガを持つ。タガの貼付・調整は粗雑。 | ナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質 | 4 |
| 4 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.7 | 口縁部片。端部からやや下位に細く平たいタガを持つ。タガの貼付・調整は粗雑。端面はやや窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>［タガ］ナデ・ヨコナデ<br>一部、ハケ | ナデ<br>指頭痕 | 明黄褐色<br>明黄褐色 | 微砂粒<br>△ | 土師質 | 4 |
| 5 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (26.3)<br>5.4 | 端部からやや下位に細く平たいタガを持つ。タガの貼付・調整は粗雑。 | ナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質 | 4 |
| 6 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 6.7 | 口縁部片。ほぼ直立し、端面は窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>タテハケ (7 本 /cm) | ナデ | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>○ | 土師質 | |
| 7 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.2 | 口縁部片。端部がやや外反し、端面は窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>タテハケ (7 ～ 8 本 /cm)<br>(15 ～ 16 本 /cm) | ［口端］ヨコナデ<br>板ナデ | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質<br>No.8 と<br>同一個体？ | 4 |
| 8 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 11.0 | 口縁部片。ほぼ直立し、端面は窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>タテハケ (7 ～ 8 本 /cm)<br>(15 ～ 16 本 /cm) | ［口端］ヨコナデ<br>板ナデ | 橙色<br>橙色 | 微砂粒<br>◎ | 土師質<br>No.7 と<br>同一個体？ | |
| 9 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 10.3 | 口縁部片。やや外反し、端面は窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>ハケ (9 ～ 12 本 /cm) | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質 | 4 |
| 10 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (34.8)<br>10.1 | 口縁部は直線的に外反し、端面は窪む。 | ［口端］ヨコナデ<br>ハケ (8 ～ 12 本 /cm) | ［口端］ヨコナデ<br>板ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石 (1 ～ 3)<br>赤色粒<br>◎ | 土師質 | 4 |

表２　出土遺物観察表

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量（cm） | | 形態・施文 | 調整 | | 色調（外面）（内面） | 胎土 焼成 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 11 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (30.0)<br>5.7 | 口縁部は外反し、端面は窪む。 | [口端]ヨコナデ<br>タテハケ(9本/cm) | [口端]ヨコナデ<br>ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 微砂粒<br>◎ | 土師質 | 4 |
| 12 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (29.6)<br>7.1 | 口縁部はやや外反し、端面は窪む。 | [口端]ヨコナデ<br>タテハケ(7本/cm) | ナデ | 橙色<br>橙色 | 石(1)<br>○ | 土師質 | 4 |
| 13 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.1 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。小型。 | タテハケ(7本/cm)<br>[タガ]ナデ・ヨコナデ | タテナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 微砂粒<br>○ | 土師質 | |
| 14 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 14.1 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | 摩滅<br>一部、ハケ(6本/cm)<br>[タガ]ナデ・ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1～2)<br>△ | 土師質 | 5 |
| 15 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 10.7 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。タガの貼付・調整は粗雑。 | タテハケ(6～7本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 暗赤褐色<br>暗赤褐色 | 石・長(1)<br>○ | 土師質 | |
| 16 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 6.0 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(7～8本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>にぶい褐色 | 微砂粒<br>◎ | 土師質 | 5 |
| 17 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 6.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ(8～10本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>明黄褐色 | 石・長(1～2)<br>○ | 土師質 | |
| 18 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 5.2 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(8～9本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい橙色<br>にぶい黄橙色 | 密<br>○ | 土師質 | |
| 19 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 13.9 | タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。円孔。円孔端面にハケ。 | タテハケ(12本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 20 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 17.3 | タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | タテハケ(6～7本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | タテナデ<br>指頭痕 | にぶい橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長(1)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 21 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 18.2 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。1条の線刻。 | ハケ(7～11本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | タテナデ<br>(工具はヘラか?) | 橙色<br>橙色 | 石・長(1～2)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 22 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.8 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | タテハケ(7本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | 摩滅<br>ナデか? | 橙色<br>黄橙色 | 微砂粒<br>△ | 土師質 | |
| 23 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.8 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | タテハケ(7～8本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1)<br>△ | 土師質 | 5 |
| 24 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 12.8 | 基底部付近。工具により押圧調整する。タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(8本/cm)<br>→板オサエ<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1～3)<br>○ | 土師質 | |
| 25 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 19.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | タテハケ(7本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 明赤褐色<br>明赤褐色 | 石・長(1～3)<br>△ | 土師質 | 5 |
| 26 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 8.0 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(12本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい褐色<br>にぶい褐色 | 石・長(1)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 27 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 14.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。タガ上部にヘラ痕。 | タテハケ(5本/cm)<br>(12本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい赤褐色<br>にぶい赤褐色 | 石・長(1～2)<br>◎ | 土師質 | |
| 28 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 13.8 | タガ断面は不整形な「M」字状。 | ハケ(7～11本/cm)<br>(10～12本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ・指頭痕 | ナデ<br>指頭痕 | にぶい赤褐色<br>橙色 | 石(1～2)<br>赤色土<br>◎ | 土師質 | |
| 29 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 18.8 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(12本/cm)<br>[タガ]ナデ・ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石(1)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 30 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.2 | タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ(6本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | タテナデ | 橙色<br>にぶい黄橙色 | 密<br>△ | 土師質 | |
| 31 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 12.0 | タガは摩滅の為、元の形状は不明。円孔。円孔端面にハケ。 | タテハケ(摩滅)<br>[タガ]摩滅 | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石(1)<br>○ | 土師質 | |
| 32 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 12.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ(7～14本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | タテナデ<br>指頭痕 | にぶい橙色<br>にぶい橙色 | 石・長(1～2)<br>◎ | 土師質 | 5 |
| 33 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 14.9 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | ハケ(8～12本/cm)<br>[タガ]ナデ・ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1～2)<br>○ | 土師質 | 5 |
| 34 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 8.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ(7～11本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長(1～3)<br>◎ | 土師質 | 5 |
| 35 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 12.8 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | ハケ(10～13本/cm)<br>[タガ]ヨコナデ | タテナデ<br>ヘラ先圧痕<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長(1～2)<br>赤色粒<br>◎ | 土師質 | 5 |

表３　出土遺物観察表

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 (cm) | | 形態・施文 | 調整 | | 色調 (外面) (内面) | 胎土 焼成 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 36 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 8.5 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | 摩滅<br>一部、タテハケ<br>(7 本 /cm) | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>にぶい褐色 | 石・長 (1)<br>△ | 土師質 | 5 |
| 37 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 23.4 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | タテハケ (8 本 /cm)<br>[タガ] ナデ・ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 茶褐色粒<br>◎ | 土師質 | 5 |
| 38 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.1 | 胴部片。タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | ハケ (7 ～ 8 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい橙色<br>にぶい橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質 | |
| 39 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 6.9 | 胴部片。タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。円孔。円孔端面にハケ。 | ハケ (9 ～ 10 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1)<br>◎ | 土師質 | 5 |
| 40 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.1 | 胴部片。タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔周辺部の調整が粗雑。 | タテハケ (7 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>△ | 土師質 | |
| 41 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 7.4 | 胴部片。タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | ハケ (10 ～ 11 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1)<br>○ | 土師質 | |
| 42 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.2 | 胴部片。タガ中央に窪みが残ることからタガ断面の元の形状は「M」字状か。突出度は低い。円孔。 | ハケ (9 ～ 10 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | タテナデ<br>指頭痕 | 浅黄橙色<br>浅黄橙色 | 長石粒<br>△ | 土師質 | |
| 43 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.0 | 胴部片。タガ断面は台形状で、突出度は低い。タガの貼付・調整が粗雑。円孔。 | タテハケ ( 摩滅 )<br>[タガ] ナデ・ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい橙色<br>にぶい橙色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>○ | 土師質 | |
| 44 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 10.2 | 胴部片。タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ (11 ～ 12 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1)<br>△ | 土師質 | |
| 45 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 14.1 | 胴部片。タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ ( 摩滅 )<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 長石粒<br>△ | 土師質 | |
| 46 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | 23.3<br>25.7 | タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | [胴] ハケ (6 ～ 8 本 /cm)<br>[底] 板オサエ<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>明黄褐色 | 石 (1 ～ 2)<br>赤色粒<br>◎ | 土師質 | 6 |
| 47 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (15.2)<br>19.7 | 基底部が直線的に外反しながら立ち上がる。基底部径に比べ基底部高が大きい。タガの形状は不明。 | 工具による強いタテナデ ( ケズリ風 )<br>工具幅　約 1.5cm | タテナデ<br>指頭痕 | にぶい褐色<br>にぶい褐色 | 石・長 (1)<br>赤色粒<br>◎ | 土師質 | 6 |
| 48 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 4.9 | 基底部は外反しながら立ち上がる。端面にヘラ痕。 | 摩滅 | 指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石英粒<br>長石粒<br>△ | 土師質 | 6 |
| 49 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (19.4)<br>8.1 | 基底部はやや外反しながら立ち上がる。 | 板オサエ<br>[底端] ナデ・圧痕 | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 長 (1)<br>△ | 土師質 | 6 |
| 50 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (23.6)<br>7.2 | 基底部。器壁が厚い。自重によってつぶれた端部をケズリ・ナデにより調整。端面に圧痕。 | ハケ (6 ～ 7 本 /cm)<br>→ナデ | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1 ～ 3)<br>○ | 土師質 | 6 |
| 51 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (22.0)<br>10.4 | 基底部は外反ぎみに立ち上がる。 | ナデ | ナデ<br>[底端] 指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 石・長 (1 ～ 3)<br>◎ | 土師質 | 6 |
| 52 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | 21.0<br>11.0 | 基底部は外反しながら立ち上がる。 | 板オサエ？<br>[底端] ナデ・圧痕 | ナデ<br>指頭痕 | 橙色<br>橙色 | 長 (1 ～ 3)<br>△ | 土師質 | 6 |
| 53 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (24.5)<br>13.7 | 基底部はやや外反しながら立ち上がる。端面にヘラ痕。 | 板オサエ？ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長 (1)<br>◎ | 土師質 | 6 |
| 54 | 埴輪 | 円筒 | 底径<br>残高 | (28.3)<br>4.5 | 基底部はやや外反しながら立ち上がる。端面にヘラ痕。 | ナデ | ナデ<br>指頭痕 | 明赤褐色<br>明赤褐色 | 石・長 (1)<br>◎ | 土師質 | 6 |
| 55 | 埴輪 | 円筒 | 口径<br>残高 | (46.0)<br>9.5 | 口縁端部がやや外反し、端面は窪む。口縁下に線刻。大型。 | [口端 ] ヨコナデ<br>ハケ (9 ～ 16 本 /cm) | ナデ<br>指頭痕 | 灰黄褐色<br>にぶい橙色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>◎ | 須恵質 | 7 |
| 56 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 9.3 | 胴部片。1 条の線刻。円孔。 | タテハケ (9 本 /cm) | ナデ<br>指頭痕 | にぶい黄褐色<br>橙色 | 微砂粒<br>◎ | 須恵質 | 7 |
| 57 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 8.5 | 胴部片。タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ (8 本 /cm)<br>→ナデ<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | にぶい黄褐色<br>にぶい赤褐色 | 微砂粒<br>○ | 須恵質 | |
| 58 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 13.7 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ (9 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 黄褐色<br>にぶい黄褐色 | 石粒 (1 ～ 2)<br>◎ | 須恵質 | |
| 59 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 12.5 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | タテハケ (8 本 /cm)<br>[ タガ ] ヨコナデ | ナデ<br>指頭痕 | 灰黄褐色<br>灰黄褐色 | 微砂粒<br>◎ | 須恵質 | |
| 60 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 13.8 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ (8 ～ 10 本 /cm)<br>ハケ幅 3 ～ 4 ｃｍ<br>[ タガ ] ヨコナデ | タテナデ<br>指頭痕 | 灰黄褐色<br>灰黄褐色 | 白色粒<br>◎ | 須恵質 | |

表４　出土遺物観察表

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量（cm） | | 形態・施文 | 調整 | | 色調（外面）（内面） | 胎土 焼成 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 61 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 16.4 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。円孔端面にハケ。基底部付近か？ | ［胴］ハケ（9本/cm）ハケ幅３～4cm ［底］工具によるナデ ［タガ］ヨコナデ | タテナデ 指頭痕 | 灰黄色 灰黄褐色 | 石・長（1～2） ◎ | 須恵質 | 7 |
| 62 | 埴輪 | 円筒 | 残高 | 18.3 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。円孔。 | ハケ（6～12本/cm） ハケ幅２～３ｃｍ ［タガ］ヨコナデ | タテナデ 指頭痕 | 褐灰色 灰黄褐色 | 長（1～2） ◎ | 須恵質 | 7 |
| 63 | 埴輪 | 朝顔 | 残高 | 7.0 | 口縁部片。大きく外反し、端面は窪む。 | ［口］ヨコナデ ハケ（７本/cm） | ハケ（7本/cm） →ナデ | 橙色 橙色 | 石・長（1） ○ | 土師質 | 7 |
| 64 | 埴輪 | 朝顔 | 残高 | 5.7 | 肩部片。タガ断面は台形状で、突出度は低い。 | タテハケ（7～8本/cm） ［タガ］ヨコナデ | ナデ | にぶい黄橙色 にぶい黄橙色 | 密 ○ | 土師質 | 7 |
| 65 | 埴輪 | 朝顔 | 残高 | 7.3 | タガ断面は幅広い台形状で、突出度は低い。 | ハケ（5本/cm） ［タガ］ヨコナデ | 摩滅 | 橙色 橙色 | 石・長（1～2） ◎ | 土師質 | 7 |
| 66 | 埴輪 | 朝顔 | 残高 | 17.2 | タガ断面は「M」字状で、突出度は低い。 | 摩滅 ナデか？ | ナデ 指頭痕 | 赤茶褐色 赤茶褐色 | 石・長（1～3） 赤色粒 △ | 土師質 | 7 |
| 67 | 埴輪 | 朝顔 | 残高 | 15.1 | タガ断面は不整形な「M」字状で、突出度は低い。 | ハケ（8～10本/cm） ［タガ］ヨコナデ | タテナデ 指頭痕 | 灰褐色 灰褐色 | 長（1～3） ◎ | 須恵質 | 7 |
| 68 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 5.4 3.1 1.4 | 鋸歯文の一部が残る。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 長石粒 ○ | 土師質 | 8 |
| 69 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 6.0 5.8 1.4 | 鋸歯文の一部が残る。 | ナデ | ナデ | 橙色 にぶい橙色 | 長（1） ○ | 土師質 | 8 |
| 70 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 4.9 4.1 1.4 | 梯子文を施した界線部片。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 微砂粒 ○ | 土師質 | 8 |
| 71 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 5.1 5.7 1.3 | 鰭端部片。外縁に２条の平行沈線文。端面は強いナデにより凹線風に窪む。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 微砂粒 ○ | 土師質 | 8 |
| 72 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 20.6 9.7 4.2 | 鰭部。界線には１条の沈線文、外区には４条１単位の鋸歯文。端面は強いナデにより窪む。円筒部との接合面を看取できる。 | ナデ | ナデ | 橙色 にぶい黄橙色 | 石・長（1） ○ | 土師質 | 8 |
| 73 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 19.2 7.9 1.5 | 頂部は丸みを持つ。外縁には２条の平行沈線文、外区には５条１単位の鋸歯文、内区との界線には梯子文を施す。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 微砂粒 ○ | 土師質 | 8 |
| 74 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 12.5 12.9 2.3 | 胴部中位の鰭部片。２条１単位のヘラ描き弧文。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 長（1） ○ | 土師質 | 9 |
| 75 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 7.0 4.3 2.5 | 鰭部片。２条１単位のヘラ描き弧文。円筒部との接合面を看取できる。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 長石粒 ○ | 土師質 | 9 |
| 76 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 7.0 9.2 2.2 | 鰭部片。２条１単位のヘラ描き弧文。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 長石粒 ○ | 土師質 | 9 |
| 77 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 3.6 2.4 1.2 | 梯子文を施した界線部片。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 石（1） ◎ | 土師質 | 9 |
| 78 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 4.0 3.2 1.3 | 鰭端部片。外縁に１条の沈線文の痕跡。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 密 ○ | 土師質 | 9 |
| 79 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 6.5 5.4 1.3 | 鰭端部片。外縁に梯子文。端面は強いナデにより窪む。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 密 ○ | 土師質 | 9 |
| 80 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 11.1 7.9 2.8 | 山型の頂部。界線には２条の沈線文、外区鰭部分には１条の斜め沈線文。 | ナデ | ナデ | 橙色 にぶい黄橙色 | 長石粒 赤色粒 ○ | 土師質 | 9 |
| 81 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 7.8 10.2 3.9 | 頂部片。円筒部を一部残す。内外区とも細い梯子文で鋸歯文を描き、界線には太い梯子文を施す。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 密 ○ | 土師質 | 9 |
| 82 | 埴輪 | 盾型 | 長さ 幅 厚さ | 20.1 6.4 2.3 | 山型の頂端部を残す鰭部。円筒部との接合面を看取できる。 | ナデ | ナデ | 橙色 橙色 | 密 ○ | 土師質 | 9 |
| 83 | 弥生土器 | 甕 | 残高 | 1.3 | 「く」字状口縁部片。端面にキザミ。 | ヨコナデ | ヨコナデ | にぶい黄橙色 にぶい黄橙色 | 石・長（1） ○ | | 10 |
| 84 | 弥生土器 | 甕 | 口径 残高 | (8.2) 2.3 | 口縁部は「く」字状に外反。端面には凹線文が１条巡る。 | ヨコナデ | ヨコナデ | 橙色 橙色 | 密 ◎ | | 10 |
| 85 | 弥生土器 | 甕 | 口径 残高 | (11.0) 5.1 | 口縁部は「く」字状に外反。端部は上下にやや拡張し、端面はヨコナデにより凹線風に窪む。 | ［口］ヨコナデ ［胴］ミガキ | ［口］ヨコナデ ハケ（11～12本/cm） →ナデ | 橙色 橙色 | 密 ◎ | | 10 |

表５　出土遺物観察表

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 (cm) | | 形態・施文 | 調整 | | 色調 (外面) (内面) | 胎土 焼成 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 86 | 弥生土器 | 甕 | 口径<br>残高 | (15.0)<br>8.6 | 口縁部は逆「L」字状に大きく外反。端部は上下に拡張し、端面に凹線文１条。 | [口] ヨコナデ<br>[胴] ナデ | [口] ヨコナデ<br>[胴] ナデ | にぶい黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>◎ | | 10 |
| 87 | 弥生土器 | 高坏 | 残高 | 2.2 | 口縁部片。口縁部はやや内傾。凹線文４条。 | ヨコナデ | 剥離 | にぶい褐色<br>にぶい褐色 | 長 (3)<br>◎ | | 10 |
| 88 | 弥生土器 | 高坏 | 残高 | 3.7 | 脚上部に５条の沈線文、脚裾部に凹線文の一部が残る。これらの間に貫通しない矢羽根透かしを施す。 | ナデ？ | ミガキ | にぶい黄橙色<br>にぶい橙色 | 密<br>◎ | | 10 |
| 89 | 弥生土器 | 高坏 | 残高 | 4.7 | 深埦タイプの坏部。４条の凹線文が残る。最下位の凹線文上にヘラによるキザミ。 | [坏上] ヨコナデ<br>[坏下] ミガキ | ミガキ | にぶい黄褐色<br>にぶい黄褐色 | 石・長 (1 ～ 2)<br>◎ | | 10 |
| 90 | 土師器 | 焙烙鍋 | 口径<br>残高 | (39.8)<br>3.3 | 瀬戸内型。鍔状の口縁部はほぼ水平に外反。 | ヨコナデ | ヨコナデ | 黒色<br>灰黄褐色 | 微砂粒<br>◎ | 外面に煤付着 | 10 |
| 91 | 土師器 | 火鉢 | 底径<br>残高 | (20.5)<br>9.0 | 高さのある貼付高台。 | ナデ<br>[高台] ヨコナデ | ヨコナデ | にぶい黄橙色<br>にぶい黄橙色 | 密<br>◎ | 内面に煤付着 | 10 |
| 92 | 瓦質土器 | 火鉢 | 長さ<br>幅<br>残高 | 8.3<br>10.8<br>8.6 | 方形の火鉢の隅部。脚部は欠損し、痕跡だけが残る。 | ミガキ<br>[底] ナデ | ナデ | 灰色<br>灰色 | 密<br>◎ | | 10 |
| 93 | 瓦質土器 | 火鉢 | 底径<br>残高 | (25.0)<br>8.3 | 体部外面に沈線文を２条ずつ上下に施し、その間に菊花文と桐文、多数の小さな竹管文をスタンプする。 | ミガキ | ヨコナデ | 暗灰色<br>灰色 | 密<br>◎ | | 10 |
| 94 | 磁器 (染付) | 猪口 | 口径<br>底径<br>器高 | 8.6<br>5.2<br>5.3 | 体部外面に葡萄文、高台に二重圏線を施す。全面施釉し、畳付のみ釉を掻き取る。 | 施釉 | 施釉 | (胎・釉) 灰白色<br>(呉須) 暗青灰色 | 密<br>◎ | 肥前系 | 10 |
| 95 | 磁器 (染付) | 鉢 | 口径<br>残高 | (16.0)<br>4.1 | 輪花鉢。大きく外反する口縁部内側に葡萄文を描く。内外面とも施釉。 | 施釉 | 施釉 | (胎) 灰白色<br>(釉) 明緑灰色<br>(呉須) 暗青灰色 | 密<br>◎ | 肥前系 | 10 |
| 96 | 磁器 (染付) | 碗 | 口径<br>残高 | (11.6)<br>4.2 | 口縁部内面と見込にそれぞれ一重圏線、体部外面に柳文を描く。 | 施釉 | 施釉 | (胎・釉) 灰白色<br>(呉須) 青灰色 | 密<br>◎ | 砥部焼 | 11 |
| 97 | 磁器 (染付) | 碗 | 口径<br>残高 | (13.0)<br>4.9 | 口縁部内面と見込に一重及び二重圏線、体部外面に横帯・多重圏線・笹文？を描く。焼成不良で、釉は白濁し呉須の発色も悪い。 | 施釉 | 施釉 | (胎) 淡黄色<br>(釉) 灰白色<br>(呉須) 暗緑灰色 | 密<br>△ | 砥部焼 | 11 |
| 98 | 磁器 (染付) | 小碗 | 底径<br>残高 | (3.7)<br>3.9 | 見込に一重圏線、体部外面は界線や圏線で区切り、線文や蔓文？を配す。高台には二重圏線。 | 施釉 | 施釉 | (胎・釉) 白色<br>(呉須) 青色 | 密<br>◎ | 砥部焼 | 11 |
| 99 | 磁器 (染付) | 小碗 | 底径<br>残高 | (3.4)<br>2.5 | 見込に一重圏線。焼成不良のため外面の釉は白濁する。畳付のみ釉を掻き取る。 | 施釉 | 施釉 | (胎・釉) 灰白色<br>(呉須) 青灰色 | 密<br>△ | 産地不明 | |
| 100 | 磁器 (白磁) | 香炉 | 口径<br>残高 | (13.0)<br>3.5 | 口縁部はほぼ水平に短く外反。頸部は筒状で肩部は張る。外面だけに不透明釉を施す。 | 施釉 | ヨコナデ | (胎) 灰白色<br>(釉) 明緑灰色 | 密<br>◎ | 産地不明 | 11 |
| 101 | 磁器 (白磁) | 高台付皿 | 口径<br>底径<br>器高 | 14.3<br>4.6<br>3.3 | 輪花皿。内外面とも不透明釉を施す。見込は蛇の目状に釉を掻き取り、重ね焼きの痕跡を残す。 | 施釉 | 施釉 | (胎・釉) 灰白色 | 密<br>◎ | 産地不明 | 11 |
| 102 | 磁器 (白磁) | 高台付皿 | 口径<br>底径<br>器高 | (8.0)<br>(14.0)<br>3.5 | 輪花皿。碁笥底風の底部。見込は輪状に釉を掻き取る。高台内は露胎。 | ヨコナデ→施釉 | ヨコナデ→施釉 | (胎) 灰白色<br>(釉) 明緑灰色 | 密<br>◎ | 産地不明 | 11 |
| 103 | 陶器 | 甕 | 残高 | 16.0 | 外面に縄状突帯文と多重沈線文を施す。内外面とも鉄釉がかかる。 | 格子タタキ・ヨコナデ→施釉 | 格子タタキ・ヨコナデ→施釉 | (胎) 灰赤褐色<br>(釉) 褐灰色 | 密<br>◎ | 唐津焼 No.104 と同一個体 | 11 |
| 104 | 陶器 | 甕 | 底径<br>残高 | 17.8<br>7.9 | 内外面とも鉄釉がかかるが、外底面のみ露胎。粘土紐の接合痕が顕著。 | ヨコナデ→施釉 | 格子タタキ・ヨコナデ→施釉 | (胎) 灰赤褐色<br>(釉) 褐灰色 | 密<br>◎ | 唐津焼 No.103 と同一個体 | 11 |
| 105 | 陶器 | 土瓶 | 底径<br>残高 | (7.8)<br>2.3 | 底部外面に小さい粘土を貼付した脚部が１ヶ所残る。内面全体と体部外面一部に鉄釉がかかる。 | ヘラケズリ→施釉 | ヨコナデ→施釉 | (胎) 灰黄色<br>(釉) 暗赤褐色 | 密<br>◎ | 産地不明 | |
| 106 | 陶器 | 土瓶 | 残高 | 5.3 | 注口部片。内外面とも不透明な鉄釉を施す。 | 施釉 | 施釉 | (胎) 灰黄橙色<br>(釉) 黒褐色 | 密<br>◎ | 産地不明 | |
| 107 | 陶器 | 土瓶 | 底径<br>残高 | (9.2)<br>2.8 | 上げ底の底部。器壁が薄い。内面に半透明な鉄釉を施す。 | ヘラケズリ<br>[底] ヨコナデ | ヨコナデ→施釉 | (胎) 灰黄褐色<br>(釉) 灰褐色 | 密<br>◎ | 産地不明 | |
| 108 | 陶器 | 鉢 | 底径<br>残高 | (13.2)<br>3.3 | 幅広の低い輪高台。弧状の太い沈線文の一部が残る。白い化粧土の上から施釉する。貫入が多い。 | ヘラケズリ→施釉 | ヨコナデ | (胎) にぶい褐色<br>(釉) 灰緑色 | 密<br>◎ | 産地不明 | |
| 109 | 石製品 | 硯 | 長さ<br>幅<br>高さ | 14.7<br>7.6<br>2.3 | 短冊形の長方硯。海部の一部を欠く。縁は細く、縁角はほぼ直角である。裏面に文字が残る。 | | | | | | 11 |

# 写 真 図 版

# 写真図版データ

1．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

| | |
|---|---|
| カメラ | トヨビュー 45G |
| レンズ | ジンマーS 240㎜F 5.6 他 |
| ストロボ | コメット /CA32・CB2400 |
| スタンド等 | トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101 |
| フィルム | ネオパンアクロス |

2．遺物の単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

| | |
|---|---|
| 引伸機 | ラッキー 45MD・90MS |
| レンズ | エル・ニッコール 135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N |
| 印画紙 | イルフォードマルチグレードⅣ RC ペーパー |

3．製　版　写真図版 175 線
印　刷　オフセット印刷
用　紙　マットコート系
製　本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ～ 20　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1. 調査区全景（西より）

2. 埴輪出土状況①（南東より）

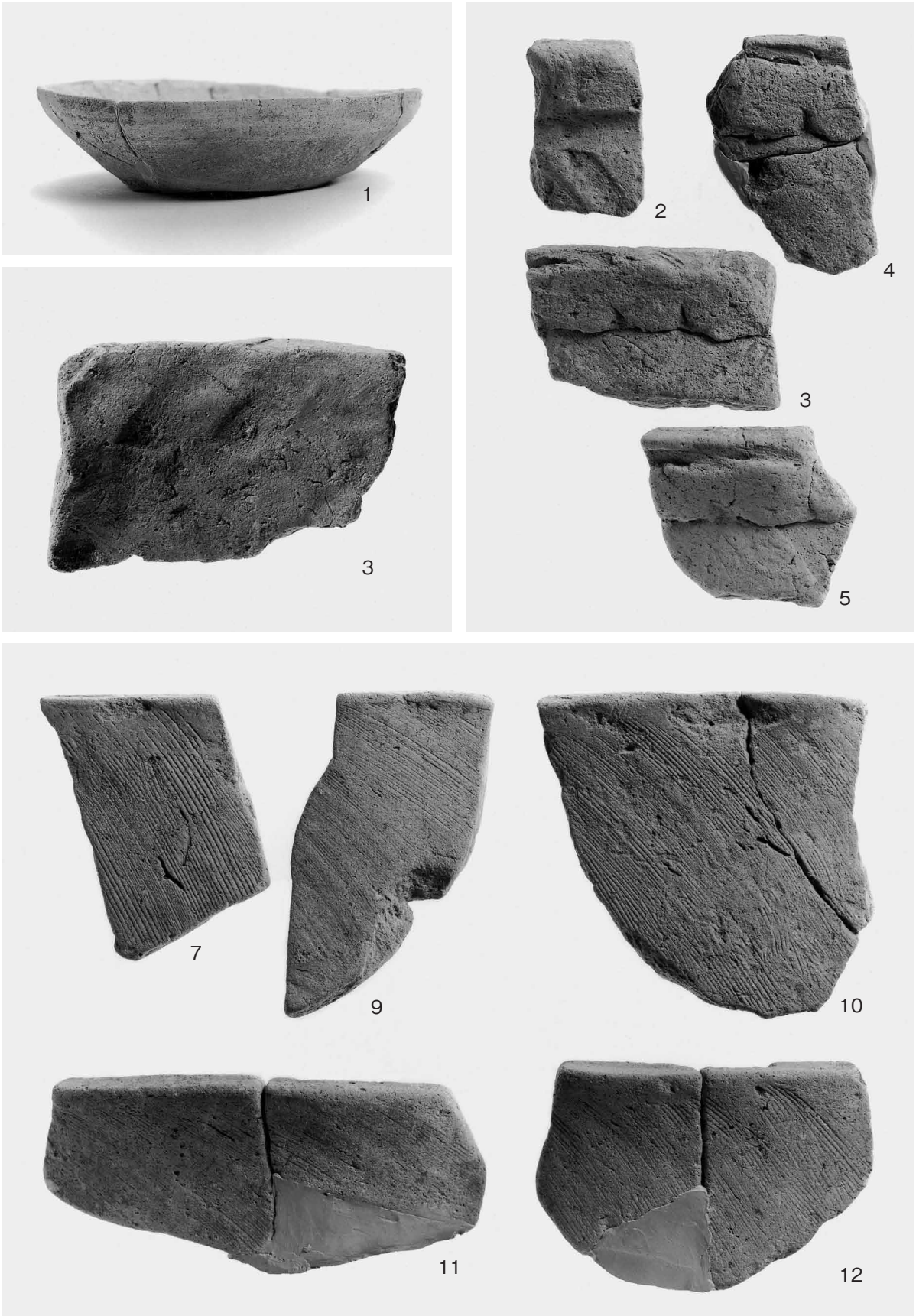
1． 埴輪出土状況②（西より）

2． ＳＤ１検出状況・埴輪出土状況（北西より）

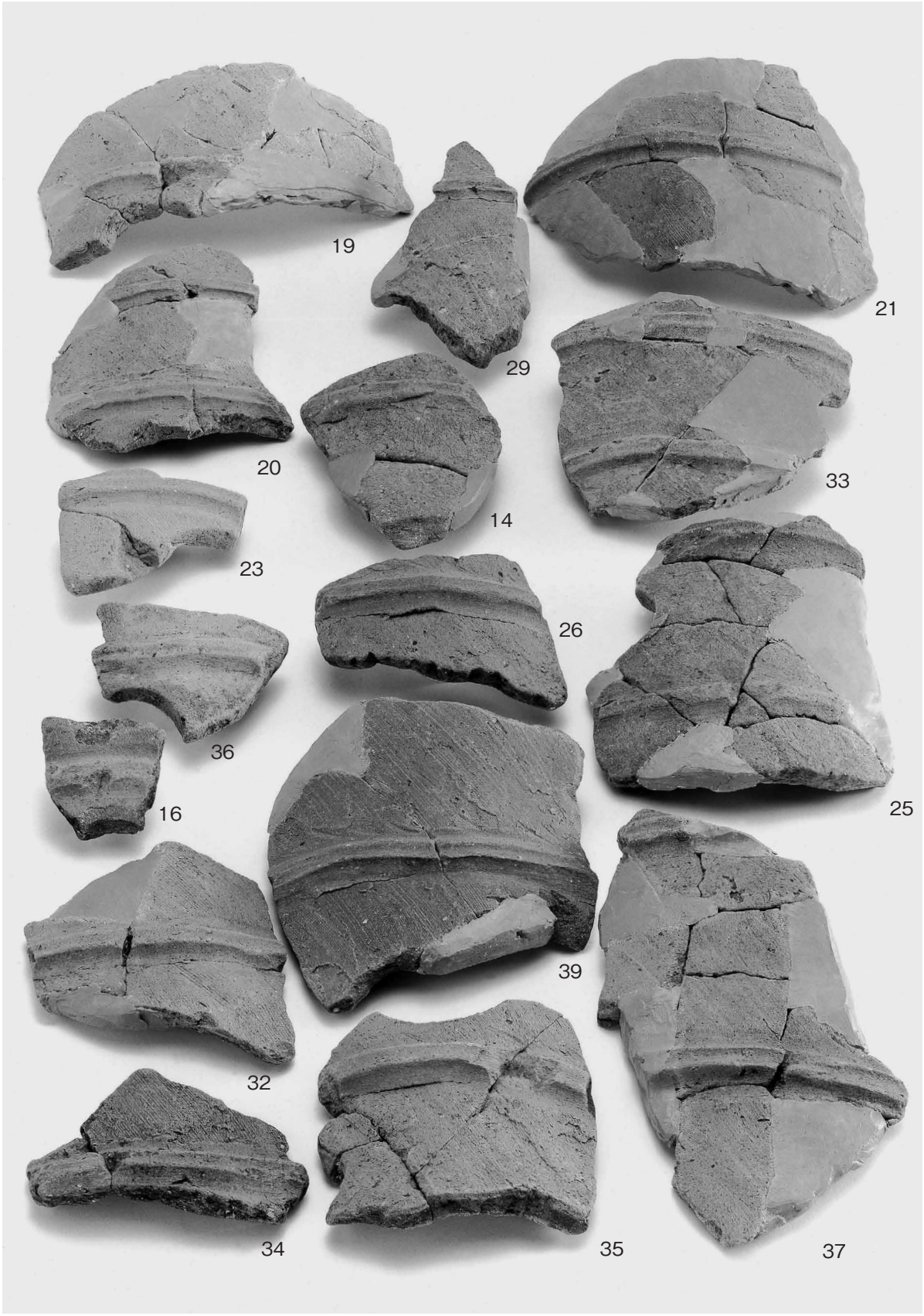
１．ＳＤ２検出状況・埴輪出土状況（北より）

２．円筒埴輪出土状況（東より）

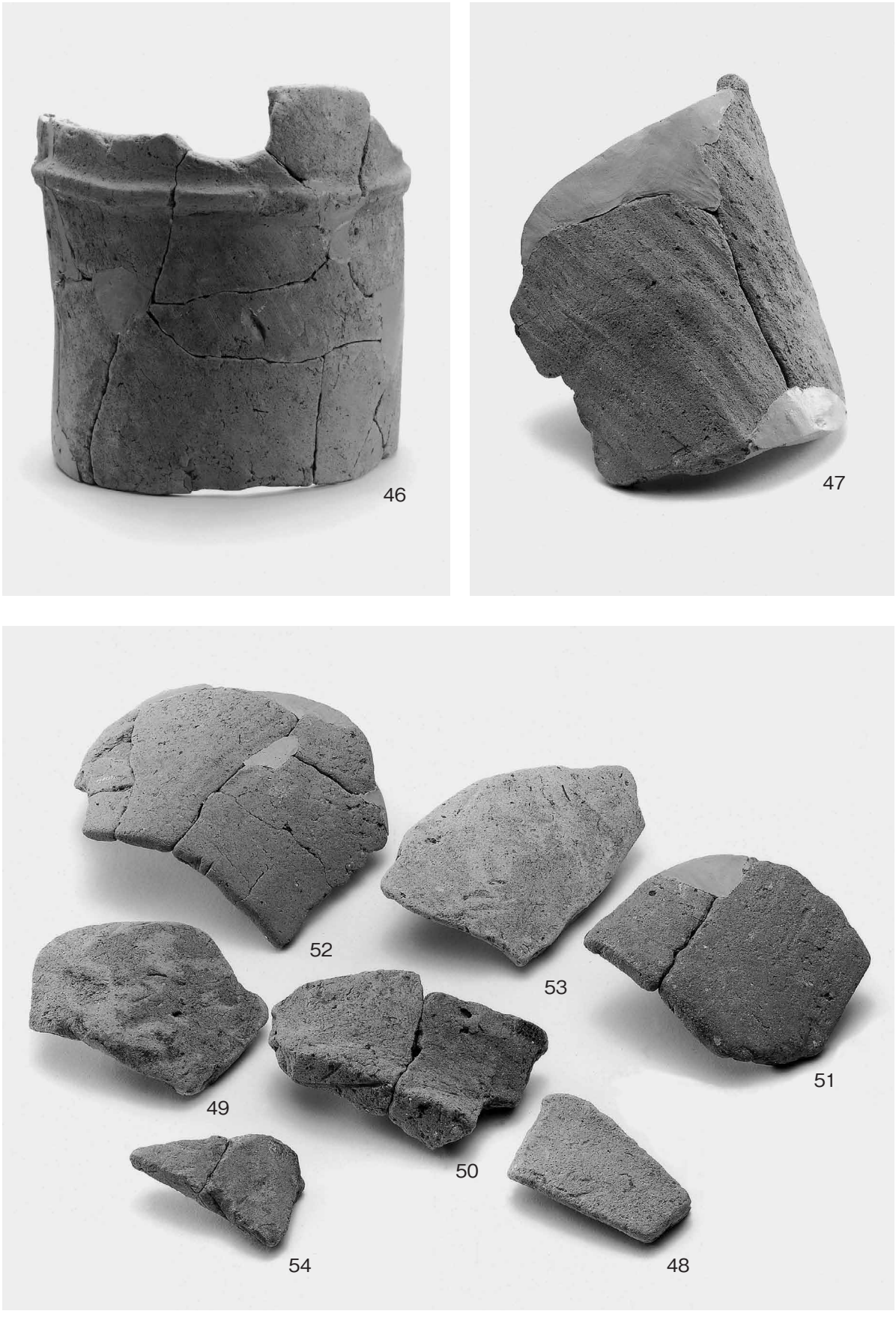
図版四



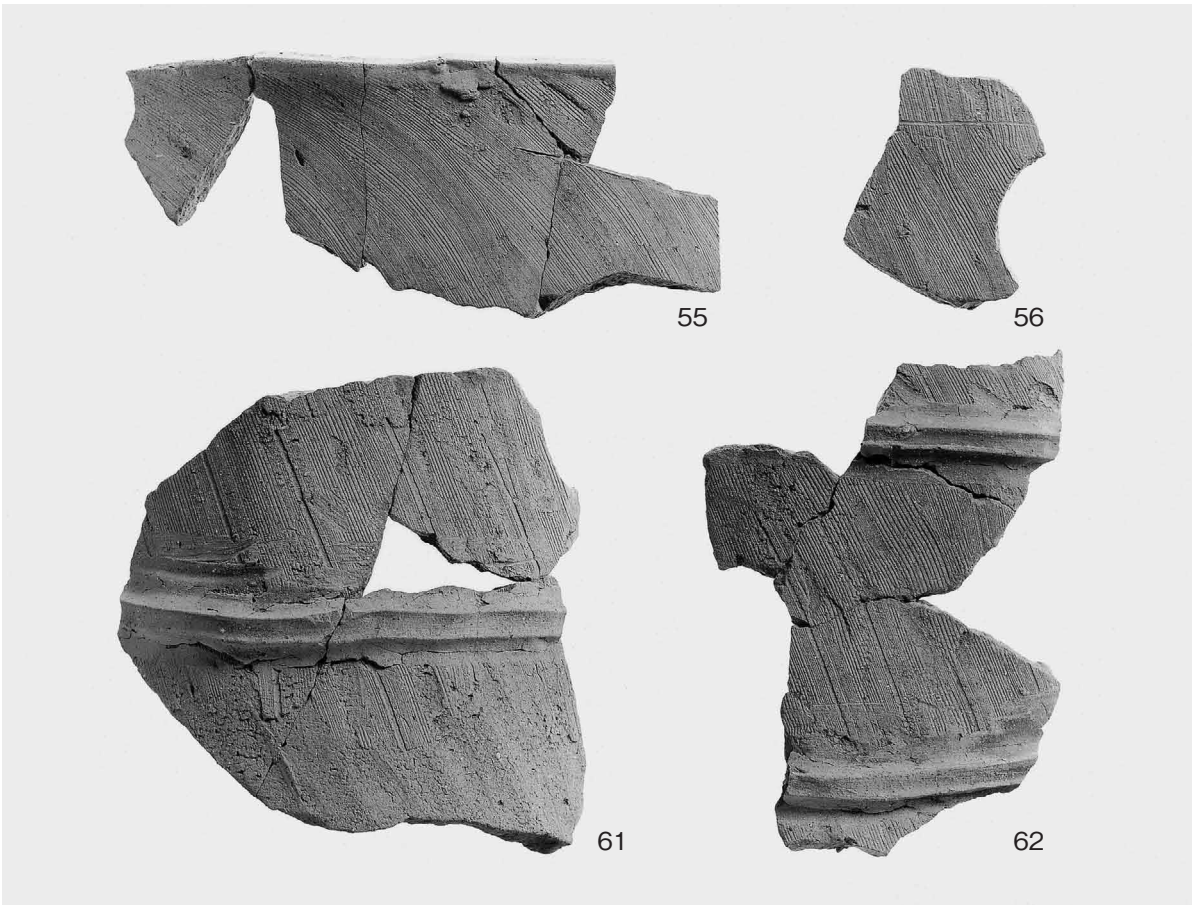

1．出土遺物（土師器：1、円筒埴輪）

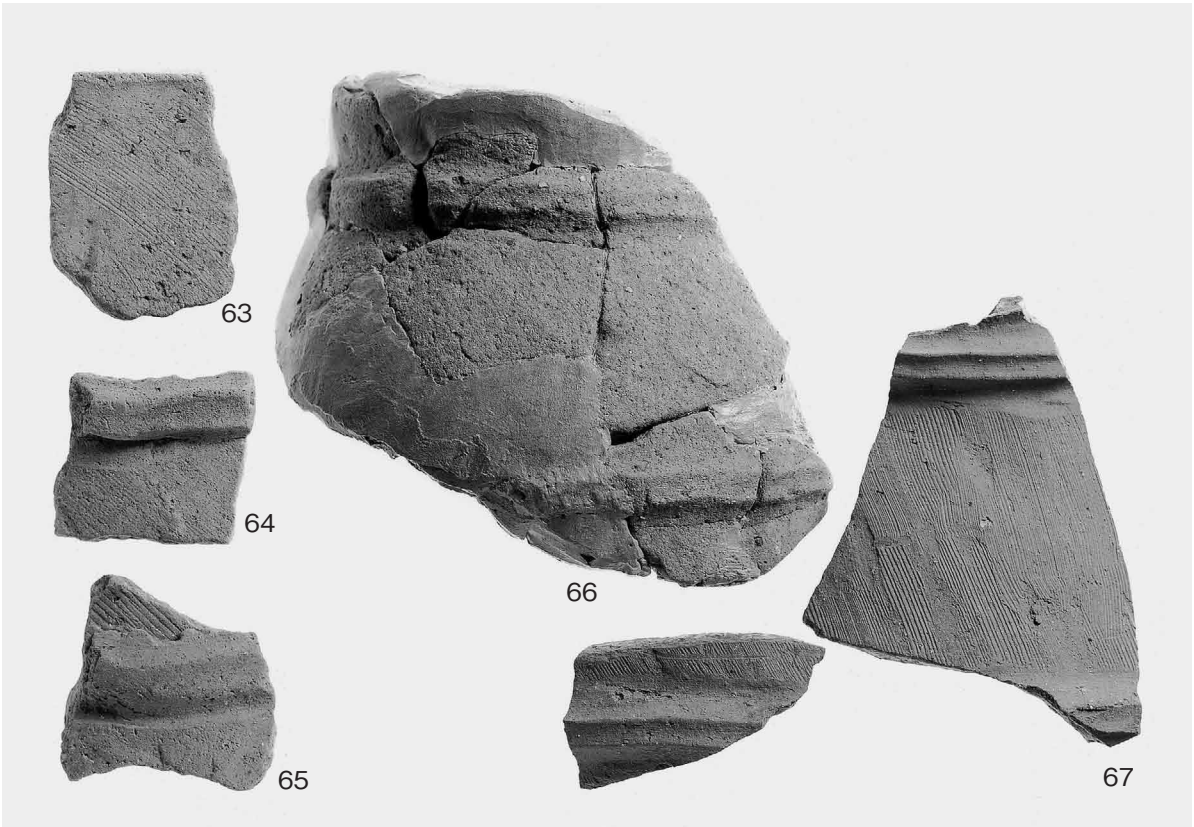



1．出土遺物（円筒埴輪）



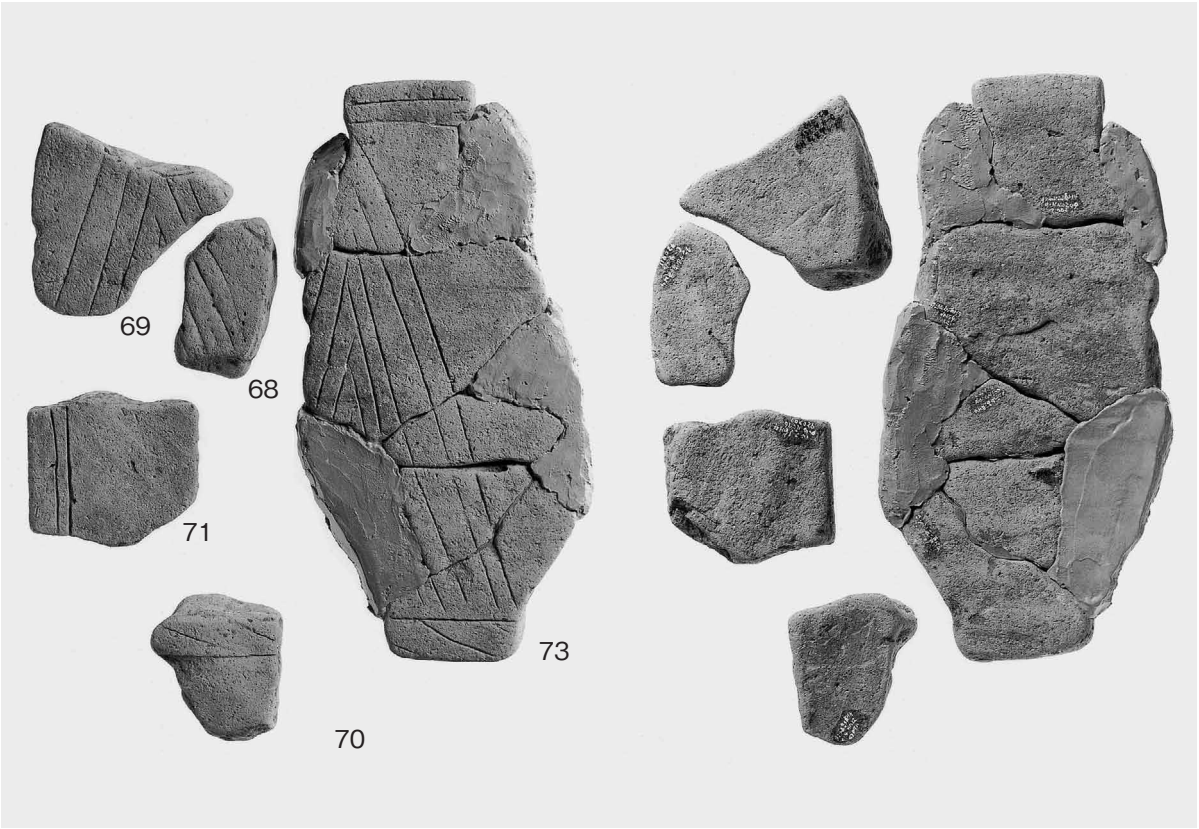

1．出土遺物（円筒埴輪）



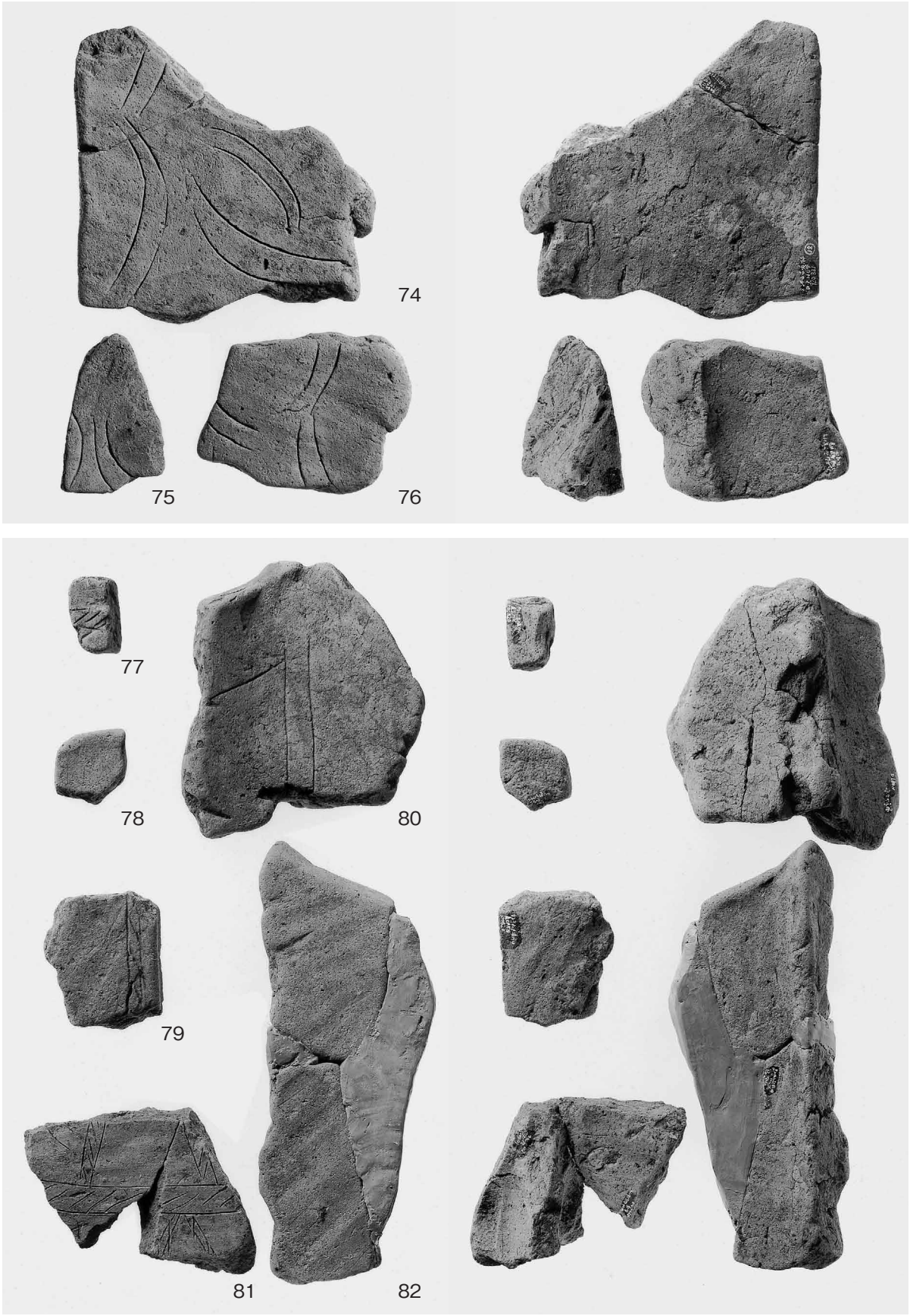




1．出土遺物（円筒埴輪：上、朝顔形埴輪：下）

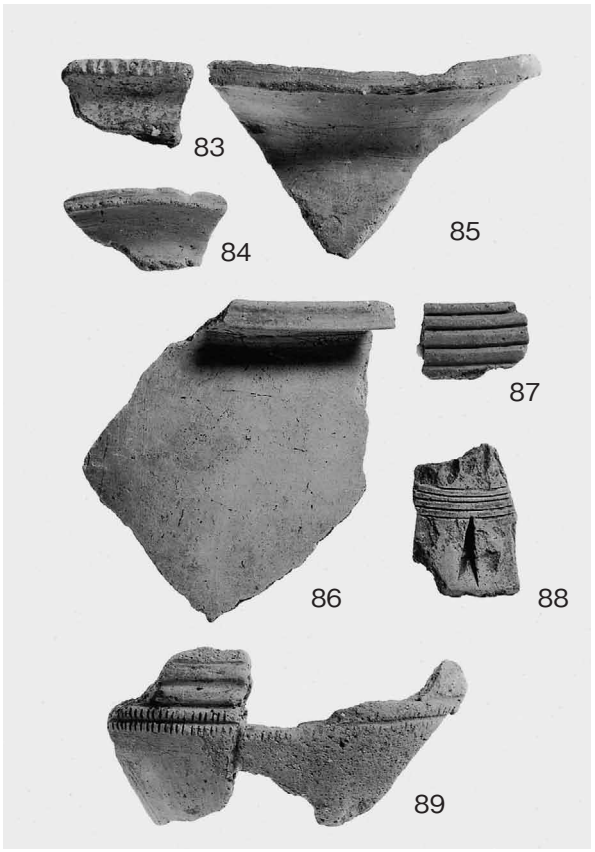
図版 八

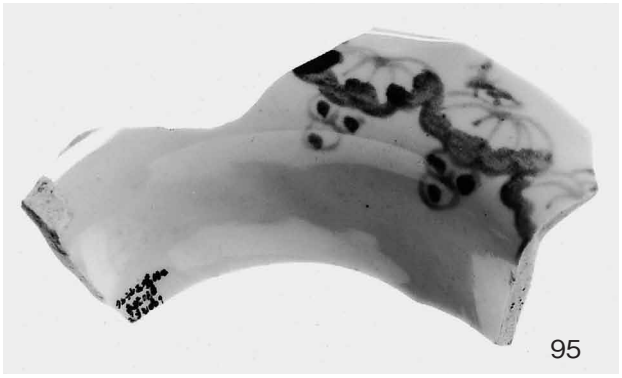


1．出土遺物（盾形埴輪）

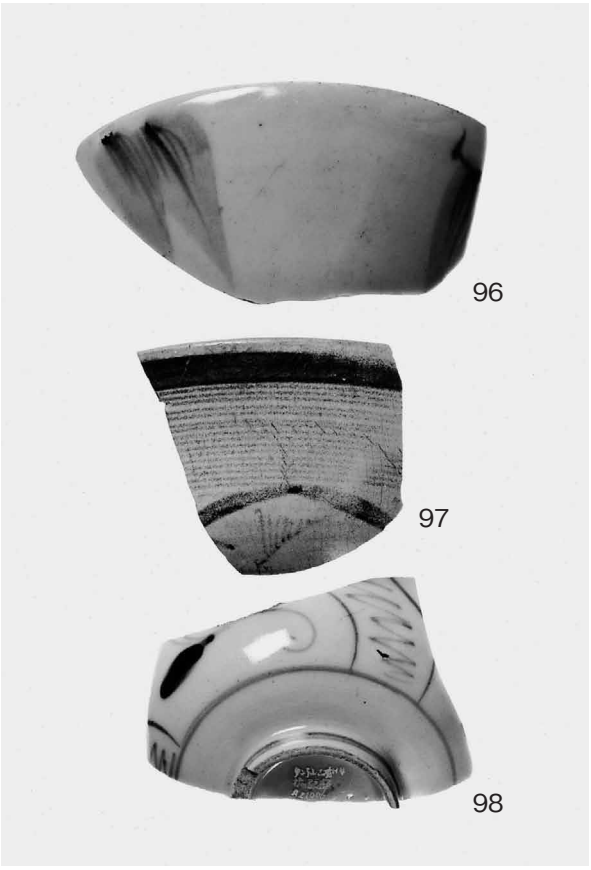


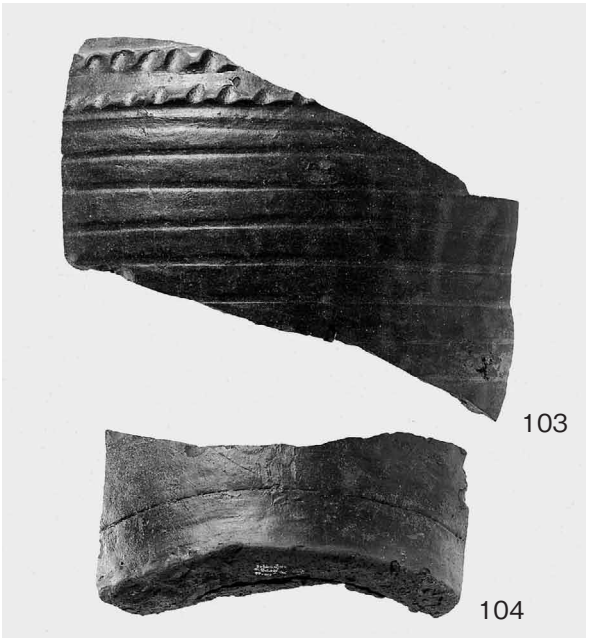

1．出土遺物（盾形埴輪）

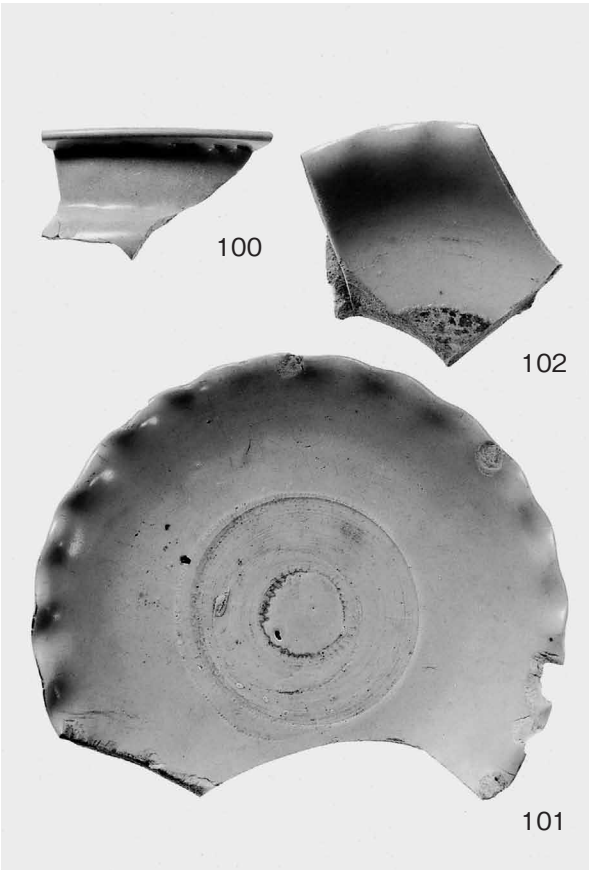




1．出土遺物（弥生土器：83 ～ 89、土師器：90・91、瓦質土器：92・93、磁器：94・95）






1．出土遺物（磁器：96 ～ 98・100 ～ 102、陶器：103・104、石製品：109）

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たんちやま（ふたごづか） こふん |
| 書名 | タンチ山（双子塚）古墳 |
| 副書名 | 国庫補助市内遺跡発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 松山市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 140 集 |
| 編著者名 | 重松佳久・山之内志郎 |
| 編集機関 | 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 市教委：〒 790-0003　愛媛県松山市三番町六丁目 6 番地 1　TEL 089-948-6605<br>埋　文：〒 791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6　TEL 089-923-6363 |
| 発行年月日 | 西暦 2010（平成 22）年 3 月 31 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| たんちやま（ふたごづか） こふん<br>タンチ山（双子塚）古墳 | たかのこ<br>鷹子町 200 － 1 | 38201 | 238 | 33°81′17″ | 132°81′28″ | 19920820<br>～<br>19921016 | 264.63 | 個人開発 |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| タンチ山（双子塚）古墳 | 古墳 | 古墳<br>中世～近世 | 溝 | 埴輪<br>土師器・瓦質土器・磁器・陶器・石製品 | 古墳の祭祀 |

| | |
|---|---|
| 要約 | |

松山市文化財調査報告書　第 140 集

# タンチ山（双子塚）古墳

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成 22 年 3 月 31 日　発行

発　行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町六丁目６番地１
ＴＥＬ（089）948-6605

編　集　財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙 67 番地６
ＴＥＬ（089）923-6363

印　刷　株式会社明朗社
〒791-2112　伊予郡砥部町重光 150 番地１
ＴＥＬ（089）958-6868